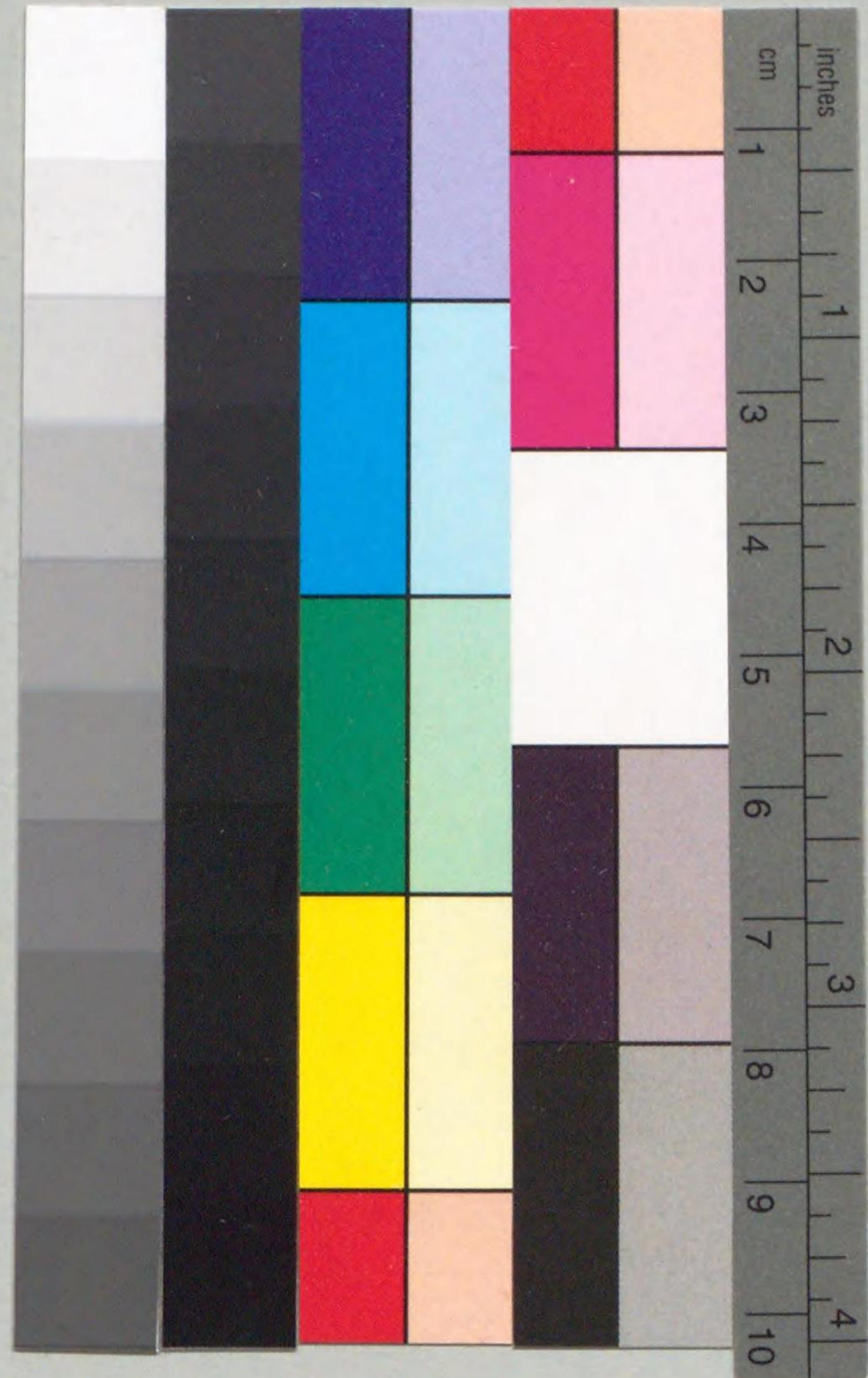


のア
旅
ケラーマン
濱野修譯
ア

292.09
cK29a
H
00031360





ア
ジ
ア
の
旅

ケ
ラ
ー
マ
ン
濱
野
修
譯



Jenderal Kellama

292.09
K29a
H(II)



藏

南京博物院
藏

31360

ベルンハルト・ケラーマンは一八七九年三月四日、中部フランケンの小都會ヒュルトで、小役人を父として生れた。ミュンヒェンの工科大学に學んだが此の方面の業績はないやうである。前大戦中は今日でいふ軍報道班の一員として西部戦線に活躍した。その後文藝院の會員となり、ヘアフェル河畔のウエルダアに、作家としての生活に落ちついたが、その前から本書に見るやうな大規模な旅行を度々やつてゐる。日本へも來遊して丹後の宮津あたりに滞在し、いかにも西洋の流行作家らしい豪奢ぶりを發揮してゐた容子が、一九一〇年及び翌十一年伯林で發行された『日本の散歩』さつさのやつさ、日本の踊り』などといふ書物に窺はれるのである。小説では一九一三年に發表された長篇『トンネル』、一九二〇年に發表された『十一月九日』等が、一番よく讀まれてゐる。

昭和十八年二月

東京阿佐ヶ谷にて

譯者

目次

第一部 イランの心臓

イスファハンへの道……………四

聖都クウム……………一五

死の町……………二六

イスファハン……………三二

イスファハンからペルシャ灣まで……………四三

アベルグウの沙漠を過ぎてエスドへ……………五七

生糸と指甲草……………六四

沙漠に没した古都……………七〇
 黄塵の風(沙漠の嵐)……………七五
 ケルマン……………八三
 隊商と共にペルシャ灣へ……………九三
 緑^{オアシス}地^{シマ}點^{シマ}描……………一〇八
 夜間騎行……………一五〇
 バンデルアバス……………一六七
 眞珠漁……………一七一

第二部 赤色ラマの國

ヒマラヤを行く……………一八〇

『オム マニ バドメ フム』……………一九五
 お伽の都レエ……………二〇七
 神々と人間……………二一九
 犠牲^{いけにえ}の儀禮(曼陀羅)……………二二二
 修道院そちこち……………二二九
 精^{スピリット}靈^{モンスター}の踊り……………二四六

第三部 インド

樂園への門……………二五八
 大幹線路……………二六三
 インドに於ける英國の政策……………二八二

香具師と聖者……………	二九六
インドの心臓……………	三二五
インドの乞食……………	三三五

第四部 シヤムとカムボジャ(泰と佛印)

白象の國……………	三四二
蛇園……………	三五八
シヤムの死觀……………	三六五
北へ行く……………	三七三
チイク材……………	三八一
カムボジャ王の火葬……………	三九二

アジアの旅

第一部 イランの心臓

イスファハンへの道

イスファハン又はイスパハンとも云ふ。イランの略ぼ中央に在る商業の中心地で人口約十萬。

奇蹟だの表徴だのといふものが未だに在るのである！ 自動車は實際に、きちんと七時頃にはもう用意された。我々の二千ポンド(約一噸)もある荷物が積み込まれ、最後に一同が乗り込んだのは有難いことに十時近くだった。

通譯兼従僕としてミルツァ・イスマイル君といふ若いペルシャ人を傭つたが、勿論彼も亦た、荒つぽい勞働に耐へるにはあまりにも高等な紳士だった。この理由からイスマイル君は更に自分の従僕として自分の弟のカリム・イスマイル君を傭ひ入れたのである。そこへもつてきて運轉手のモハメド君までが、やはり自分の助手を一人連れてきた。これは冷却釜に水を注入したりタイヤを膨ませたりする役目ださうだが、成程、かやうな助手の如何に缺くべからざるものであるかは、出發後數時間のうちにはつきりと分つたのである。例へば、坂道などで故障が起つた場合、モハメド君が機械をいぢつてゐる間中、後方で石塊や棒きれを車輪の下に押し込んで車の滑りを喰止めるのは、實

に此の助手の任務なのであつた。結構である。やはりかういふ男も必要なのである。何等の異議をさしはさむ餘地はない。名前はジェムシッドといふなかなか強さうな名だった。

ジェムシッド君は一見堂々とした青年である。アラビヤ系だが黑人種の血が相當まざつてゐるところも確かであらう。肌は黒褐色でラックかニスでも塗つたやうにピカ／＼してゐる。まつ黒な頭髪が蓬のやうにもつれ上つてゐる光景は黒毛の山羊にそっくりだ。そしてあの垢じみた褐色の頭巾を脱ぐたびに、ペンキのやうにまつ黒な頂髪がたつぷり二尺位は逆立するのである。

こんなわけで私の同行者は全部で六人になつた。少々心配になつて私は小つぽけな自動車を眺めずにもられなかつた。正前から見ると、ペルシャ(イランの前名はペルシャである)製の此の危なつかしい箱は著しく右に偏つてゐる。ところが、これが背後から見ると、逆に反対の方へ恐ろしく押出してゐるのである。車軸だつてやはり少し曲つてゐる。こんな車でイスファハンまで行着けるだらうか？

運轉手の左側にミルツァ・イスマイル君、通稱『書記』のイスマイルが腰をかけ、兩足をベンチン罐へ乗せてゐる。着てゐる羊の毛皮は今度の旅行の爲に調へたもので云はゞ外出着だ。蕃紅花黄に染められ、襟と兩袖に派手な裝飾が施してゐる。そこへもつてきて我がイスマイル君は頭がすつぽりかぶさる位の眞白な羊毛の縁なし帽子を被つてゐるのだ。運轉手の右側が私の席、私の眼の下には前云つたジェムシッド君の蓬の如く壯觀な頭がある。彼は私の脚へ脊中を凭せて、いちはやく

扉の前に跣がみこんでゐるのである。残りの三名は背後の箱の上に坐つてゐる。荷物や品物を入れた木箱の類もむき出しのままだ。こんな恰好でいよいよ首府テヘランの大通りを走りだしたのである。

黄と緑の陶瓦で組立てられた南門の直前で、警官が一人我々を呼止めた。無論旅券の検閲だが、特に自動車を入念に検査した。彼にもこの自動車では難しいと思はれたのであらう。俄然、ジエム君の雄辯が展開する。萬一の場合の補給品を出して見せたり、萬事規則通り準備されてゐることを説明したり、陳辯これ努めた結果漸くまた走り出すことを許された。

道の右にも左にも崩れかけた粘土の建物立ち並んでゐる。陶工師の家である。形のよい水壺の幾つか、一列に長く並んでゐるのは、日光に乾すためだらう。蜂の巢のやうに丸つこい爐から煙がもくもくと上り、その下から小つぼけなまつ黒な少年が一人這ひ出してきて、我々の方を眺めてゐる。みごとな青硝子をかけた陶皿と壺の長い行列。

此邊まではまだ生活があつたが、それからやゝ暫くすると、文字通りの死の領域である。どつちを見ても廣大無邊の混砂粘土の原つば、寂莫たる大墓地だ。焼けた煉瓦石が大地に食ひ込み、その各々の曲折がそれ／＼の墓を區切つてゐる。所々、碑文の刻まれた板が立つてゐる。よく磨きこんだ石板だ。それ以外には何の裝飾もない。裝飾物はをろか、立木一本、灌木一本、見あたらないのである。時折り質素な天蓋のある墓石が見える。富豪や資産家の墓だが、これにも何等の裝飾は見

られない。樽ほどもあるかと思はれる大きなピカ／＼した湯沸しが墓地の隅の小卓に置いてゐるのは明かに、會葬者や墓參者たちのための準備であらう。

青々とひらけた野原には、小川や濠や水道の水が澄みきつて流れてゐる。街道の兩側を幾列となく並んで縁どつてゐる繁りは、みんな白楊だ。小數の家畜群が草を食べてゐる。原つばは穩やかな黄金色に溢れてゐる。水溜りのそばでは一頭の馬がいかにも満足らしく仰向けに轉げ廻つてゐた。此邊の土地はよく肥えてゐるのである。

交通が賑やかになつてきた。農夫の荷車や駱駝が、木材や荒地の灌木を乾した束の途徹もなく大きいやつを載せて、町へ運んで行く。小さな驢馬を四十頭ばかり連れた隊商に出會つたが、みな刻み藁をいつばいに積上げてゐる。小驢馬たちは、各自に大きな丸い球を二個づつ引きすつて行くのである。刻み藁を上手にかゞり合せた一見輕氣球ほどもある大きな球である。あんまりかさが大きいので、どうかすると下の方が地べたにすれ／＼になり、まるでその藁束の球だけが歩いてゐるやうに見える。

はや、紺青色の段々山が見えてきた。今日の行程の目標である。街路は申分ない。

アブヅル・アサム村は、同名の土侯領の一部落だが、同時にテヘラン警察管理区内の一番はしに當る寒村である。再び、慇懃丁寧な役人によつて、旅券の念入りな検査が行はれ、それが終つて初めて、交通を遮断してゐる横木がはね上つた。

願望すれば、遙かに幾百千ともないかまどの煙が雲霞のやうに立ちのぼつてゐる。今朝出發したテヘラン市のこれが影繪である。その上に、キラキラと光つてゐるのが紺青色の回教寺院の、あの奇妙な圓蓋屋根。それから更にすつと後方の眩しいやうな白光が、エルプルスエルプルスの雪峰。大空は、それ等を包んであくまで澄明である。まるで古代の聖畫に見るやうな莊嚴の風景である。

つひ先刻まで清新な音を立て、流れてゐた溪流も、忽ち此の莊嚴な風景の中に消え去つてしまつた。道路は深紅色の混砂粘土でだんだん悪くなるばかり、その兩側は廣々とのびた一帯の草原だ。自動車は最初の砂丘を登り始める。所々に霜が降つたやうに見えるのは實は鹽である。

道のすぐ近くに一頭の驃馬の屍體が轉つてゐる。まだ斃れてから間がないとみえ、胸部には青味を帯びた赤い肉が露出してゐた。豺か何か、脚を一本咬みちぎつて引きずつて行つた痕がある。

冷却器が沸騰し、モオタアが唸りだした。慌て、ジエムシッドが飛び降りたが、もう遅い。自動車は後退を始めてゐる。ジエムシッドの手腕を揮ふ最初の機會だ。彼は把手に結んであつた重い丸太を抱へて、それを車輪の下へ押込んだ。モオタアは立往生である。我々一同も車を降りて押さなければならぬ。徐々に自動車は、坂道を克服して前進を始める。我々は再び車上の席に復したがジエムシッドだけはまだ、やゝ暫らくの間自動車と共に走つてから自分の席に飛乗つた。坂道にさしかゝる度びに、同様な操作が繰返されるのである。それから約半時間、我々は到頭最初の氣力學的缺陷につき當つた。

ほろほろの外套をかなぐり捨て、飛び出したジエムシッドがしきりに頭を搔いてゐる。

テヘラン―イスファハン間（約四百五十キロ）の距離は自動車なら一日で優に征服し得る、と主張した人があるが、私に云はせればそれは傳説に過ぎない。私としては、此の運轉手たちに新記録を作らせようなどといふ野心は毛頭持つてゐないのである。此の小さな自動車も一週間四百五十マルクの約束で賃借したものだ。第一日でイスファハンへ行けるなどは考へてなかつた。今日の目標は、テヘランから百五十キロの聖都クウムと定めてゐたのである。

だが、續いて來つた第二回目の故障に直面するに及んで、私はもはやその希望さへ思ひ捨てざるを得なかつた。冷却器はまるで蒸氣汽罐のやうに沸騰してしまひ、殆んど二、三キロごとに立往生しては、ジエムシッドの給水を待つ始末である。水の貯へは車の外側に吊した麻囊の中に在つた。車の疾走と蒸發とを利用して、中の水をつねに冷たくして置けるといふ仕掛けである。

自動車は、油の導管を修理するために休憩した。アブイシウルといふ珍らしい鹽水の川に沿つた小さな隊商宿である。橋の傍に建てられてゐるその隊商宿はなか／＼風流だつたから、私は此の若干の時間潰しに苦情を挟まなかつた。下では、支流の淺瀬に駱駝が數頭、水を呑んでゐる。隊商宿には二組の隊商が休んでゐる。一方は獸皮を、他方は麥粉を、それぞれテヘランへ運搬するのである。

それ等の貨物は丁寧に積み上げられ、きちんと間違ひの起らぬやうに整頓してゐる。駱駝たちも

飼糧を食べてゐる最中だつた。八頭から十頭位づつ一團になり、堆たかい刻藁の山をかこんで、軟かな鼻を突込んでゐる。どれも嬉しさうに鼻を鳴らし、お旨さうに食べてゐる。長い下顎がゆつくりゆつくり左から右へとずれてゐるのが見えた。少し離れて孤立してゐるのは愛に飢ゑた牡の駱駝でもあらうか。口の圍りに泡をふき、唸り、咽喉を鳴らし、兩眼を狂つたやうに光らせてゐる。右脚の膝關節の上を固く縛りつけてゐるのは、暴れるのを防止するためであらう。此の駱駝は、一番終ひに飼糧のある方へ曳き出された時、恐ろしい咆え聲を立て、三本の脚で跛行をひいて行つた。隊商の人達から聞いた話だが、駱駝といふ動物は、對手が人間でも動物でも一旦自分の敵と思ひ込むと、決して忘れないさうである。そして機會さへあれば復讐して來るといふ。復讐の仕方は、頭で相手を突き押し、蹄で踏みにぢるのださうだ。

再び出發。どちらを向いても廢趾と土砂と洗濯の届かない赤裸の山、山、山。此處では電信柱以外には何一つ成長しないのである。暗澹とした雲が威丈高に空を壓して擴がつて來る。天氣が變るのかと心配したが、夜になつたのだ。

まつ闇な中で我々、アリアバットの驛に着き、此處で夜を明かすことにした。

アリアバットは憲兵の駐屯地であると共に隊商宿をも兼ねてゐるが、とりわけ水のうまいことで有名なところだ。小さな川が、ごく貧の農民の小部落の背後から流れ出してゐる。小川の水は憲兵屯所の庭内の廣い貯水池に集められ、そこから街道の下を通つて隊商宿の茶飲場の間をくぐりぬけるのである。

るのである。

暗中に到着したため、砂漠の眞只中に在る此の綠地がどんなに美しいのかで分らなかつた。茶飲所の灯のチラ／＼するのと圓拱式の建物の二三が見えたりである。憲兵屯所の在ることを發見したのも、實は夜が明けてからだつた。私など此處へ着くが早いか濠に落ちこんだりして、それ以來急に用心ぶかくなつてゐるのである。イランといふ國では、大都會にさへこんな人の悪い陥穽や濠がゴロゴロしてゐる。

茶飲み所は蒸氣が濛々としてゐた。木炭がかつかつと燃え熾つてゐる火鉢が二つ三つ、爐の上では湯沸がグラグラ煮えたりしてゐる。八角形に取りつけた客室の外見は恰かも大きな壁龕を四つ並べたやうである。板石を敷きつめた此の茶飲み所の中央には、何んと、綺麗な八角形の泉水が、水を滿々と湛へてゐるではないか。四つの客室は床よりも約一米ばかり高くなつてゐる。さうして其處に跣まつて、茶を啜り煙草をくゆらしながら、積上げた炭火の上に指先を温めてゐる小數の先客のあるのが見出された。何れも、牧夫か駱駝飼ひか、褐色の皮膚をした親しげな青年たちである。

別の客室に、たつた一人で食事をしてゐる商人らしい男がゐる。駱駝に積んだ品物をテヘランへ運搬する途中なのであらう。彼の傍には立派な猫が二匹、やはり主人と一緒に食べてゐる。商人は私を見つけるとすぐ會食を勧めてくれたが、私はお断り申上げるほかはなかつた。此の商人の雇傭したらしいルムペン風の老人が一人、煙管をくわへてゐる。ぼんやりと跣まつて、肺臓の力いつば

いに煙を吸つてゐるのである。やがて、商人は食事を終るとその老人の煙管を取り上げて、自分の口へ持つて行くのだつた。

泉水の傍では、白髯を生やした理髪師が、隊商宿の主人の髪をつみ、襟脚を剃つてゐる。気がついて見ると、いつの間にかやらモハメットやジェムシッドが、先刻の駱駝飼ひの青年たちにまじつて、炭火に温たまりながら無駄口をきいてゐた。

我々の泊る部屋は、イスマイルが見つけたしてきた。完全に空虚だが氷のやうに冷たい部屋である。床は粘土を踏固めただけで、壁もじめじめと濡れて煤けきつてゐた。壊れた扉は閉すことが出来ないから、もう一つ壁に風穴のあるのが云はゞ餘計物に等しい。止むを得ず、寒氣を防ぐため持參の箱の蓋を一枚犠牲にした。

イスマイルは壊れた扉の外で野營の支度をしてゐる、助手やジェムシッドは荷物を管理するため自動車の中で眠ることゝした。夜はまだ凍えるほど寒いのであるが、誰も彼も頗る上機嫌だ。

茶飲み所の中では歌が始つた。咽喉自慢のジェムシッドの歌が一番きれいである。

やがて夜が更けると共に、溪流のせゝらぎの音だけが聴えてきた。夜のしらじら明けに、莊嚴な鐘の音で目が醒めた。賑やかなのは此の隊商宿だけである。駱駝の隊商の一團が黎明の薄光の中に、此のリアバット驛へはひつて來たのである。前面から見ると、大きな積荷を左右にぶらさげた長い脚の上に、細長い頭が高々と空にのびてゐる此の動物の恰好は、

どう見ても幽霊か化物だ。駱駝といふよりもいつそ、翼を左右に張つた大きな鳥のやうである。

先着順に駱駝が庭へ並んで、順々に脚を折つて地上につく。這ひ、荷物を外して貰つてゐる。それから飼糧がばら撒かれ、彼等はそれを圍んで長い首をたれる。飼糧は刻み藁へ若干の棉果を混ぜたものである。

再び新しいどよめきが揚つて、第二の隊商がそろそろと庭にはひつて來た。先着の駱駝の二三が首をあげて、物珍らしげに眼玉をグルグルさせながら、後れて來た仲間と挨拶するやうに二三歩近づいて行く。駱駝の挨拶は、長い頸を一層長くして、お互ひに鼻頭をかき合ふのである。

さて、我々が四肢に残つた夜氣の冷たさを振り落して出發した時、朝はまだ早かつた。お茶と若干の木炭と、それから冷たい寢室との料金として、此處の人の善い主人に支拂つた金高は一トオマン、約四マルクである。イスマイルの宿泊料は無料。運轉手のモハメットは茶飲み所の火鉢の横に寝込んだと見え、まるで石炭夫のやうな顔をして戻つてきた。自動車の中で夜を明した助手とジェムシッドの二人は寒氣のためにすっかり凝結したやうになつてゐた。

さて此のリアバットからクウムへの道は、私にとつて久しい前からの興味の対象だつたのである。道は、大きな鹽水の河として有名なダルジャ・イニマク河の河岸に沿つて續いてをり、河の大きさは、長さ約一百キロ米、幅が広いところで約五十キロ米もある。テヘランとクウムの中間にこれ横はつてゐるのだ。

最初のうち、道は荒涼たる草原の間を歩き過ぎてやがてあまり高くない山の裾野にさしかゝる。鹽湖は我々の足下に在るのだ。よく磨きこんだ銀の鍔のやうな形でキラ／＼と光つてゐる。數キロ米の幅で湖邊をすつぽり取りかこんでゐる暗紫色の帯が恐るべき濕地帯である。その向うに、雪をいたゞいた一連の峯々が、まるで大理石の肌へ黒い木理を描いたやうに展開してゐる。

我々は急いで湖岸に降り、濕地帯の一部を貫いてゐる直線のやうな通路を、明瞭に識別することが出来た。その全長は約四ファルザッハ（大略二十四キロ米である。紫堇色の濕地帯の湖に近い邊から、點々として煙のやうなものが立ち昇つてゐるのは、鹽燒きをしてゐるのであらう。だんだんに、竈や天幕の存在も見つかつた。私は鹽燒の實況を見たい欲望に襲はれた。が、彼處までは十キロ米はあらう。尠くとも徒歩で數時間かゝるし、第一、通路がまるで分つてゐない。と云つて自動車を此の濕地帯に乗入れることは明かな狂氣の沙汰だつた。

此の鹽湖には、エルブウル山脈から發して南流する水の悉くが流れ入るのである。昨日我々の渡つた溪流もさうだし、昨夜、隊商宿の枕に響いた小川の水もやはり、此處へ流れこんでゐるのだ。

夏季になると、湖水は完全に涸上つてしまひ、其處に、クウムからテヘランへ通ずる狭い間道様の捷徑が、隊商隊のために開かれるのである。現在のやうに、水が濕地帯まで溢れてゐる場合は、勿論出来ない話だし、第一さういふ近道など作らうたつて作れるものではない。湖水の涸上る夏期といへども、此の近道を利用するには尋常でない苦勞が伴ふのだ。一步道を誤れば、忽ち駱駝は表

面だけ乾いてゐる濕地帯に沈没し、全隊商の全滅した例もないではないのである。

我々の通路は再び山へかゝつた。自動車は、湯氣を立て、喘ぐやうにして凹凸の激しい峠路を登つて行く。再びジエムシッドの活動が始まる。かうなるともう車を進めるのでなくて、車と一緒に歩いてゐるのだ。峠に行き着けば、二百三百といふ數の、小さな岩片で築かれた低いピラミッドが立つてゐる。これ等の尖塔は、聖都クウムへの巡禮の信者たちによつて建てられたものである。といふのが、此の峠に立てば始めて、長い通路を克服してきた巡禮者達の前に、遙かなる回教寺院の黄金のまる屋根が燦然と映るのである。

だが、此日は何も見えなかつた。ひどく水蒸氣が濃かつたのである。黄金のまる屋根を戴く回教寺院を捧げられた聖女は、我々如き不信仰者にはその美しい眺望を許さなかつたのであらう。

聖都クウム

イランの回教徒（特別にシイテンと呼ばれる）の信奉する聖地が三つある。西方ではバグダッドに近いケルベラ、東方ではアフガニスタン國境に近いメシェド、第三がイランの中心に位するクウムである。ケルベラにはモハメット（普通マホメット）の第三後繼者なるハッサンの墓がある。昔、ケルベラの激戦で七十二人の勇士と共に悲劇の死を遂げた人である。メシェドにはやはり第八代の後繼

者レザの墓がある。さうして此のレザの姉に當るマスメエの墓が、我々の目ざすクウムに在るのである。

クウムは信心ぶかいイラン回教徒にとつて最高の憧れの地の一つである。彼等は年々、以上三箇所の聖地を訪ねて巡禮の旅を重ね、何千人ともない信者たちが、數千キロの困難な行程を歩き歸りしてゐるのだ。ひとりイランの者ばかりでなく、アフガニスタンに住む回教徒も亦た、騾馬や駝で騎行する困難を克服しながら、北東アフガニスタンの連峯三千米の嶮路を突破して、巡禮場の聖地の砂に、額づかうとつとめるのである。

かやうにして聖都クウムは、小さな町ではあるが敵愾と信仰の空氣に掩はれた神祕の都だ。朝は駱駝の鈴音とムエツジン(アラビヤ語で、やはり回教徒の意)の朗らかに明るく挨拶の聲に明けて行く。(ムルシャ人はムエツジンといふ代りアサムグウと呼ぶ)さうして夜はやはり彼等の夕べの祈禱と共に町の眠りが始まるのだ。クウムの町は連峯の壁に抱かれた平地の上につましく横はつてゐる。完全にヨオロッパの影響を蒙つてゐない。つい數年前までは、外人の出入をさへ許さなかつた。寫眞を撮影することなどは今日でも容易でない。我々も無論、寺院でカメラを向けないやうに警告されたのであるが、實は内密に二三枚撮影した。だが、不本意ながら此の聖地を潰さざるを得なかつた異國の旅人の生命は、危ふいのである。露顯したが最期だ。狂信的な市民は立所に彼を石を以つて撃殺するかも知れない。實際には、數年前の話だがテヘランでアメリカ領事の虐殺事件があつた。彼

が聖蹟の一つである井戸を撮影したことが、狂信的な市民を激昂させたのである。

八代目の教祖レザの姉に當るマスメエを祀つた寺院の結構は文句なしに莊麗だつた。大小二本づつの、すんなりとした、やさしい紺色の招檣(尖塔のこと)、高い入口の門は碧瑠璃の陶瓦で掩はれ、それ等を壓して黄金の球莖状のまる屋根が、日光の下にさんらんと輝やいてゐる。此の圓筒形の建築はいぶし金のやうな光を放つてゐる。

我々のやうな回教徒でないものをカファイルと謂ふが、これは明らかに、黑人に與へたカッフエルと同義語らしい。そして、そのカファイルである我々には、本來なら此の寺院へ昇殿することが許されないのである。だが倅ひ、私の通譯のイスマイルはかねて此の聖女の崇拜者だつたから、その執成によつて、此の高名な回教寺院の内部を記録する機會が與へられた。

門内に入ると大きな庭がある。イスマイルは五百米位だといふが、私の見たところでは百米位であつた。そこに泉水があり、澄みきつた水を湛へてゐる。それから驚いたことに、同じ庭の中に小さな時計臺が二基も立つてゐた。寺院の扉は全部銀張りである。小さな銀の手、足、眼——私はかういふ光景を町の慈善市で見たことがある——病が癒えた病人たちのお供物なのである。内陣へ一歩足を入れると、聖女マスメエの靈廟がある。靈廟を護る格子戸も重さうな銀の格子であり、其處にもいろ／＼な奉納品や小さい人形などがつりさげられてゐる。いづれも、その一つ一つが信徒の願望の具象なのだ。蠟燭がいたる處で燃えてゐる。百二百、いや何千といふ數かも知れない、イス

マイルも一本寄進させられてしまった。

『見えるかね君、聖女様のお頭くぶの後うしろがまつ闇ぢやないか！』と案内の回教僧モオウがわざとらしく大きな聲を出す。イスマイルもこれでは、否が應でも一本はづまざるを得ない。蠟燭一本の代は一克蘭(四十ハンニヒ)である。

だがイスマイルは大變な上機嫌だつた。彼は暇をぬすんで細君へ電話したのである。此の強しんか者は細君を二人もつてゐる——電話した話手はテヘランに住む細君の方で、その愛妻がかう云つたのである。『お部屋の暖爐は燃えてゐるけれど、あんたがゐないので寒くつて淋しい。お茶は沸いてゐるけれどあんたがゐないからちつともお旨いじくない。あんたそんな遠くまで行つちまつていつお歸りになるの、あたしもうとても辛抱しきれないわよ……』これに對して我がイスマイル君はかう返辭したのである。『旅なんてものは待つてる間は長いが、なアに、戻つて來りやもうほんの一日みたいな氣がするもんさ……』

寺院の近くに廣大な墓地がある、混砂粘土コハヤの原つばだ。墓には、佛の名を刻んだ煉瓦石が立つてゐるに過ぎない。此下に眠つてゐる死者たちは、聖女の身近に葬むらいたいばかりに何百哩の遠い路を運ばれてきたのである。かくして彼等が天國に召される日、聖女は彼等をたすけて神アラフの前に額ぬかづかせて下さると堅く信じてゐるのである。

小さな物賣店がありそこで綺麗に銘を刻んだ混砂粘土の大きな銀貨位の型のものを賣つてゐる。

お祈りする時にこれへ額をすりつけるのである。何しろ聖地の土つちだから靈驗あらたかだといふ。

たしかに、此のクウムが聖地であることは疑ひを容れないであらう。

一例を擧げて云へば、クウムの聖女は私生子ていせいこといふものを容赦しない。假に一人の私生子が偽はりの父親の名を記した出生證書を持つて聖地に足を踏入れると、彼は直ちに鼻血を出すのである。更に東方の聖地、即ちアフガニスタンの國境に近いメシェドの、レザを祀まつつた寺院で行はれてゐる信徒たちへの鑑別法は、一層變つてゐる。其處では一基の石を使ふのである。誰にでも容易に持上げられる石だが、それが私生子であると、どうしても持上らないといふ。此の話はイスマイルから聞いたのだが、此の男はどうも、何かにつけてクウムよりもメシェドの聖地の肩を持ちたがるやうである。第一、メシェドの寺院の方がずつと金持ちでさ、と彼は云ふ。召使ひが二百人、これが毎日伽藍の中を掃き浄めてますよ。坊さんも二百人ゐてこれが晝も夜もお祈禱してゐるんです。信徒からの寄進が大變なもので、米だの麥だの反物だのいろんな品物が山のやうになるんで、あんまり澤山になると拂ひ下げましてね、或る寺院なんざその利得もうけだけで立派に食つて行けるんです。——

メシェドの容子をよく知つてゐるイスマイルには、聖地としての靈驗もクウムのそれとは格段の違ひだと思ひこんでゐるらしい。だから例へば、人力ではとても持上げられない大石が天から降つて來る話なども、彼は大眞面目で吹聴する。或時はまた驢馬うまが、馬方うまかたの制止をふり拂つて院内の祈禱所に入りこんだ話などもきかされた。つまり、生命のない石や愚かな驢馬までが、教祖レザの聖

なる力にひき寄せられて祈禱所の格子戸に押し寄せずにゐられない、といふのである。

何しろ此の男はメシエドの聖地に居たことがあるだけに、いろいろ珍らしい話を知つてゐるのである。

さて、敬虔な巡禮者たちが長い長い巡禮の旅の疲れを休める廣大な墓地を抜けると、クウムの市場街につき當る。テヘランの市場街も美しかつたが、墓の都クウムのそれにも、特殊な忘れられぬ莊麗なものがあつた。押し合ひへし合ふ人の波で、市場の店はいつも満員である。その中を悠々と駱駝が通る。驢馬や驢馬の隊商が山の如き荷をつけて通る。美々しく飾つた騎馬の紳士は、町の貴顕でもあらうか。此處に滞在してゐたら、一週間でも飽かず見物することが出来るであらう。

我々もいろいろ買ひこんだ。案内役は宿舍の小さな娘である。やつと十歳位だと思ふのに、もう一人前に顔へ覆布をつけてゐる。娘は、我々の買ひこんだ品物を自分で擔いで歩くのが大いに自慢らしう。

ペルシヤ式の都會の市場には必ずシヤハルスウ（四面路、十字路の意）と呼ばれる大きな廻廊があるが、特に此の町の廻廊は素晴らしかつた。建築學的に云つても構成的に見ても、確かにこれは傑作である。最初一瞥したとき、私はこれを古い寺院かと思つた。中央のまる屋根をめぐつて無數の小さな圓蓋が房のやうに群がり、それ等が實によく組み合されてゐる。一見、巨大な貝殻の洞窟のやうなのである。まつたく、稀に見る高貴と純潔との表徴だ。

その下の、廻廊のすつと奥の上に、絹や反物が積まれ、石を分銅にした原始的な秤が置いてあつた。

クウムの宿舍はアリアバットのそれより幾らかましである。部屋は相變らず寒くて風通しがよすぎたが、とにかく安物ながら絨緞が敷いてある。夜半頃、猫に起された。我々の携帯品にぢやれてゐたのである。宿料は安くない。焚木と木炭の代として支拂つた金額だけでも、獨逸なららくに一週間の暖房費である。別に部屋代がニトオマンで約八マルク、驚ろくべき要求だ。

翌朝出發するとき、クウムの町はもうすつかり起きてゐた。兜形の橋の上を駱駝や驢馬や驢馬等の隊商が行く。まことに一幅の聖畫を見る心地である。動物たちは川岸へ水飲みに曳かれて行く。此の川の名はアブイコムサル、これもやはり、昨日通つた河川と同様、あの鹽水の湖へ流れ込むのである。

回教寺院の黄金のまる屋根がキラ／＼と輝やいてゐる。だが待て——そのまる屋根の眞下あたりで、流れに屍體を洗つてゐる一團があるではないか。まつ白な經帷子や、硬直した屍體の膝頭などが隙々に見えるのである。さうしてその下流では、女達が衣類を洗濯し、動物も人間も同じ水を飲むのだ。人生といふものはこのやうにも單純で無雜作なものなのである。

山々の雪は解け、岩が日射しに光つてゐる。半分析ちかけた隊商宿に駱駝が満員になつて休んでゐる。新しい橋が、別の急流にかゝつてゐる。此の溪流の水もやはり昨日の鹽水湖へ行くのだ。橋

の上手に小さな回教寺院が見える。何れ相當な聖者を祀つたものであらうが、誰も管理者がないと見えて門は開放しである。境内の中央に靈廟がある。大理石の骸子型だ。清純な非常にきれいな編み物の筵と、銘が若干あるきりで、他には何も無い。傍に小さな墓地がある。なんといふ静寂であらう！ 此處で眠る者はさぞ安らかな眠りが得られることであらうと思ふ。

南方に遠く高い雪の山が現れた。我々が、明日征服すべき隘路はあそこに在るのだ。尠くとも二千米を超える山である。雪をあびた山々の間に、石塊ばかりの荒野が、なだらかに且つ荒涼と擴つてゐる。初めて本當に暑くなつた。物音一つなく、生物のある氣配もない。鳥の聲さへ聽こえないのである。地上は砂と砂礫——行けども行けども小石と砂利の連続だ。そこら一面に低い、涸乾びた灌木が砂埃りを被つたまゝ繁つてゐる。まるで石灰でも浴びたやうだ。之等の灌木が燃料になるのである。至るところでかうした灌木の束を積んだ隊商に出會ふ。季節はちやうど、灌木を集める頃に向つてゐるのだ。

道は行けども行けども涯しがないやうに見える。山は、自動車が進むに連れて、それだけづつ後退してゐるやうである。電信線が、或ひは右に或ひは左に、街道の上を走つてゐる。これだけが單調と平板を破る唯一の變化だ。崩れ落ちた隊商宿が一つ、風にやられて僅か残つた墻壁だけが、まるで淺瀬に乘上げた難破船のやうに残つてゐる。此邊の夏はさぞ暑いであらう。勘定して見たら、數分の間に十頭の駱駝の形骸が數へられた。その或ものは殆んど形が崩れてゐない。巨大な此の標

本は、彼が斃れた時の恰好のまゝで轉つてゐる。勿論、バラバラに解體して形の分らないものもあつたが、時には頸部の椎骨まではつきり見分けられるものもあつた。或ひは、小さな禽獸の類の力では持て餘したのでもあらう。

やがて、自動車はから／＼に涸上つた河床を走り始めた。傍の伴侶は眠つてゐる。ジエムシッドには風がよつぽどたかつてゐると見え、マントにくるまつた身體を頻りと揺ぶつたり、時々は胸の邊から二五匹つまみ出して嫌といふ程壓潰したりしてゐる。

私が煙草に火をつけようものなら、彼は斷りもなしに私の煙草入れへ手を出す。そして半分居眠りをしてゐる運轉手の分も、火をつけて口へくはへさせてやるのである。

こんな風にして今日の目標なるチリジャン村に着いたのは午後の日がまだ高い頃だつた。まつたくの話、チリジャン村の人達ほど親切な者はないと思つた。鶏を欲しいと思ふと、すぐ誰かしらが羽も届けてくれ、然も値段はひどく安い。彼等に、そこの石で頭を打割れと云つたら喜んで實行するかも知れない。此の村の人は、一切を友情的に引受け、してくれるのである。

村の男たちは、日當りのよい墻の下に跣んで、糸を紡いだり編んだりする。村の流行色は鋼色の碧である。碧いダブダブなズボンに碧いゆつたりした上衣。それへまつ白な腰帶をしめる。女達もあまり遠慮せず、例の覆面をして歩いてゐる。

私の運轉手たちに取つてはまさに第七天國だつたらう。彼等が茶を飲み菓子を食べる時は、何等か

の形で私のポケットから支拂はれるのである。ジェムシッドの如きは、直接私の罽の罽詰を貰ひに来る。テヘランで買つておいた、たつた一つ残つた油漬の罽の罽を興へると、此の一罽の小つぽけな魚がさつそく、煙の濛々とたちこめる喫茶場の引張風になるのである。彼が油漬罽を頬ばることに、居合す村の客人は嘆賞の聲を洩らすのだ。

それから徐ろに阿片煙管に火をつけ、鼻孔も口も一緒くたに煙を吹く。やがてジェムシッドの眼光が凝固し始める。今彼の眼に映るものは、イランの隊商通路を旅行してゐる自分の姿だ。隊商の主人として小罽の罽詰を駱駝の背に山と積上げた自分自身の姿だつた。立派な紳士として、外國語を喋り、いつでも惜気なく錢を支拂ひ涙眼の乞食を見ると銅錢を投げてやる自分自身の姿である。仕合せなジェムシッド！

彼が、ボロ服と風の中で楽しい空想を描いてゐる時、我々は少しでも温くしようと空しい希望を追つてゐたのである。我々の泊つた茅屋は、氷のやうに冷たかつた。ひび割れた扉には反古紙が貼つてあるやうな部屋なのだ。

あまりの寒さに私は室外へ出た。まつ闇な庭に火が燃えてゐる。自動車で貨物をバグダッドからテヘランへ運ぶ途中の商人だつた。私はさつそく話しかけた。イエルサレムの人ださうで、少しは英語が話せる。翌朝、拂曉に此の男ともう一遍顔を合せたのだが直ぐには見分けがつかなくなつた。自動車のモオタアの下でかつかと火を燃やしてゐるのは、凍結した油を液體に戻すためであるとい

ふ。私は見てゐてハラ／＼した。今にも貨物を満載した車が炎上りさうな気がしたのである。だが、何事もなかつた。

私は此の商人と別れの握手をした。彼は北へ、私は南へ行くのである。

『山路には雪は少いです……』と、彼は云ふ、『もうほんの五吋位なもんですよ。』

私は胸をなで下した。白状するが、今日の行程には若干の不安を抱いてゐたのである。我々の此の、重い荷物を積んだ弱い車が、果して今日の山路を克服し得るだらうか、といふ心配だつたのである。

とにかく、私の決心はついた！ ジェムシッドは宿醉の氣味でフラフラしてゐる。自動車は寝ぼけ眼の運轉手の云ふことを背かない。だが彼にも窮餘の一策はあつた。昨夜おそく、イランの郵便自動車がついたのを知つてゐたのである。アメリカ物らしい素晴らしい車だ。此の郵便自動車に後押しを頼んで、我々の方のモオタアが活動を開始するまで續けてもらつた。

旅程は比較的らくに捗つた。我々のモオタアも、此の二千米以上もある高地だと空氣が稀薄なせゐるか、素晴らしい性能を發揮する。一同で降りて後押しをしたのもほんとは稀れだつた。たつた一度、ひやりとさせられた場合がある。まつたくだしぬけに道が彎曲してゐたのもう少しで墜落するところだつた。倅ひ、此の時ばかりは運轉手は居眠りしてゐなかつた。いや、我々の叫び聲で危ない瞬間に眼をさましたのかも知れない。が、とにかく、其處には既に谷底へ顛落した前車の轍の

跡がまざ／＼と指摘されたのである。此の自動車の乗員たちはどうなつたことであらう。

恐ろしく淋しい山の上に憲兵の屯所があつた。さつそく車を停めて二三人の軍曹と挨拶する。何れも愛想のいゝ人達だ。

『此處へいらつしてからもうどの位になりますね。これからもどの位お居でになりますか。』と、私は訊ねた。

『來てから三ヶ月です。一年間駐在の豫定ですよ。』

屯所の世話をしてゐる羊飼ひの男が、お茶を淹れてきた。が、茶碗が三つしかないので、輪番に頂戴せねばならなかつた。

『旦那、野猪はいかゞすな、昨日わし等で射つて來たんだが。』

いらぬ、我々は野豚など欲しくないが、然し不思議なことだ。回教徒の癖に野猪を獲つてどうする氣なのであらうか？

それから此の上の山には——この山がまた珍らしい孔雀石のやうな緑と銅のやうな赤とが錯綜した層を成してゐるのだが、そこに二頭の豹が、イスマイルの口吻をかりれば『男と女』が、住んでゐるさうである。また底無しそまたの洞といふのもあつて、そこは數年前或る歐羅巴人が三日もかゝつて探検してみたがつひにその終局を究めることが出來なかつた、といふことである。

さて、一時間ばかりの行程でロバアトアクといふ移住民部落にさしかゝつた時だつた。農夫が

一人横ツ跳びに駆けてきた。自動車が停止する。一體ベルシヤ人の運轉手といふ者は好奇心が人一倍強いと見えて、一寸した刺戟にもすぐ車を止めたがるものである。はて、今度はどんな珍事出來かな、と見ると、またしても野豚を買つてくれといふのだ。驢馬にでも曳かせなければならぬ程大きな重いやつである。値段も安い。だが残念ながら農夫の希望を満たしてやるわけに行かなかつた。我々の自動車の上は、鶏一羽も乗せる餘裕がない、況してや野豚なんてとんでもない話なのである。

目立たぬ中にとまた車上に復して移住民部落を後にする。道はまるで板のやうに坦々とした高原の上を走つてゐる。行けども行けども平滑でちやうど競争場の道のやうだ。雪をかぶつた連峯が櫛の齒をひいたやうに我々を取り捲いて睨んでゐる。間もなく雪道になつた、かうなるともう觸目の風景はすべて白一色である。頽れかゝつた驛の前に手押車が若干置いてあり、それを押してきた人達らしいのが、井戸らしい穴から水を汲んでゐる。小高い丘の上に圓形の監視塔がある。

さあよいよ山の隘路だ。空氣は氷のやうに冷たい。

幾分、道が降りになつてきたのは、やがてまた登りになることの前兆である。次第に積雪が稀薄になり、やがてすつかり消えてしまつた。溪流の石床の中に、果肉のやうな原味のある葉をつけた櫻草の大きくなつたやうな灌木が生えてゐる。おそらくこれは有毒植物なのであらう。さもなくば、畜類がこれを見通して置くわけがない。

大きなメエマ部落といふのへ着いたのが正午少し過ぎ。庭や畑や混砂粘土の堆積の上に、寺院の美しいまる屋根が突出てゐるのを見る。茶飲み所で小憩してゐる中に二人の男と知合ひになつた。髪も髭も赤くやけたやうな畸人である。それが我々に次のやうな話をしてきかせた。向うの山には金や銀があるのだが、政府はなんとかして獨占しようと考えて、村の者には殆んど指もふれさせまいとしてゐる、といふのである。我々は、本来なら此處で一泊するつもりだつたが、急に豫定を變へて先きへ行くことに決めた。さうして、古い都ムルシエシヤアに着いたのがまだ日没前だつたがみんな寒気に強張つてしまつた。ムルシエシヤアはひどく異色のある町である。

死の町

この町は本當に奇妙な町である。町全體が十米ほどもある混砂粘土の壁でかこはれ、通用門は圓蓋式の望樓になつてゐて、これがまたひどく狭く、我々の自動車でも通れないのである。町は殆んど全部と云つてもよいほど、穹窿狀の屋根で掩はれ、ために、夏などはてんで日光が通らない。冬は冬で恰かも冷蔵庫の如き觀がある。街路はうねうねと曲折が多くしかも狹隘だ。兩端に狭い凸凹の石の歩道があり、中央には用水や汚水を通す溝が走つてゐる。荷物を積んだ驢馬が一頭通つても忽ち通行遮断になること請合である。

これでは、善かれ悪かれ閭門の前のあまりにも原始的な隊商宿に一泊する以外に、方法はなかつた。それでも、野營寢床を辛うじて調へ得るだけの小さな空間が見つかつたのは、まだしも倖せと云ふべきだつた。現に一足おくれたばかりに、幸か不幸かイスファハンまで足をのばさねばならなくなつた婦人四人連れの、ペルシヤ人の團體もあつたのである。我々の宿舎の扉は裂穴だらけだつたから、氷の如き風が遠慮なく通りぬける。雜囊をぶらさげてみたり、混砂粘土の床の割れ目を叩き寄せてみたり、何とか扉をびつちりしようと試みたが、駄目だつた。

隊商宿は駱駝と驢馬で満員だ。歐羅巴わたりの品物の箱包みだの、砂糖をつめた大きな箱の山だのがいつばい在る。黒毛の牡駱駝が一頭、立派なからだを離れた場所に縛りつけられて、怒つたやうな眼をギラギラと私の方へ向けてゐる。日が暮れるのを待つて、此の隊商は出發した。鈴の音が噴ましく耳を掠める。駱駝や驢馬の通るのが、扉の割れ目からよく見える。續いて向ひ側に在る家の壁に、駱駝の影がちやうど幽靈のやうに大寫しになつて消えて行つた。隊商たちの發着は大變な喧囂で、たつぷり一時間は續くのである。

曉方になつてから、このムルシエシヤア町の有力者らしい立派な紳士が二人やつて来て、私と一緒に來いと云ふ。何か珍らしい物でも見せたいといふのかとも思つたが、果して何が出るか分つたものぢやない。とにかく懇請に應じて不潔な横丁を抜けて跟いて行くと、行先はなかなか小ざつぱりとしたしやれた家だつた。案内されるまゝに、その家のある部屋へ通つてから始めて氣がつい

た。病人を診察させようといふのに相違ない。私のことを醫師、即ちハキムと思ひこんだらしいのだ。だが、それにしては病人らしい人が何處にも見當らない。妙だな、と見廻してゐると、此家の主人が、向うの隅の蒲團らしいものをはね除けた。病人は熱っぽい顔をした少年である。暖めるつもりか、炬燵の火氣のむつとするやうな中で、蒲團の中にもぐりこんでゐたのだ。私はさつそく室内の換氣をやつてから、發汗療法を試みた。その返禮か、お茶と牛酪と乳脂の朝食をたら腹御馳走してくれた。

そのうちに、門前が騒がしくなつた。見窄らしい服裝の人が大勢押し合つてゐる。彼等は、歸らうとする私を無理矢理、それこそ手取り足取りといつた形で、うす暗い横丁へ連れこんだ。暗澹たる小部屋の中で、羊飼ひか牛飼ひらしいのが横になつてゐる。兩腕と太腿を豹かなにかに咬まれたのである。栗色の皮膚をしてゐるが優しい顔をしてゐた。兩眼の上にも鼻の下にも、同じやうな形をしたまつ黒な粗剛な髭がもつさりとして生えてゐる。兩手から腕へかけて、赤く青い色のボロ布が捲いてある。これは創傷熱だ。私の手にはとても負へない。止むを得ず、直きに癒るであらうと慰さめの言葉を云ひ、宿舎から取り寄せた防腐劑を興へて傷口を洗ふやうに勧めた。白狀すると、此の牛飼ひの男の生命が取止められるか否か、私には信じられなかつた。

別の獵師に射撃されて怒り狂つた豹が、不幸にも此の牛飼ひを襲つたのだつた。牛飼ひは咄嗟に飛びかゝる豹と格闘した。相手をしめつけ、拳を豹の咽喉まで突込んで、舌を半分ほどむしり取り騒ぎながら逃げ去つた。

最後に一つ、云ひ忘れてはならない此のムルシエシャル町の注目すべき特性を、書き添へて置かう。

町の外郭を成す混砂粘土の壁の、風雨にさらされた部分を見ると、そこに夥たゞしい動物の骸骨が、例へば頭蓋骨、胸骨、頸骨、等々が突出してゐる事である。疑ひもなくこれは、壁を堅固に強靱にする目的で粘土と一緒に塗りこんだものに違ひないのだ。

イスファハン

イスファハンはペルシヤ(イラン)で一番美しい都であらう。とにかく地球上で最も魅力に富んだ都の一つだ。町の性格こそ全然異つてはゐるが、その特殊な美しさといふ點では、日本の古都京都にも匹儔され得る都會である。日輪と紺碧の空との永遠な光耀が都の上を掩ひ、その穹窿形の圓蓋

の上に蟠まる空気は、明朗と素朴なる生活の安らかさに満ちてゐる。

イスファハンは完全に保守主義の都だ。歐羅巴文化の喧ましい叫喚の聲も、此處へは今日までもまだごく僅少な反響しか及ぼしてゐない。此の都を支配するものはいま尙ほ、純白の頭巾を戴いた回教僧である。彼等は、宗權と法權とを我手に掌握して、彼等の權力の些かも減殺されることのないよう、汲々として警戒これつとめてゐる。朝、晝、そして星辰の燦めき初める夕方、回教市民の吟唱する祈禱の聲は、凡ゆる小路、凡ゆる家々から嫋々として流れ出る。社會的の組織も現在尙ほ中古歐羅巴の諸都市とまつたく同じだ。約二三十位と數へられる富豪や名門の家の當主達が、唯一の誇りとし希望とするものは聖蹟メッカへの巡禮であり、ハヂ（聖蹟巡禮者の意）の稱號を擔ふ名譽である。かういふ空氣が此の都會を風靡してゐるのだ。彼等は、澤山の家屋敷と市場とを私有し、田舎にも亦た幾つかの村と數々の農園とを持つてゐる。子弟の全部が徹底的にペルシヤ流の教育を受け、彼等の一人として歐羅巴の國語の一種をも解し得る者はない。小さな新聞が一種發行され、それがペルシヤ諸侯領内の事件並びに世界情勢を傳へる唯一の機關である。しかも私は、私が當地に滞在中の期間を通じて、一人の新聞賣子も見なければ、新聞を讀んでゐる人さへついぞ見かけなかつたのである。

イスファハンにはピアノがない。蓄音器も、映畫も、繪葉書さへもない。まことに珍らしい都だつた。イスファハンが蒙つた文化的影響の尤なるものは、たゞロシヤから傳來された石油ラムプだ

けである。これ以外には僅かに、醫藥品、エナメル什器、鍵、ラムプ、等々が市場に見出されるに過ぎない。しかも、イスファハンから僅か半時間行程の（自動車の行程であらう）アルメニヤの商業地ヂェルファへ行けば、立派な歐羅巴風の百貨店があつて、自轉車や自動自轉車まで買ふことが出来るのだ！だが、ペルシヤの性格は其處にも出てゐた。獨逸製品と云つたら魔法瓶と便箋と小刀だ。ヂェルファの商店に氾濫してゐる歐羅巴の商品は大多數がイギリスの商標のあるものばかりだつた。

だが然しあれを見給へ！何んたる恵まれた風光であらう。光りの海だ。遠く搖曳する影像、調和、完成——これこそ本當の美でなくて何んであらうか。走つて行く豆粒ほどの人影、遠く消えて行く駱駝の隊商、彼處の隅にかたまつてゐる大勢の人影。これがペルシヤ諸侯の城趾なのだ。イスファハンの大きな、そして不可思議な心臓なのだ。

諸侯の城の境界に足を踏入れるたび、私は、何か湖畔に立つたやうな氣がして、足を止め溜め息をつかさるを得なかつた。よしんば既に十遍も來て見たにしろ、また新たな魅力に打負かされるに違ひないのである。

城趾の境界は、云はゞ尨大な四邊形を成してゐた。長さは恐らく八百米、幅は二百五十米もあらうか。いやどちらにもつともつとあるかも知れないが、そんなことはどうでもよい。我々はかやうな廣袤を測る尺度を持たないのである。このやうな城趾は歐羅巴には絶えて無いと云つても過言

であるまい。然も、城趾でありながら何等荒涼の感じがなく、實に巧みに縁取され、素晴らしい意匠のもとに區劃されてゐる。

南面の境は大きな伽藍と王自身の寺院との並列によつて閉ざされ、中央には紺碧の石瓦をたたんだ車寄せと、素晴らしく美しい紺色の四つの尖塔と、少し片寄つて巨大な圓蓋がある。夕には之等の寺院の大きな影像がくつきりと中空に浮びあがるけれど、白日の下では寺院も尖塔も、日光に眩耀されてまるで見えない——それ程、城趾の規模は雄大なのだ。

長い西面に堂々と構へてゐるのが、古い諸侯の王城だ。高い、二階建ての幄舎造りで、あまり高いため見た目にはほつそりとしてゐるが、實際にも三十乃至四十米突位はあるであらう。その扁平な屋上に立てば、視野はひらうけて、圓蓋の海の如き都會と、うち續く庭園、菜圃を越えて遠く山々の景觀までも一眸にあつまる。一階と云つても全體のちやうど半分位の高さの所だが、其處に廣い通風のよい展望用の開廊がある。城主の家族や上臣たちが、競技や、式典や乃至は軍兵の行進を見るための席を取るところだ。

(*メルシヤの國家的競技は有名なボロである。これは今日のホツケイの始原で、たゞ戰士が騎馬で闘ふところが異ふだけである。メルシヤ諸侯の城内にこんな廣場があるのは、實は此の騎馬ホツケイの競技場だつたといふ説を成す人もある。)

此の廣い開廊の中央部に大きな銅板を張つた泉水位の水盤があるが、多分これは涼味をよぶため

の装置であらう。暑い、水の乏しい國では、水を見る事それ自身が、一つの快樂慰藉となるのである。王城の内部の、冷たく厚い壁に隔てられた各室には、今も尙ほ、美しい、半ば色褪せた、大きな原型の壁畫や裝飾品が残されてゐる。ちやうど私の行つた時は、新しく彩色をかけてゐるところだつた。これなら安心である。時々これをやつてをれば、恐らく今後何百年の後にも原型の美を維持することが出来るに違ひない。

城趾の北と東の二面には、市場の圓蓋が突出して入口の通路にあたる高い建物を遮斷してゐる。北面の表通路は既に市場で埋めつくされ、印判屋、錢箱作り、鐵物商等々を始め、メロンの擔ぎ賣りや屋臺の飯屋などがズラリと並んでゐる。其處には朝早くから夜をそくまで、農民や商人でごつた返して、賣つたり買つたり、飲んだり食つたりしてゐるのである。此の表門の通路の左右にはそのほかにもまだ喫茶店などがならんでゐた。

私が休んだ茶亭は、城趾の一隅にあり、開放された入口から日光が暖かにさしこんでゐた。機会さへあれば私は、此の茶亭へ腰を下して茶を飲むことを怠らなかつた。こんな手輕な、しかも魅力のある喫茶場に廻り合せた覺えは滅多になかつた。

此の喫茶場には、大理石の卓子もなければ燕尾服を着た給仕人もゐない。卓子はひどく原始的で不細工だつた。その前に一尺位の高さの出張があり、そこへ腰を下すのである。臺のやうな卓子の中央には蕙蕙のやうなものがあつて、それへコップや水煙管が置いてある。萬事がごく無造作だ。

お茶を運ぶ少年がもうちつと清潔だつたら申し分ない。キビキビした少年が茶のエキスを注ぎ、二個の容器から茶碗へ熱湯を注ぐと、もう一人の少年がそれへ砂糖を投げ入れる。然も、傍では湯沸が心から楽しさうにグラグラと蒸氣を立てゝゐるのだ。(二個の容器といふのは、例へば鐵瓶と急須の如きものであらう。)

此の茶亭はいつも繁昌してゐた。みな、ぽか／＼と暖かい日光に浴し、熱い茶を楽しむ人々である。時々、黒と緑の頭巾をした客も見える。彼等は豫言者の一門の裔である。また、白地に金糸をまぜた頭巾を載いてゐるのは商人である。茶亭へは、貧富の差別なく凡ゆる階級の市民が来る。水煙管がグルグルと鳴つてゐる。一日、私の卓子のすぐ前に、跣でゐた三人の、例のとほり覆面の婦人があつたが、彼女たちもまた水煙管をくはへて、憩ひの一時を愉しんでゐるのであつた。奥の幕をたれた一室では、寂寞と幽暗を愛する賓客たちが幾人も跣まつてゐる。阿片吸煙者たちだ。

毛皮の外套にくるまつた農民達が馬に乗つて通る。顔に覆面をした女房や子供などを、前鞍や後鞍に乗せてゐる。驢馬や騾馬を追つて行く少年がある。みんな、市場街のうす暗い通路へ吸ひこまれて行く。きらびやかに着飾つた市民が入り違ひに溢れて来る。

鈴が鳴り、駱駝の行列。これも同様に市場街へ消えて行く。其處には商人の會合場があり、隊商の運ぶ貨物はみな其處へ集まる。駱駝を休ませる隊商宿も勿論ある。

よい身分の婦人たちが通る。彼女たちの衣裳は、テヘランで見たより一層傳統に忠實だ。履物は

襪の多い腰布に縫ひつけてある。蹠の端でも人眼にふれさせないためなのだ。その意味で、普通の覆面の上にもう一枚、白い布をたれ、兩眼のあたる部分に細い格子の隙間があつて透視がきくやうになつてゐる。だが、これではどう見ても幽霊としか見えない恰好である。

ところで此の茶亭へ變つた客が二三人で飛込んできた。無論、奥の方の幕をたれた部屋の常連に違ひないが、今日はそこまで行く氣力もないのか、外の縁臺の上に跣みこんでしまつた。半裸體の恰好で、青と赤の格子縞のキャラクを無造作に捲きつけてゐる。頭髮は半分剃上げ、残した髪を長く房のやうにしてゐる。これは浴場の雇人だ。此の茶亭のつひ近くに浴場があるのである。入口に面白い色彩畫がかゝつてゐるので誰にも分る浴場だ。其處では可哀相な牛が一头、終日、うす暗い地下の窖への斜面を行つたり來たりして、噴だし井戸の水を浴場へ運んでゐる。水の容器は大きな皮袋である。市場の圓蓋の上に乾してゐるのはみんなその浴場の浴客用タオルだ。そして、此の圓蓋がまた、およそ奇想天外なグロテスクな風景なのである。上から見ると、まるで大きな泡をふきあげた粘土の海なのである。その泡の一つ一つが、即ち市場街の圓蓋にほかならないのだ。

我々が此の茶亭に足繁く出入するにつれて、ひどく附近の注目をひき起してしまつた。我々を見物しようとする群衆を押しわけけるために、時々、從僕として雇つてゐたジェムシッドの腕力を必要とする場合さへあつたのである。通譯のイスマイルは然し、そんな場合、迷惑さうな顔つきで見物の市民を鼻で扱らつてゐた。鏡やシャンデリヤのギラギラ光つてゐるもつと高級な喫茶室へ行く

ことを勧めたのも此のイスマイルであつた。我々が行つた時、この質素な茶亭では大いに歡待してくれたのであるが、うらから云へばそれだけまた我々の方が手数のかかる客だつたかも知れない。例へば、我々の使ふ茶碗は、無論あまり清潔でないからでもあるが——もう一度嚴密な檢閲の下に洗はれたのである。内側も外側も、特に念を入れて磨かれるのである。磨き終ると、三度水の中で洗はれ、一々、眼の前に捧げてきれいになつたか否かを檢査するのだ。さう云へば我々同士の握手の習慣だつてあまり清潔な話ではないが、然し、假りに我々の手に濕氣や水氣さへない限り、回教徒諸君は特に手を洗ふ必要はあるまいと思ふがどうだらうか。

今日は然し、此の茶亭で或る思ひがけぬ椿事が突發してしまつた。事の發端は、茶亭の主人が二個の湯沸しと十六個の茶碗とを捧げたところを撮影してくれと云ひ出したのが始まりだつたのである。やがて彼がレンズの前に立つたとき、居合せた客たちが一齊に起上つて主人の身邊に集まつてきた。無論、自分等も一緒に撮らうといふ肚なのだが、そのため、折角主人が持出した湯沸しや茶碗がそつくり隠れてしまつた。結果は當然、主人對客達の白兵戰である。たうとう警官が馳せつける騒ぎになつて鼻がついた。

此のイスファハンの市場こそ、全ペルシャを通じて最大のものであらう。それが證據には、此處の市場街といふものは、今日までもまだ私には道がはつきり分つてゐない。行つたんに新しい小

路と新しい圓蓋が出て來たり、同様な商人の立會所や隊商宿があつたりするのである。

イスファハンの市の名を國境の外まで有名にしてゐるものは金屬工業であらう。寺院の内部のやうにうす暗く、ハンマアの打撃音がガンガンと反響する長い長い圓蓋街——これが金や銀の細工師通りだ。金銀の裝飾品、器物、高雅な古代様式の飲料容器などはみな此處で作られる。金銀細工師の店と隣り合つて眞鍮細工の鑄物師の店が並んでゐる。湯沸し、茶盆、敷板、徳利、美しい透し彫の燈籠等々はみな此處で生産されるのだ。勿論、彼等が使用する原型の構圖は古いものだが、その製作技術に至つては既に普通の手工業に墮落してゐる。新製品を古い作品と較べて見るとこの事實がよく分るのである。注目されるのは幼少年がたくさん此の細工師の仕事場で働いてゐることだつた。一軒の眞鍮細工師の家などでは、やつと五歳位の子供が、せつせと鑿を使つてゐるのを見た。ちやうど自分の顎のあたりまでもあるやうな鑄物の原型に、何か彫刻してゐるのだつた。

銅の鑄物師が軒を並べてゐる小路は、二三哩四方まで轟ろきさうな盛んな音を立てゝゐる。何んと云つても私の關心を一番に惹きつけたものは鍛冶屋の工場だつた。うす暗い仕事場に赤々と熾る鐵。鐵槌の一撃ごとに火花が、往來の方までパツととび散る。時としては十人の職人のふりかぶる鐵槌が、赤く灼けた鐵の上に、呆氣に取られる程の正確さで同時に撃ち落されてゐる光景も見た。鐵砧より二尺も高い大きな鞴を吹く役目は、その場合たひていは少年がやつてゐた。鞴には二つの耳があり、それが動いてゐる容子はまるで象の耳が動いてゐるやうである。

イスファハン特産の絨氈やカリムカスと呼ぶ捺染布を製作する工場も見學した。絨氈を結び編みするのは大抵子供の仕事である。朝から晩まで織機の蔭に踏みこんでせつせと手先を働かしてゐるのは大方十歳未満の少年少女にかぎられてゐた。これを指揮する親方が、精々十歳から十二歳止りの少年なのである。この小さな親方が見本どほりの圖案を結び編みする一方、幼ない助手たちは手まめに縁かざりなどをやつてゐる。少年少女たちの手先の器用なこと驚ろくばかりだ。

カリムカス(捺染)をやつてゐる工場は市場内のもう崩れかけた庭である。此處でもやはり大抵の場合、昔から傳統の古い圖柄の模倣を主として、大きな、模様を刻んだ版木を使用してゐた。版木に着色して布に捺染し、洗ひ、乾し上げるのである。

大きな桶から湯気が濛々と上り、その間を半裸の男たちが、手足を青や赤に染めて走り廻つてゐる。廣い庭中いつばいに染め上つた布がぶらさがつてゐる。私は、その中にマルクスやレニンの肖像を捺染した布を見つけて喫驚した。ロシアからの註文であらう。

畫工にも、それぞれ占有の建物がある。彼等はその建物の中で、小さな畫や、手箱、錢箱、學童用の鞄などに繪筆を走らせてゐるのである。古い作品の模寫はひどく巧妙だが、彼自身の創作となると、ほとんど素人藝の域を越えるものは稀だつた。往昔の古代ペルシヤ藝術の美しさは、既に既に滅び去つたのである。

しかも、一旦祈禱の時が來ると、かういふ各般の手工藝の工場を含む市場街全體にわたつて、信

者たちの合唱と叫喚とが猛烈に反響するのである。

ラマサンと呼ぶ『悲しみの月』になると、市場街も、王城の城趾も、街上も、悉くひつそりよしてしまふ。取引の商賣や事務なども、絶對必要なもの以外は、全部休止状態だ。

敬虔なペルシヤ人は、その月いつばいを斷食し精進する。更に敬虔な人はその月の前一日から潔齋生活に入り、それが一層神慮に叶ふことゝされてゐる。即ち、第一日の曉方、大抵は四時頃から夕方七時頃の日没まで、飲食ともに斷つのである。そればかりか例へば花の匂ひのやうな、嗅覺からの刺戟さへ避けるのである。従つて此の期間は、街頭で喫煙することは不作法なのである。つまり、街頭で喫煙すれば、その煙が敬虔な信徒たちの鼻や口に流れ入つて彼の勤行を不純にするといふのである。だから彼等は、例へば火鉢の中で何かくすぶつても、急いで鼻孔をふさぐのである。

つゞいて回教僧の時といふのが來る。尤もこれにもいろ／＼異つた種類があるが、まあ乞食坊主であり、その大部分は俗にいふ香具師である。或者は糖果などを提供し、或者はお水を捧げ、或者はまたよい匂ひのする香料を授けようとするが、その代償として彼等が欲するものは、現金以外の何物でもない。中には全然さういふ提供物なしに、金錢を強請するものもある。

かういふ乞食坊主どもは、何とかして自分の存在を目立たせようと努力する。出来るだけ長い鬚をはやしたり、能ふ限り奇抜な帽子を考案したりする。圖抜けて大きな頭巾、奇天烈な形の笠、棒砂糖のやうな三角頭巾。さうかと思ふと喪服用の黒紗を捲いたヘルメット式のものも戴いてるやう

等々、實に種々雑多な恰好をして現はれるのだ。

こんな扮装で先づ、王城の城趾へ愚昧な農夫や子供たちを集めておいて、いかにも感奮興起した容子で昔の武勇傳を一席、手眞似足踏みよろしく辯じあげる。筋はきまつて、ケルベラの合戦で仆れたアリとハッサンの話である。さあさあ、いまアリが抜いたる一太刀こそは名だたる名劍——とこつちの乞食坊主が濁聲を張り上げると、あつちでもまた負けず劣らず、おはれやこなたはハッサン悲鳴をあげて救助を求む：：なぞと柄にもない假聲に大汗を掻いてゐる。さうして、その後は錢を徴集するのである。

城趾には重砲が一門備へてある。日没と一緒に砲兵の一團が槩杖と火繩を一本づつぶらさげて現はれ、規定の時間を厳守して點火する。轟然一發、砲火が中空をついてとぶと、とたんに斷食の戒律はやんで、歡呼の嵐が町全體を搖がすのだ。

茶亭はたちまち満員になり、潑刺とした生色を取戻した市民たちが、食卓を叩き、勘定を支拂つてゐる。——ペルシャの食事とその代金は何んといふ質素なものであらう！

かうして明朝四時まで食つたり飲んだりして、いつぱいになつた腹を抱へて晝間は眠り、人を訪問し、そして度ましく夕方の七時の砲聲が轟くまで、斷食の戒を守るのである。

イスファハンよりペルシャ灣まで

新しい顔ぶれが揃つた。今度契約した料理人ハヂ・カシム君は、長途の旅の經驗をもち聖地メッカへも二度まで行つた男である。それに、先週から助手としていろ／＼働いてもらつたモハメッド・アリ君、これはまだ十二歳の少年だがなかくしつかりしてゐて敏捷だ。ちやうどアリ君の母親がケルベラへ巡禮に出た後なので、誰も構つてくれる者はなし、と云つて遊んでゐるわけにも行かないので、私の従者の一員に加はつたのである。

アリ君の旅仕度は貧弱な寢具一枚と着替へのシャツ一枚きりだつた。これではどうも、ざつと千五百キロ米の長旅には簡單すぎるので、もう少し十分な支度をさせることにした。先づ浴場へ行かせて全身を清潔にさせた。さつぱりした顔で戻つて來た容姿を見ると、自分で前髪を渦巻きに捲上げ大分明るくなつてゐる。すつかり元氣づいて、ちつと無鐵砲らしいところもある。出發が待ちきれなくていらいらしてゐる様子だ。

それから自家用自動車の運轉手シャリイル君これはアラビヤ人でインドまでお供する氣である。私が今度の旅行に當つて借入れた自動車は二臺、何れも小型だが、道の悪いことを考へて一臺は荷物、一臺は一行の乗用にと思つたのである。この二臺の自動車によつてエスドからケルマンまで、

場合によつてはバラムまでは是非とも行かねばならない。荷物を乗せた方の車の運転手は、二人ともまるで強盗か山賊のやうに物凄い男だが、氣立ては優しさうだ。ペルシヤ人にはかういふ型が多いのである。

一行の乗つた人間用の車には、もう一人此の持主も同乗するので、モハメット・カンの席がなくなり、止むを得ず階段に載せたベンジン罐の上へ腰かけてもらつた。勢ひ彼は、此の長い全行程を通じて、掴まつた手を放すことが出来ない。うっかりすると振落されて骨折する危険があるのだ。カンはこの申出でを二つ返辭で承知した。栗色の服に共色の頭巾を被つて唯々諾々と踏板の上をうづくまつてゐる容子は、千キロ米突や二千キロ米の旅行位に此の位の我慢は至極當然です、と云はんばかりである。それに重い荷物は一つもないし、一枚の羊の毛皮と一本の小刀が持物の全部だつたのである。

イスファハンの圓蓋に落日の一瞥がキラリと光つたのを最後として、我々はまた沈黙の沙漠のまづ只中を、悄然とした秃山を眺めながら走りだした。遠くの方に、やさしくかすかに見える緑色は或ひは泉か沼のまたゝきかも知れない。後はもう見渡す限り、生ける物の表徴と云つては何ひとつ無いのである。

半ば頽廢に傾いたマルクの隊商宿で第一回の小憩をとつた。イスファハンからは約二十キロ米の距離で、折から、一名の獨逸の企業家がペルシヤ人の資本家と共同で、約三千セルゲンといふ廣大

な土地の開懇に着手してゐるさ中であつた。(一セルゲンは約二五・五アール。田畑の廣さを測る單位である。元來セルゲンは獨逸語で朝の意味だが、此の場合にも、一聯の牛が午前中に耕やし得る土地の廣さを意味して、セルゲンと呼んだといふ解釋がある。序に書き添へて置く。)

すでに三十六個の深い井戸が掘られ、それ等の地下水をトンネルで連結して貯水池に集め、これを重油モオタアで耕地に配分するのださうである。用水路は掘り上り、數千本の樹も移植されてゐた。トラクタアが一臺、隊商宿の庭に立つてゐる。こんな荒野のまん中で、新世界を創造しようとする勇氣は買はれねばなるまい。土地その物は安い、といふよりまるで無代に等しいさうだ。古いペルシヤの掟に従へば、荒野を開拓し、其處に私有權をうち立てることは誰にでも許されるのである。何んといふ物分りのいゝ、そして賢明な法律であらう。

直線的な立派な道が、炎熱下に陽炎をあげてゐる高地を縦貫して走つてゐる。やがてそれが、秃山のふところに入ると、たちまちひどい悪路になるのだ。

新しくひらけた廣い高地のまん中にあるのが、メイジャアの隊商宿である。七十頭ばかりの駱駝を運れた隊商が、アッバ王時代からある昔のまゝの隊商宿の傍で休んでゐる。木棉を積んでイスファハンからブシイルへ運搬の途中らしい。我々は、糧食を積んだ荷物自動車の方がいつまで待つても來ないので、一先づ出發することにした。

第三の高地へ來ると、荒涼の風景がまるで魔法のやうに一變する。遙かに見える耕地、村落、花

盛りの巴旦杏林の果實園。だしぬけに車が停止したのでびつくりして見たら、まつたく思ひも寄らぬところに養魚池があつたのである。實際、正真正銘の池だつた。ひどく異國情緒の、金色のくすんだやうな色の家鴨が一羽げんごうな容子でこつちを見つめてゐる。王領リヅァといふ部落だつた。リヅァ王のひどく原始的な墓標に好奇心が動いたが、たちまち其處へ、白の頭巾を捲いた回教僧が二三人出てきたので、劈易してひき退つた。僅かあと數キロ米行けば、今日の目標のクメシエといふ小さな町に出られるのである。――

驚いたことに新築のきれいな旅館があつた。庭はまだ未完成だがこれもなか／＼美しい。さつそくその旅館全體を借りきつた。と云つても部屋は二つしかないのである。たちまちにして物見高い町の人達の包圍を受けた。みんな、庭の垣の上に厚い人垣を作つてゐる。不意に今度は頭の上で騒ぎだした。見ると、旅館の屋根の上にまで溢れだし、屋根の縁の石瓦がガラ／＼と落ちて來る騒ぎだ。それが召使ひの男にあたつて召使ひは泣き聲をあげて駈け去つた。打ち所が悪かつたら生命に關はるものを、見物人は腹を抱へて笑つてゐる始末である。こゝに於いてか、今度は旅館の主人が現はれ、忿然として磔を飛ばして屋上の招かれざる客達を追ひ拂つた。

むし暑かつた旅の汗を流した後の、宵の涼氣は一入である。從僕や運轉手たちは、彼等の部屋の露臺の上でごろ寝をやり、いびきをかいてゐる。クメシエの町ももうすつかり眠入つたらしい。

十二三本の花の木を四つ目垣にした茶亭の、風通しのいゝ廣縁ばかりが、まだ客があるらしく、吊ラムプの灯がゆらゆらと動いてゐる。笛の音が何處からともなくやや憂愁的の歌をきかせて來る。これと殆んど同じやうな哀歌の曲を、たしか數年前のルウマニヤの旅で、或る放浪民の一人から聽かされたことを思ひ出した。あの時は牧笛だつたと覚えてゐる。やがて、外の米畑の中から、笛の音に應へて二匹の蛙が鳴きだした。槌で一定の音程を置いて叩く昔の打樂器のやうな、かん高いふるへ、聲である。云はば、笛と蛙の聲との競演みたいなことに成つてしまつたが、結局、蛙の方の勝ちに終つた。笛吹きの方も、もう寢に歸つたのであらう。――

クメシエの町から郊外に出る道は、粘土の山の腹をえぐつた本當のトンネルでひどい悪路である。ベルシヤ人の移住地の附近は、大部分まるで戦場のやうに大地が掘返されてゐる。間斷なしに井戸と水路が掘られたり修繕されたりしてゐる。然も誰一人、掘起した土を平にならさうとする考へをもたないのだ。今走つてゐるさつと二千米の高地では、かなり暑さは減退してゐる筈なのに、空氣は相變らず陽炎のやうにメラ／＼と踊つてゐる。山の嶺は静かな孤島のやうに、紺碧の天海の下に游泛し、その夢の海のやうな高原のそちこちに移住民部落が散在してゐる。道路そのものさへ遙かに、明るい青色の流れと化し、今にも岸へ氾濫して全地に溢れだしはせぬかと見えるのだ。

自動車は、土砂と石ばかりの高地を斜めに走つて、何處へ出られるのか見當もつかないやうな山

山の裾をグル／＼廻走してゐる。厚つぽつたい雪のふとんに着ぶくれた高い山が一つ、ぽつかりと我々の行手を塞いだ。四千二百米の高山アリヂェククウである。

アメナベッドといふ小さな町の閭門の前で小休止をする。原始的な古代都市で、全部が混砂粘土で出来てゐる。十米位の高さの粘土壁をめぐらし、それを支へてゐる一群の塔と、更にそれを包圍する粘土の廢屋、——町の住民は此の中に住んでゐるのである。厚い鐵板を張つた檜の厚板で出来てゐる閭門は、私が腰をかゞめなければはひれぬほど低かつた。裸形の身をかくすことも忘れた不精で不潔な婦人の群、腫物でまぶをかき潰したやうな肌の子供たち、さうして驢馬の一團なぞで狭い通路はいつぱいである。子供たちはみな紺色の硝子玉で出来てゐる護符おまもりを、袖に縫ひつけてゐる。都門の直ぐ前には深い垣をめぐらした井戸があつた。

空模様がだんだん悪化してきた。ヤスデカストの回教寺院の圓蓋まるやねが、高原の上を吹き荒ぶ黄塵の渦巻くさ中に、漂々と浮び上る。だが、此の小さな町の荒れはてた墓地を後にした頃には、道は急に、まつたく唐突だじゆけに低くなつてきた。

流水が、幅數百米深さ五十米の河床を、此の砂岩の中へ侵蝕するまでには、おそらく千年にも越える歳月を必要としたことであらう。その河床がいま、見渡すかぎり一面に、厚いもうせんを敷いた如く、素晴らしいエメラルド色の畑と化してゐるのだ。四時間行程も、禿山の暗い岩壁の中を走

つてきた旅人にとつて、これはまつたく驚嘆すべき有難い眺望だつた。今までは茨しほの灌木以外には何一つ生えてゐなかつたのである。

だが待ちたまへ、ヤスデカストの小さな町が提供してくれたものは、たゞにこの、眼下に展けたエメラルド色の將棋盤のやうな景觀だけでなかつた。此の小さな都會それ自身が、最初の一瞥では我と我が眼をうたがはざるを得ない程の、世にもグロテスクな、夢幻的な眺めを與へてくれたのである。ヤスデカストが、數世紀前には一種の盜賊團の根城ねじょうとして當時の渡河點を支配してゐたらうことは疑ひもない。その巢窟とおぼしい岩窟が、今も頽廢のまゝ、溪谷に屹立する八十米ほどの砂岩と凝集石の、狹隘な山の脊に残つてゐるのである。山の脊は洞穴ほらあなだらけで、その一部は既に崩壊して埋まり、壊滅の一步手前に置かれた山の斷末魔を示してゐる。そして、その山の上に築かれた此の古い小さな都會の殘骸もやはり、同じ色、同じ形かたちに頽廢し、山と共に滅び去らうとしてゐるのである。

高く三階又は四階建ての、狹隘にたて込んだ家々、その元は窓だつたらしい空隙が無數に並び、圓蓋は傾き、露臺バルコンは危ふくぶらさがり、望樓は頽れた回教寺院の骸骨も見える——今にも一團の塵埃と化して消えてしまひさうな、あはれにも、儂はなない存在ではある。現在でもまだ、此の盜賊の古巢に住んでゐる小數の部落民があるやうだが、何れも細い半ば朽ちかけた一枚の板を橋として出入してゐるらしい。翌朝、望遠鏡をもつて眺めたら、眼も眩むやうな高い建物の欄干てすりもない露臺バルコンの上

た、五人の女が坐つてゐるのが見えた。いまにもガラガラと崩れ落ちさうなくさつた木造の露臺の上に、女達は平然と坐りこんで綿を紡いでゐたのである。

道路は、墓地の直後から急彎曲を描いてかつての河床に直降してゐる。此の峻嶮な石の道を昇つてくる二輪車の荷車は、一尺ごとに文字通りの戦ひを続けねばならない。馬は全身の筋肉を緊張させて、容赦なく降る鞭打の霰を一刻も早く免がれようと懸命に足掻いてゐる。汗にまみれた四五人の男が、齒を食ひしぼつて車輪にかぶりついてゐる。積荷が投出されて坂道をゴロゴロと轉り落ちる。道は、谷底へ行くと急に一轉回して痘痕面のやうな岩窟沿ひに上昇し、見るかげもない溪谷の上に架けた狭い石の橋に通ずる。

橋を渡ると、焚火の煙で煤けきつた隊商宿が一軒あるが、既に老朽ちて手入れもしないため、一部は壊れてゐた。この隊商宿もやはり、アバス大王の建造になるものである。運轉手が、こんな所は駄目だからもう一つ先きのアバデエまで飛ばさうと云ひだした。其處まで行けばいゝ宿屋がある筈だといふのである。料理番のハヂ・カシムも、此邊の人間はスティルマン(泥棒)だから信用できない……と口添へする。

たしかに、此の昔の盜賊國の巢窟の暗澹たる廢趾が、何か壓迫的な印象を與へることは事實だつた。然し、それでも尙且つ私は、此處で一泊することに決め、入口の門の上の一階に空室をさがした。そこへ昇るには、急な、踏みへらした石の階段をあがつて行くのである。探しあてた空室は、

濕つぽく冷々としてゐて、扉などはなく、窓だつた部分が脱落したむし齒の跡のやうに空洞になり風がビウビウと吹きこんでゐた。だが、我々にはこれで結構だつた。顔面いつばいに潰瘍だらけの老婆が出て来て、不潔物を掃きだしてくれた。

料理番のカシムはさつそく通風のいゝ穴を見つけて炊事道具を据ゑ、早くも木炭を熾し始めた。ヤスデカストの崩れかけた岩窟は、昔の盜賊團の蠻勇の跡を止めて、我々の真正面に殘骸を横たへてゐる。これも頽廢しきつた隊商宿の屋上に立つと、一面の綠地と化した河床が數哩の彼方まで蜿蜒と見晴らされた。

隊商宿の庭内は例の如く駱駝の満員である。約七十頭位をつれた隊商が休憩してゐるのだ。庭内ばかりでなく、此の隊商宿の外面の古びた石橋の近くの谷底にも、一團の駱駝と人とが休息してゐる。全部で四つの隊商らしく、一團ごとに七八十頭の駱駝や驢馬を引連れてゐる。つまり全體で三百乃至四百頭の動物が集つてゐる勘定である。之等の隊商は、大部分、今日までのペルシャ旅行で出會つてゐるものばかりだが、何れも相當長い行程を経て來てゐるのである。農民たちは、彼等を見ると喜んで、すき返したばかりの畑を休憩地に提供する。三百四百と集つた駱駝や驢馬が放出する糞便の量といふものは、耕地にとつてなか／＼馬鹿にならない肥料なのである。

隊商たちはイスファハンを出發點としてシラスに行くのである。運搬する貨物は棉花、タバコ、阿片、獸皮などが主だ。さういふ貨物が何百個ともなく、飼糧をはんでゐる駱駝たちの傍に積んで

ある。棉花は一バレンごとに壓搾され、阿片は幾つかの、ちやうど蜂の巢を大きくしたやうな形に荷造りされてゐる。清潔な木の大箱に入つてゐるのがタバコで、獸皮ばかりは無造作に束ねてひつ括かたげてある。隊商の指揮者が使用する旗は三角の細長い、黒ずんだ緑色で、ペルシヤの獅子を中央にいろいろな飾りが刺繍してある。

駱駝は、約三十頭位づつ一團となつて、溪流へ水を飲み連れられて行く。一打ダクばかりのごく子供こどもの駱駝が、白いのや明るい栗毛のや、まつ黒なのが、竹馬のやうな脚でヒョロヒョロと母駱駝にくつついて谷へ降りて行く。こんなのはたいてい、生れてから四五日か、多くても二週間位しか経つてゐないので。仔駱駝の中には胴を、往々、布でくるんであるものがある。そんな時には、脊中の隆肉の房毛だけが布の合せ目から高く擡たいでちよつと奇觀だ。また大抵の仔駱駝は、ちやうどペルシヤの子供たちがするやうな、青い、硝子玉の護符おまもりをつけてゐる。駱駝の給水はたいてい一時間から二時間ばかりのもので、例の篝火の煙が薄明について流れ、駱駝の群れと駱駝曳きの人夫たちが、篝火をかこんで跼くまつたり談笑したりしてゐる牧歌的な繪は、この給水が終つてから始めて見られる僅かな間の情景なのである。

暗くなるのを待つて、隊商は荷積みを始める。長い間、鈴の音が夜の空気を不安にするのはその時だ。眸を凝らしても、僅かに搖曳する灯影ほみかげが一つ見えるきりで、あとは何つ一見えないが、耳に響く物音は、駱駝の鈴、唸り聲、駱駝曳きの叫び、等々で廣い河床から傳はる反響はなか／＼盡き

ない。慣れないうちには、軍兵が夜襲の準備をしてゐるのではあるまいかと思ひ誤る場合も珍らしくないのである。

やがて、先發の隊商が行動を開始する。ラムプを片手に先頭を行くのが指導者だ。その灯は、見る見るうちに闇の中へ没し去る。何百頭といふ長い長い駱駝の縦列は、このやうにしてまつ暗な夜の中へ行進をつゞける。どの駱駝にも、箱や繩からげした貨物が山のやうにつけてある。鈴が、彼等の一足ごとに鳴りはためく。黙々と足音も立てずに動く巨大な影像、隊商は、通路の條件次第で十頭位づつの一列縦隊を編制して行く場合もある。厚ぼつたいゴムをつけた大跨の足と歩調を揃へるのだから、隊商もなか／＼容易ぢやない。時々、駱駝や驢馬の鼻息が揚り、曳子の鈍重な叫びが起る。或ひはまた手綱を直したり、歪んだ積荷を押上げたりもせねばならない。さうして、彼等もまた、駱駝と同じやうに足音を忍ばせて、長い暗夜行路を辿るのである。

先頭の駱駝は百練を経た沙漠の遍歴者だ。數萬哩の道を幾千夜の暗中行進で克服して來た猛者である。あらゆる徑こみちも辨へてゐるし、泉から泉への路も自然に諳しんんじてゐる。黙々として、高い頭を冷たい夜気にさらしながら後進を導いて行く嚮道駱駝の容子は、びつくりする程おちつき拂つてゐる。彼は、永遠に星空の下を行く自分の運命を知つてゐるのだ。背に四五百ポンドの重荷を負うて夜から夜を歩きつゞける己おのれの宿命をよろくのみこんであるのだ。そればかりか、此の哲人のやうな動物は、自分の主人の運命もやはり、自分と同じものであることを知つてゐる。自分の主人もまた

自分と同じく、一日何處かに力つきて斃れるまでは、夜毎の星の下を黙々として彷徨ひつゞけねばならない宿命を負うてゐることを、暗黙の中に理解してゐるのである。

仔駱駝たちは、嬉々として重荷を負うた母の傍に跟いて行く。はぐれてはなるまいと一所懸命にまだしつかりと据らない脚腰を躍らせて行く。云はゞ、生れ落ちたその日から母駱駝の稼業を見習つてゐるのである。中でも、まつ黒な毛並みのやつが一番高慢ちきで、他の四頭の仔駱駝を壓倒してゐた。

『こいつはハッサンで名前ですよ……』と、ある時、駱駝曳きの一人が、私を顧みて笑つたことがある。

さつきの隊商が出發してから、既に一時間以上も経つたのに、まだまだ後から後から別の鈴の音が夜氣に銜して枕にひびいて来る。今はもう、谷中が鈴の音でいつぱいになつてしまつた。

いよいよ、我々の泊つた部屋の下に休息してゐた隊商が、殿軍として起上つたやうである。駱駝たちはもう、飼糧を食べる時のやうに群がつて鬨まつてはゐない。一頭づつ整然と膝を折り、左右に置かれた荷の、鞍につけられるのを待つてゐる。隊商の各員はほとんどまつ暗な中で手探りでやつてゐるのだが、慣れきつたもので、またゞく間に駱駝の旅装を調べてしまふ。駱駝も實によく心得たもので、少しも騒がずに穩なしくしてゐる。時々、咆えたり長い首をふりたてたり、齒をガリガ

リやつたりするのは、何か氣に入らぬ事の證據だ。重い荷物が積み終ると、直ちに飛び立つて咆哮する。さうして、一擧に打つて變つた規律正しい行動に復するのである。やがて、一頭また一頭と庭を出て行く。

やがてすつかり靜かになつた。谷の溪流のせゝらぎの音がかすかに聞こえるほかは、僅かに、遠い鈴の音が銜するばかりである。

曉方はやく、農民たちは踏み踏かれた畑の土を返してゐる。昨夜出發した隊商の跡だ。橋の傍にも、流れの中にも、水囊を背負つた驢馬が佇つてゐる。

庭で喧嘩が始まつた。隊商宿の亭主が、風穴だらけの部屋代を八クランも寄越せと請求したのが原因である。だが、私の従者たちは、そんな法外な要求に應ずる氣は無論なかつた。激しい紛紜の末に、結局、要求額の半分で妥協が成立した。

谷へ降る通路が険しいのと同じ程度に、彼岸へ渡つてからの登り道も峻嶮をきはめてゐた。農民たちのさしのべてくれた腕の力に押されて、辛くも一足一足と登つて行く。途中の一番険しい難所で、運悪く驢馬の隊商とぶつかつてしまつた。喧嘩叱咤を交へた大變な混亂が持上る。そこを漸く切抜けて崖の上に立つと、昨日と同じ砂礫ばかりの高原である。山々の姿も、既に數日來お馴染みのものである。——森閑とした山中の寒驛タルゾワで、監視の憲兵に呼び止められた。射殺したば

かりの羚羊を一頭提供したいといふのである。既に太腿の一本は食べてしまつたと見え、脚が三本しかない。よろしい。残りを全部買はうと云ふと、憲兵たちの云ひ値がべら棒に高い。脚一本が四クランだといふ。運轉手はアラビヤ人だつたから、亂暴な聲で呶鳴り返し、すぐに制動機へ手をかけた。結局、半額の六クランを支拂つて、三本の脚を買ひ取つたのである。美しい羚羊は、かうして血に染つた身體を括られ、豫備タイヤの上へぶらさげられた。

禿山ばかりの山つゞきの上に、むつくりと一つ、積雪を戴いた大きな山が覗いてゐる。デエナの牛と呼ばれる山だ。頂上が日光にキラ／＼と光つてゐる。海拔五千二百米と云へば、アルプスのモン・ブランを抜くこと數等だ。

風が冷たい、みんな外套の中にくるまつた。

アバデエでは、また立派な宿舎を見つけることが出来た。新しい庭にかこまれた新築の旅館はひどく細長い建て方である。正面の玄関に据ゑてある足洗の装置は、古いベンジンの槽を改造したもののらしかつた。私の部屋の暖爐の蓋も發動機の鐘形の頭を切つたものである。そればかりか、燭の罐詰を開ける鍵が、此室では服をかける釘に利用されてゐる。なかなか現代風な思ひつきに違ひなし。

此の甚だ清潔な旅館の閑寂を破るものは、勿論型どほり自動車の警笛だつた。と云つたところで、さう頻繁にやつて来るわけぢやない。一日の中にまづ二臺か三臺、と云つたところである。

アベルグウの沙漠を通つてエスドへ

殺したばかりの野羊を三頭も、買つてくれと擔ぎこんだ人がある。立派な角をはやした美しい獣だ、此邊一帶の山中に群棲してゐるのである。だが、我々の手許にはまだ例の羚羊が残つてゐるのでお預けにした。

今を盛りの花樹園に掩はれたスルマックの村まで一気にシラス街道をひた走る。スルマックの部落で順路を訊ねた。我々の今日の目標であるアベルグウへの傳説に富んだ通路は、此處から岐れてゐる筈なのである。教へられたところによれば、アベルグウへの通路は三本あり、その二つは自動車では行かれないが、三つ目の通路なら通れる。但し此の部落から二、三キロ米先の憲兵駐屯所へ行つて、詳しい道順を訊け、といふのであつた。

憲兵駐在所は見つかつた。かういふ淋しい地點に駐在する人はたいていさうだが、此處でもやはり、人づきのいゝ憲兵たちだつた。いやその道はなか／＼見つけ難いから、俺が少し案内して上げよう……と一人が言下に起上つたのである。そして銃を肩に、氣輕に荷物の方の自動車のベンジン罐の上へ這ひ上つてしまつた。自動車は直ちに、荒野を斜めに突きつて進む。荷物自動車の方はまるで帆船のやうだ、ときどき、道路の高低に應じて見え隠れする。

どこが道だか、それらしい跡も見えない。溪流を幾度も横ぎり、岸の崖を這ひ上つたり下つたり大した騒ぎである。今にも、此の自動車の持主と運轉手の間に争議が持上りさうで、私は内心ハラハラしてゐたが、この位の事は當然だと云つた顔を、どつちもしてゐるのでヤレヤレと思つた。

その御本尊、自動車の持主のモハメット・カン君は、絶えずよるよると揺り返されながら、運轉手の隣りの席で満悦の態である。ペルシヤ高地に新自動車道路を發見した喜びで夢中らしいのだ。

『大丈夫かい？』と、肩越しに私が、不安さうに訊ねると、

『大丈夫ですとも！』と、彼は大満足な顔で頷く。

荷物を積んでる自動車の方も同じ気持ちなのか、この白晝間に、前燈を赤々とつけ放しである。たうとう、駱駝の通つた跡が見えてきた。入り交つてはゐるが、數にして五頭か六頭の足跡が、石と砂ばかりの荒野にはつきりと印されてゐる。して見ると、やつぱりこれがスルマクからアベルグウを経てエスドへ出る最善の自動車コースに違ひない！

私は、カスピ海沿岸の港エンセリイを出發して以來、絶えず行手につき纏つてゐたイギリスランの電信線が、たうとう此處で杜絶えたのを知つて、何んとも云ひやうのない快哉をおぼえたのであつた。電信線は、此邊でシラスからブシルの方へ走つてゐるのである。

道はやがて凸凹の少し多い草原に出た。山々は、色も輪郭も鮮やかに、我々の前へずつと乗出してゐる。荷物を積んだ方の自動車では、同乗の狩獵好きの憲兵がしきりにあたりを窺つてゐる。此

邊には二百から五百位の羚羊の群棲が見られるのださうだが、我々にはそれらしい影も見えなかつた。今朝がたつた一頭、スルマク附近でモオタアの音に逃げ去つた後姿を、一瞥しただけだつた。暫らく、水の乾上つた河床を揺られて過ぎると、やがて平らな高地に出る。これから本當のドライヴだ。黄色の灌木の花が一面に咲いてゐる、空氣は暑い。遠く、何か木立のやうなものが見えた。ボロ／＼に立ち腐れた隊商宿を二つ三つ飛び越して行くうち、次第にはつきりと、樹木や建物が遙か向うに見え始めた。ほんたうに久しぶりの、快適なドライヴ気分だつた。

憲兵君は、もういゝだらうと云つて、自動車を飛び降りて立ち去つた。

それから約二時間の後、ざつと十二キロ米もある峠を二つ越えて、荒野の寒村ファラガアに到着した。壁も圓蓋も、眼が眩むほどまっ白である。

たちまち、我々の自動車も、部落民の好奇心の的になつた。車から降りることも出来ない人垣である。此邊まで自動車の來ることは滅多にないのであらう。偶々到着した我々が、かういふ目に遭ふのは當然と云はなければなるまい。

一人の老人の農夫の話によれば、此の村を訪れた獨逸人は、二十年來、私が最初ださうである。

我々は、原始的な稚拙な花崗石を刻んだ獅子の像のある墓地などを見物しながら、自動車を進めた。背後に沈んで行く山々は、此の數日來、我々と行を共にした山である。前面の霞の中に顯現する遙かな一連の青い影像、あれが、エスドの山々に相違ない。

だが待て、今日も尙ほ人跡未到と傳へられるビヤベン沙漠は、あの荒野は何處だ？ 今、我々の眼前に、百五十キロ米の廣がりを見せてゐる此の濕地帯は何だ？ 夏の炎天下に、あの沙漠が、荒野が、こんな泥海に變貌してしまつたのか！ 水面につき立つた高い葦の一行ははつきりと見えるが、水は、何か曖昧な夢を孕んでゐるやうな青だ。風ぎに立往生してゐる帆かけ船も……待て、あそこに島が見えるぢやないか。冗談ぢやない、石灰色の岬の突端にちつとしてゐるのはたしかに二本檣の縦帆船らしいぞ！ ——これが、アベルグウの圓蓋だといふことが判明したのは大分後のことで、その時は實際、誰も彼もが帆船だとばかり信じこんでゐたのである。現に運轉手も把手を取る手を止めて、『ヒヤア、こいつは大變だ湖ん中を通るのか……』と悲鳴をあげた程だつた。——

私は右手の方を指さして、『オイ、ではこつちの方にも湖が見えるぜ。』と、たつた今通り過ぎてきたばかりの高地の荒野を見せてやつたのである。

さて、我々が後にしてきた山の方から生温い風が吹きつけてきた。凄い雨雲が重々しくたれこめてゐる。と思ふうちに、はや大粒のやつがバラ／＼と落ちて來た。だが私は、雨にうたれながらも夢のやうな水車の傍に咲いた堇色の美しい花の木に惹かれて車を進めさせた。實際の話、山の清水ははるばると此處まで、智慧をしぼつた細い水道によつて導びかれてゐるのである。さつと四十キロ

米もあるといふ。おまけに、こんな貧弱な水勢でも尙ほ且つ、或る程度の役には立てられるのだ。

堇色の花の木は實はアカシヤだつた。それにしても紫堇色の花でおぼえてゐるのは、リラか紫丁香花位のものである。水車の周圍は同じ木のほかに廢屋のがらくたが積んであつた、——既に數年前に、見捨て去られた部落の殘骸である。

雨を孕んだまつ黒い雨が頭上を掩うた。とたんに、今まで見えた湖水も濕地帯も一瞬に消え去つて、圓蓋と尖塔との複雑な結合を見せた部落が、ぐつと眼前にせり上つた。沙漠の綠地アベルグウである。

眼前に廢都の趾が横はつてゐる。美しい陶瓦だつた痕を止めてゐる二本の半ば碎けた尖塔、寺院の圓蓋が一つ、これは既に完全に廢頽してゐる。幾つかの壕と穴。——此の廢趾へ自動車を乗入れることは不可能の如くに思はれたが、私は敢へて前進させた。これが、歐羅巴の運轉手なら言下に反撥けるところである。通路は極端に狭く、車輪の泥濘よけがガリガリと悲鳴をあげてゐる。此のまま進むも退くも出來なくなりさうな危険があつた。頑張りとはしてたうとう、殘壁頽礎の間に挟まれた埋立地へ出た。呆れたことに、荷物をつんだ方の自動車までが跟いて來てゐる。どうしてあの障碍物の多い曲りくねつた小路を、しかも何等の損傷を蒙らずに通りぬける事が出來たのか、私には今もつて分らないのである。

ともあれ、さし當り我々は此の燒跡のやうな廢趾に立往生する以外に途がなかつた。自動車はこ

れ以上動かさないのである。私は、自分で道を探して見たが、自動車クルマの通れるやうなやつはない。そこへ料理人のハヂが興奮して駆け寄つて来た。テブリスにゐた時分からの友人とたつた今出會つたと云つてほくほくしてゐる。(テブリスはペルシヤのアセルバアドシヤン縣の首府、人口約十八萬、ソ聯、獨逸との交易の要地である。)此の友人といふのが、ペルシヤ陸軍の少尉でアベルグウ守備隊の隊長だつた。少尉はさつそく我々を招待したいといふ。此處から五十米ばかりしきやないといふが船ならば暗礁に乘上げたも同然な此の自動車を何んとしたものか。

結局、少尉の部下の兵士に、自動車の監視をお願いして、招待に應ずることとなつた。少尉の駐屯する邸宅もひどく荒廢してゐたが、構へはなか／＼豪華で、いろ／＼と巧妙な廢物利用がしてある。歐羅巴の建築學者はこのペルシヤ式建築の原理に學ぶべき點が多々あるに違ひないと思つた。残念ながら此の家にも窓や扉がない。草原ステップを荒れ廻る電光や風雨が來襲するたびに、臨機應變の座席移動を以つて善處する以外にないのだ。

だが意外にも此の荒天シカは間もなく沙漠の方へ引上げてしまつた。住民の渴望して止まなかつた雨はやんだ。減多に降雨を見ないアベルグウの農夫諸君に取つては甚だお氣の毒な話である。

アベルグウ町の人口は現在(一九二九年)さつと五千であるが、かつては二萬乃至三萬の市民を擁して、町の廣さも現在の三倍位はあつたのである。市民の飲料水その他はすべて、さつき我々が通つてきたさつと五十キロ米も離れた山々から取つてゐる。そのやうな給水の不便に搗ウて加へて

雨量がひどく少い。二三の資産家は、煙筒えんちゆう式の塔を建てて室内の冷却法を講じてゐる。かういふ謂はゞ通風筒のことをバドギールと呼んでゐるが、こんな装置でもない、夏はとても耐えられないさうである。

愛すべきペルシヤの少尉は、ぜひ晚餐ゆかしを一緒に食べて行けと云つて肯かない。御馳走は山盛りの米飯と、非常にお旨しいラグウ、但し、中の肉は我々がもう二日も持てあましてゐた羚羊である。

(ラグウはフランス料理にも在るが、菜と肉を蒸煮にした一種のシチウである。通人の好む凝つた料理なので、美味な料理を單にラグウといふ場合もあるやうだ。)

食卓をかこんで雑談が一層はずむ。晝間は白墨チヨウシクの如く輝やいてゐた砂岩の山々の上に、御堂のやうなもの立つてゐるのが見える。或る王の墓シヤアださうだ。世界大戰當時、此のアベルグウに進駐したイギリス軍の將兵は、此の靈廟に何かひどく特殊な興味を寄せたらしい。靈廟の石の窖が、なかなか開かないので、爆發薬か何かを仕掛けた由で、そのため靈廟は無慚に粉碎してしまつたのであるといふ。現在のは、戦後に再建したのださうだが、そんな事情からも、イギリスに對する當地の住民の評判はいたつて芳しくない。

ついでに書き添へるが、アベルグウの市民は所謂『忠勇義烈の帝國臣民』ではないらしい。むしろ、他人の持つてゐる物を奪ひたがる一口に云へば泥棒根性を持つてゐる。玉葱一個の争ひがもとで殺人事件の起つた話などもある位だ。まさかそれ程でもあるまいと思ふが、とにかく、今日に於

いてさへ彼等の獨立自尊的思潮が異常に強烈なことは事實で、最近リヅァ・カンの主權をなか／＼承認しなかつた一例に見ても、かうした性格的な頑強さが窺はれるのである。(リヅァ・カン・ペレキ、一九二五年以來ペルシヤ即ちイランの王となる。)

此の新王承認問題では、たうとう首府テヘランから軍隊の派遣を見た。おまけに砲兵隊まで出動して、今日見る通り、町の大半を灰燼に歸したのである。だが、流石の市民たちもこれには我を折つたか、事變後は全般に秩序が回復されてゐるやうだ。

町の郊外には到るところに狼や豹や、野羊、羚羊の大群が出没するといふ。

『では豺はどうです?』——と訊ねると、少尉は、ちよつと驚いたやうな顔で笑つた。

『豺なんざいくらでもゐます。今夜なんかでも此の部屋へ闖入しかねません。實に圖々しいですなあいつは……』

さう云つてゐる間にも、はや何か忍び寄る足音が聞えてゐた。少尉のいふとほり、豺の群が庭内に闖入して、咆え唸り始めたのである。

生糸と指甲花

(指甲花は、根や葉から染料及び化粧料を採る。俗にヘナ粉といふ。)

エスドへ向ふ途中で眞先きに出會つたのは、エスドから出發して來たペルシヤ人の自動自轉車である。その後には、物語りに出て來るやうな少年たちを乗せた駱駝の縦列が続いてゐた。それから暫くすると今度は歐羅巴の老婦人を乗せた鼠色の驢馬に出會つた。歐羅巴人を見るのはこれが二度目である。一度はペルシヤ國立銀行の總裁、これは、此の銀行の各地支局長と同じくイギリス人だつた。

エスドの市街にはひると間もなく、一人の男が飛び出して來て、恰好なお邸が御座います、と話しかける。部屋が六つあつて設備も上等で、家賃は一日一クラン十シャヒだといふ。これは成程高くない。運轉手たちには別に、市場の近くの宿舍が決つてゐた。私は、本來なら小さな部屋が二つもあれば澤山だと思つたが、とにかく自動車を降りることにした。——

『だが君たちは何處へ寝るね?』と、料理人に訊ねると、

『手前共ですか?』と、さう云ひながらハヂは居間の前の鋪裝した廊下を顎でしゃくつて答へるのだつた。

『これこれ、これで結構でさあ、手前共にはもう。』

日用品を賣る市場はすぐ近くだつたから、料理番のハヂ・カシムは大喜びである。銀貨をいつばい詰込んだ財布を握つてさつそく買出しに飛び出した。その他の従僕たちも、運轉手もみんな大した機嫌で、晩になると踊つたり唄つたり大はしやぎである。イラン中部の大都會エスドの生活が、

すつかり氣に入つたらしい。

ペルシャ時代から有名だつた古都エスドは、今日までに私の見て來たペルシャ風の町々とはすつかり容子が變つてゐる。此の都の形式では、例の回教國特有の圓蓋まるやわや寺院の尖塔が幅を利かせてゐなかつた。むしろ、何百とも數知れない細長い塔が林立してゐる風景は、イタリイの小都會の鐘樓を思ひ出させる。此の細長い塔は、前章で説明したバドギイルである。つまり通風筒で一種の冷房装置だ。

エスドの位置は地理的に云へばゲルムヰルつまり熱帯なのである。凡ゆる建築が先づ暑さを凌ぐ點に眼目を置いてゐるのだ。古い壯麗な市場街を見ても、建物を掩ふ圓蓋にはすべて小さな孔があけられ、日光はそこから雨か霧のやうにさしこんでゐるに過ぎない。その他の商店も同じく、圓蓋を以て日光の暑熱に備へてゐるのだ。

もう一つ此の都會の特徴は、井戸が非常に深いことである。水面まで行くのに四十乃至五十位の石段を降りなければならぬ。一般市民の需要には水道カナアテンが施設されてゐる。これは數哩も離れた遠方の山から水を誘導する装置だ。だからしてもし此の地下の水道の傾斜が緩漫な場合には、當然、各戸の井戸を適當に深くする必要が起つて來る。新たに建設されたイラン水道は、地下五十米位まで深いさうである。エスドではこれほどではないが、尠くとも地表下十米から十二米位は深いであらう。従つて大抵の家では、井戸を六米乃至八米掘下げて水汲み場所を用意してゐる。たとへば、

我々が滞在してゐる此の小さな旅館ホテルの如きも、一階は全部地中に在り、然も、井戸へは尙ほ、下の窖から更に數米降らなければならぬのである。

エスドは、何百年來、絹織物の産地として有名だつた。近郊一帶の部落では、桑の木の栽培が盛んだし、男も女も生糸こも紡ぎに忙しい。エスド市だけでも、地下の窖に在る原始的な手織機の數は何百と數へられるであらう。之等はみな現在、二人一組の少年少女たちが、屑糸や切れた糸を繼ぐのまきに使用してゐるので、その用法を見ると、雜多な色の交つた綱の端に重い砂囊をつけて、適當な伸度を保たせてゐるのである。

染料の色とその模様には、今日も尙ほ素晴らしいものが傳承されてゐる。他の凡ゆる織物工業と違つて、絹布工業だけは、古い傳統がそのまま嚴守されてゐるらしい。

エスド市のもう一つの重要産業は、指甲花ヘナである。ヘナは周知のとほり染色劑を取る植物だが染色だけでなく例へば髪や髭を洗ふにも利用され、その他、近頃流行の美爪術に使用されてゐるあのヘナ粉と呼ばれるものだ。——諸君は、十本の爪を全部まつ赤に染めてゐるモダンガアルを見たことがありだらうと思ふ。ところがこのエスドでは面白いことに、小羊や時には白馬までが、折角の美しい鬘たてがみや脚をまつ赤に染めてゐるのである。エスドは、此のヘナ生産では全イランを通じての獨占工場だ。イラン人全體の需要を満たすばかりか、隣接の諸國へも盛んに輸出してゐる。

エスドのヘナ製粉工場を一見した者は、永久に忘れ得ぬ印象を受けるに相違ない。製粉場はざつと二三十、いや實際はそれ以上かも知れないが、何れも嚴重な圓蓋や窓を設けて、必要以上の日光を通さないやうにしてゐるから、内部はいつも薄明時のやうにうすぼんやりとしてゐる。そして緑青色の粉で空氣もなにも、一色にぼやけてゐる。

朝は早く、夕方はおそくまで、此のうす暗い窓の中で、駱駝が一頭行つたり來たりしてゐる。粉挽のうすを働かしてゐるのだ。勿論、駱駝もヘナ粉を浴びて緑青色に變つてゐる。長い頸の上に丸い小籠をぶら下げてゐるのは、かうした連日の堂々廻りによつて正氣を失はないためである。足音を盗み、飽くことも知らずに此の産業戰士は、終日の圓周運動に休むこともない。此の地下の世界を一瞥した者は、まるで呪縛をかけられたやうな光景に、文字どほり幽鬼にでも出會つたやうな印象を受けるのである。

製粉装置は實に原始的だ。人の身長ほどの垂直に立つた磨石が一つ、支柱を中心にしてぐるぐる廻つてゐるだけである。かういふ道具も勿論、緑青色の埃を被つてゐる。

小さな子供たちが、時々、粉のやうなものを磨石の下の板の上にシヤベルで掬ひ込む。これが指甲花の葉を乾かした原料だ。指甲花の原産地は南方の、特にバアム地方が一番多い。

エスドには製油場もある。木棉の實から油を搾るのである。この工場も甚だ不細工で恐ろしく舊式だ。斜めに渡した一本の杵が、石の重量に押されて原料の棉の實を、石臼の底へ壓搾するだけの

装置である。此の杵を動かす産業戰士は今度は牛だ。これも朝から晩まで、おまけに兩眼に目隠しをされて、退屈な行きつ戻りつを繰返す。但し此の場合には頸に小さな鈴がぶら下げたのである。牡牛の居眠りを豫防するに役立つものらしい。——此處でも前に云つたヘナ製粉場でもさうだが、時々之等の原始的な器具から、途方もなく肝高い悲鳴に似た音響を發することがある。ちやうどそれが我々の耳には、窓につながれて黙々と苛酷な使役に服してゐる憐れな動物たちの嘆きと訴へのやうにも聴きとられるのだつた。——

エスドには美しい公園が二つある。と云つてこれは、あの廣いばかりで味もそつ氣もないメダニ大王の城趾の話ではない。立派な名前もないしさう廣くもないが、美しいそして親しみの持てる場所なのである。

その一つは、我々の旅館のつひ近くで、可愛い、回教寺院の尖塔が陶瓦の明るい綠色に輝やき、特有の圓蓋が、市場へのうす暗い通路へせり出してゐる場所である。周囲は、屋外工業者の屋臺店でぐるりとかこはれてゐる。

もう一つの方は、市場街自身の中央に在つて、美しいよほど老齡の樹が二本ばかり、涼しい綠蔭を成してゐる場所だ。長さ二十米、幅六米ばかりの泉水がある。これをめぐつて柱をつらねた所謂列柱廣間式の建物が並び、金物細工やパン焼きから凡ゆる種類の手工業的店舖がその中に在る。云

はゞ此の泉水のある一角は、終日の生存競争に疲れた人々を慰さめる緑地オアシスなのだ。荷擔人夫も驢馬も、駱駝も人に乗せた牡牛も子供も乞食も、みんな此の可愛い泉水に來て一瞬の慰安を與へられるのである。

エスドの市民は殊のほか深切だつた。我々が外出すると大多數の人が會釋する。中には氣輕に手を貸してくれる人もあつた。更に念の入つた人々は、自分から進んで面白い商取引場や、市場、泉や井戸などを案内してくれられた。然し、さういふ人々でも、旅館ホテルまで送つてはくれなかつたのである。

沙漠に没した古都

數百年前の昔は、エスド市は現在よりも五キロ米ばかり北に在つた。その舊趾へ行つて見ると、今でも町の區劃の跡や、隊商宿のあつた場所、砂に埋れた井戸などがはつきりと残つてゐる。かういふ云はゞ残壁頽礎に就いて少し注意すれば、沙漠が數世紀の昔此の都に挑んだ殲滅戰の詳しい様相を窺ひ知ることも難くないのである。無慚な殲滅の暴風おろしは、數世紀にわたつて古都エスドを襲つたのだつた。最初、沙漠の砂が都の墻壁の高さまで積つた。その状態のまゝ長い休戰期間が過ぎると、今度は砂の大軍は一舉に防壁をのり越え、徐々に庭園を征服し、家の建物を襲ひ、水路を遮斷

した。水道も井戸も無論駄目になつたのである。このやうにして、つまり給水の途を斷たれて、古都エスドは、沙漠の遠征軍のために渴死したのだ。

新しく此處に甦へつたエスドにも、早晚、同様な運命が約束されるかも知れない、が、それまでにはまだ――先きが長いであらう。

とは云ふものゝ、沙漠は都の北方から機會を覗つてゐるのだ。現在でも、少し強い風が吹くと、黄ろい塵雲がいつばいに北の空を掩ふのである。ましてそれが暴風おろしとなつた日には、都の上空一面に黄塵の煙幕がはりめぐらされ、天日ために昏い有様である。沙漠の風、それがエスド市民の脅威だつた。

終日、私は都の北の空に舞ひ群る萬丈の黄塵を眺めたことがある。あの砂塵の狂亂の遙かなあたりに、エスドの前身アシエカザルの古都は永久に眠つてゐるのだ。エスド市民は誰一人として此の謂はゞ兄の、父の、祖先の、都の塵趾を訪れようとしなが、その在りし日の話は代々、耳から口へと傳承されてゐる。今日ではもう神話のやうに、もしくは架空な傳説とさへ化してゐる傾向がないでもない。アシエカザルの末期の様子なども、諸説紛々として定説を知らぬ現狀だ。料理番のハチが市場からいろいろなさうした傳説を仕入れて來る。イランの市場では、肩々相磨す混雜の中から意外のニウスを拾ふことがあるのだ。此の意味で、イランの市場は新聞の役目どころか情報局の役割さへ果してゐると云つても過言ではあるまい。

とにかく、砂に埋れた古都アシカザルは、一度自動車を飛ばして見る価値がある。いやいつそ駱駝に乗つて、一日か二日の餘裕をかけなければ、アシカザルを語る資格はないかも知れない。がそれはとにかく、私は自動車を飛ばせることに肚を決めた。そして倅ひにもエラオバッド村まで迷ひもせずに着いたのである。目ざすアシカザルまではまだたつぷり十キロ米はあつた。

エラオバッド部落は、謂はゞ石と砂の荒野の中の緑地である。だが此の部落だけを、あの遠い昔の慘鼻の歴史から免がれしめた自然の法則とは、いつたいどういふものなのであらうか。

飛び砂の厚ぼつたい層に掩はれた畑、ちやうどその一つが掘返されてゐる。恐らくは、此の部落民のこれが、飛び砂との恒久的な戦闘といふ此の事が、一つの悲しい宿命なのではあるまいか。然も一度、砂塵を捲いた疾風が沙漠から揚れば、部落の運命は永遠に決せられるのであらう。

エラオバッドの住民は、全イランに散らばつてゐるサルドシュ族と同じだ。女達は肌を出して歩いてゐる。だぶだぶの色のついた腰布に赤い模様の肩かけをしたきりだ。なかなか美人が多い。仕事はたいいてい生糸紡ぎで、仕事をする間は、髪に捲いた布の中に蠶のまゆを入れてゐる。――

この部落の或る農夫から駱駝を幾頭か借り受け、それに乗つてそろ／＼と沙漠へ進んだ。頸の鈴が長い餘韻を曳く。曳子たちは、時々、短い歌謡を唄つて駱駝をかり立てる。私の前の駱駝はまだ少年らしく、ちつともいそがないで悠々自適してゐる。時々、曳子が此の怠け者の尻尾を持ち上げ急所をピシヤリと引ばたくと、その時だけ申譯けみたいに走りだすのである。こんな風で、アシカ

カザルの死都まできつかり二時間かゝつた。

砂丘が、死滅した古都の龐大な城壁の殘骸のところまで段々に盛上つてゐる。すぐ近くには半分崩壊した回教寺院の圓蓋が、砂の上に突出してゐる。崩壊はしても寺院その物はまだ或程度まで原形を保つてゐる。例へば銘を刻んだ一枚の大理石板の如き、此の寺院の形式と雄大な美とを暗示して餘りあるものと云へよう。だが、その縁を飾つた美しい色陶瓦は大部分、破壊されたか盗み取られたか、わづかに片鱗を窺はしめるばかりだつた。寺院の内苑とおぼしいあたりも、今は只だ龐大な砂山を見るだけである。

その砂丘は、大體五米から十米位の高さで、うねうねと寺院をかこんで走つてゐる。恰かも巡禮者の一團が、一瞬立止つてゐるかの觀があつた。砂は非常に微細だ、立派な砂時計の材料になるかも知れない。砂丘の面は風によつて美しく彫琢され巖をつけられ、ちよつと見ると、將に崩れんとする一瞬前の浪頭のやうである。此邊では南西の風が優勢らしい。――

古都アシカザルを葬つた沙漠の猛威がどんなに暴虐を極めたものだつたかは、僅かに殘つた寺院の圓蓋に立つて見渡した時に、始めてその真相をさることが出来る。砂、砂、砂、遠く地平の彼方まで涯しなく続く連綿たる砂の浪だ。その澎湃たる砂の海の持つ底知れぬ壓力だ。そちここに住宅群の痕を示す壊れた圓蓋が見え、街路と庭園の在處を物語る墻壁の吹倒された殘骸が見える。生けるものの痕跡は何一つなく、一羽の鳥も一茎の草もまつたく見られなかつた。古都アシカザ

ルの規模は、相當廣大だつたに違ひない。かつては丘の上に建てられたに違ひない城壁と寺院までが、今は完全に砂の底に葬り去られてゐるのだ。

我々が此の死の都に着いた前後から、鋭い風が吹き始めてゐた。沙漠の底力を思ひ知れと警告されてゐるやうな氣がした。砂丘の頭がタバコのやうな白烟を立て始め、砂はまるでふいで煽られるやうに舞ひ上り飛び去る。好奇心から此處まで跟いてきた部落民の女子供は、これを見ると慌てて逃げ歸つた。一人の幼児の如きは、いきなり坐りこんで、頭を抱へて平伏してしまつた。もう少しで吹き浚はれるところだつたのである。待たせておいた駱駝たちもあの長い頸を一齊にすくめ、曳子ひまこはまた隠れ場を求めて駱駝たちの間にもぐりこみ、布をひろげて頭からかぶつてゐる。

忽ちにして日が翳り、黄塵の龍巻たつまきが猛然と我々の上に襲ひかゝる。我々は寺院の廢趾の中に避難した。

人間といふものは變な生物だと沁々思つた。

古いアシユカザルは既に數百年前に死滅してゐるのに、人間はその隣りへまたしても新しいアシユカザルを建設したのだ。此の新都も今日では既に古都となり大部分廢趾と化してゐる。砂山は既に廢趾と化さうとしつゝある城壁に這ひより、通路は悉とく吹き浚はれ、庭園や菜圃などももう砂に埋もれた。だが、さうなつてもまだ人間は一隅一角の餘地を求めて此處に住まうと努めてゐる。

やがて此の第二のアシユカザルが砂中に没する日も遠くはないであらう。

黄塵の嵐が漸く鎮まつたと思ふと、ぢきに我々の避難してゐる廢趾の横に姿を見せた一人の男がある。これから徒歩でイスファハンまで行くのだといふ。緩々と、まるで急ぐ氣色も見えない。この沙漠の中央まんなかを通つて、一ヶ月かゝつて目的地へ行くつもりなのだ。

新たな突風が起つたと見え、沙漠の方に狼火のやうな黒い砂塵が捲上つた。我々は急いで駱駝に飛乗り歸路についた。前のエラオバットまで來たころ、急雨がざあつと來た。

いま頃、あの沙漠の中の廢趾はさぞ物凄いいことであらう。

黄塵の風——(沙漠の嵐)

再び出發。

この古い優しいエスドの町に左様ならするのが本當につらかつた。モハメット・アジャは例の如く、自動車くるまの昇降口の踏板の上に、泰然自若と納つてゐる。其處に置いたベンジンの箱を座席として世界一周でも敢へて辭さない決心らしい。

新しい伴侶みづれがまた殖えた、ブルブルといふ名前の小犬と夜鷲うぐいす。犬は、生糸はたきの機織工場の横丁で哀れに泣いてゐるのを拾つてきたのである。まだおどおどと頼りなささうな容子が、いつそ白毛の仔

羊のやうに見える。

エスドからケルマンへの街道は、最初の間はエスドを圍繞する物凄く繁茂生成地帯だが、暫らくすると、それ等の濃緑色の畑も鬱蒼たる桑園も置去りだ。モハマッダベッドの壯大な隊商驛の廢屋がまるで城趾のやうな印象を興へてゐる。之を建設させたアバス王といふ人は相當派手なことが好きだつたらしい。自動車は砂と小石の上を走り、どこまで行つても平べつたい河床の割石や、岩と沖積層の老大な三角洲の上である。

やがて素晴らしい高原の一行を斜めにつつきる。高原と高原との間は所謂鞍部を成して連絡してゐるのだ。霧が降りてきた、氷のやうな風が吹く。一同外套の中にくるまる。眼前や、東よりの空中に黄塵が濛々と捲き狂つてゐるのが見える。沙漠を掩ふ砂の踊りだ。始まりから終りまで手に取るやうに見える。いきなり火柱のやうに立上ると、ぐらつと旋廻し、それをきつかけに猛烈な活動が始まる。その渦卷の一つが我々の方へ襲ひかゝつた。猛烈な力である、自動車はもう一步も前進できない。あつと見る間に自動車の屋根がメリメリと剝がれた。持主のアジャが青くなつた。自動車をやられては大變である。大慌てに慌て、パクパクになつた屋根をやつとこさで縛りつける。

此邊一帶は、私の見た限りではイラン中で一番貧しかつた。貧弱な部落が一つと、古びて黒ずんだ憲兵駐屯所が二つばかりあるだけである。まる一日の行程で出會つたのは驢馬が二三頭、それだけだつた。シャマの古びた隊商宿では、牆壁に積み上げた貨物の陰に、氷のやうな疾風を避けて縮

み上つてゐる隊商があつた。駱駝の數は六十頭ほどだつた。彼等はエスドの製粉場へ指甲花の葉を運搬するのであらう。――

アナル村へ、すつかり冷えきつて到着したのがもう薄暮。電信局の技手が親切に我々を庭内へ收容してくれた。アルメニヤ人だが英語は達者である。

アナル村は、半分いや正しく云へば四分の三までは廢屋ばかりの、文字通りの寒村だ。沙漠の方に向いて盜賊團の巢窟の殘骸がある。部落民が火を放つて、此の物騒な追剝どもを燻し攻めにしたのださうだ。まだ塔や厚い壁などが残つてゐる。官憲は盜賊の首魁を捕へて、舌を斬らせると威嚇したら、盜賊はその極刑の代償金として十萬トオマンを提出して釋放されることになつたが、何故か間もなく絞首臺にかけられた由である。

さて、今の電信技手の話によると、此の村に赴任してもう半年になるが、その間此處を通行した歐羅巴人は全部で三人だつたさうで、久しぶりに私といふ話相手を見つけて嬉しさうだつた。彼の細君はもうまる三月といふもの生死の間を彷徨する重態で、看護人と醫師の二役をやらねばならぬとも云つた。お手のものゝ電信でエスドの醫師からあれこれ手當の指示を受けてゐるのです、と語る技手の顔には、未だに不安の影が残つてゐる。

アナル村の貧しさに引代へて、村の畑の廣大なこと、その豊穰なことは何といふ皮肉な對照であらうか。折から長い列を成した農夫たちが畦拵へをしてゐる最中だつたが、この農夫たちは農奴に

等しい作男にしか過ぎないのだ。アナル村全体の耕地は大部分、一、二の資産家と数名の回教僧の私有である。一人の農夫が一年間の耕作運営によつて興へられる報酬は百人分の大麥であり、之に對して所有主が得るところは千五百人分の麥である。農夫の食糧は大冬の中に盡きてしまふ。そこで地主に頼んで麥の前貸しを受けると、承知はしてくれるが翌年の收穫時にはその三倍を返すといふ條件づきなのである。

今夜一晩たつたら、昨日來の砂暴風も納まるだらうと心持みしてゐたが空しかつた。アナル部落の畑地を後にするが早い、黄塵を捲く獨得の暴風がまたしても高原を掃蕩してきた。龍卷が昇つて踊り狂ふ。東の空では、猙獰な硫黄色の噴煙のかたまりのやうなやつが、雲の上まで飛上つて見る見る山の嶺を掩ひ、次ぎから次ぎと狂ひ廻つてゐる。また別の龍卷がギリギリと沙漠の上に立ち上つた。大部分はその場を動かないのであるが、中には飛ぶやうに移動するものもある。今度は我々の背面にも一本まき揚つた。まつ黒い噴煙のやうに伸び上つたと見る間に、妖怪のやうな旋廻を始め。沙漠全體が、何萬とも知れぬ羊の大群の遁走してゐるやうにも見える。

龍卷と渦風が四方八方に揚りだした。是が非でも此の中を突破しなければならぬ。瞬間、ザワザワと鳴る砂の煙に包圍されて何事も見えない。運轉手は手探りしつゝ車を進める。目前の灌木さへ辨別がつかないのだ。

だが、この位の砂暴風なら、モオタアさへ完全な自動車を以つてすれば、決して克服出来ぬ難關ではない。我々は、此の黄塵と突風の狂亂するまつ只中を、十五分、いや十分位で突きぬけた。然し假りにこれが駱駝や驢馬だつたとしたら、それこそ容易ならぬ惡戰苦闘を免がれまい。

今日といふ日は、沙漠にもいろ／＼な種類のあることがよく分つた。貧弱ながらも灌木の生えてゐる焼石原のやうな沙漠もあれば、砂丘の上にいぢけた御柳が花をいつぱいにつけてゐるところもある。——最後に數哩に亘る雪野原のやうな荒地を走りぬけた。此邊の土は鋤き返されたやうに、或ひは何百萬の獸の蹄に踏しだかれたやうに、亂雑をきはめてゐる。そしてそれ等の土塊にはみな片側に鹽がベツタリとついてゐた。

交通はまつたく無い。小規模な驢馬隊商の一、二を見かけたきりで後は絶無だ。此邊の墓場の様式は大分從來のと變つてゐて、墓標の頂邊に小さな天蓋が載せてある。

大規模な井泉がそちこちにあるので、相當大きな部落が近くに在るなと思つた。用水路が光條の如く荒野を貫いて走つてゐる。何百といふ噴火口を持つた月世界の荒野は、こんな光景だらうと思ふ。小さな町の塙壁や樹木らしいものの影が、捲き上る黄塵の奥にほんのりと揺曳してゐる。振返ると、沙漠の暴風は灰を撒き散らしたやうに荒野の上を吹きまくつてゐた。

バアラマダバッドに着く。自動車修理所を見つけ、そこで夜を明かすことにする。直ぐお隣りが搾油所だつた。眼隠しされた水牛が型の如く搾油桶を中心にして永遠の圓周運動をやつてゐる。日

が暮れてからもずぶん遅くまで、水牛の頸の鈴が澄んだ音色を聴かせてゐた。

バアラマダバッドには、單純だけれども美しい市場がある。此の町は、附近一圓の村落の生活を賄ふ所謂地方主都だつた。従つて各地との隊商による交通が盛んであり、或る程度の繁榮と好況に恵れてゐることは否定し得ない。實際のところ、私が見たイランの大小の都會を通じて、此のバアラマダバッドほど清潔なまぢんとした町はあまり多くなかつた。だが、此の美しい簡單な都は我々をもつと長く引止めたかつたのか、荷物を積んだ自動車を雲隠れさせてしまつた。たつぷり一時間も、町の外壁や廢趾のあたりを探し廻つたが駄目だつた。電信もきかない。揚句のはてに今度は我々の乗つた自動車が溝に乗りこんでしまつた。そんなわけで、結局もう一度、一旦出發したバアラマダバッドへ引返すより仕方がなかつたのである。

運轉手が順路を訊いてゐる間、私の眼はふと、用水の水道を掃除してゐる農夫の上に落ちた。此の水道は、前にも述べた通り地下を走る人工の水道である。二十米乃至三十米の間隔を置いて地中に大きな穴を穿ち、その間を一本のトンネルで連絡するのだ。今、農夫が働いてゐる水道の穴は相當深いらしい。人間の身長位の釣瓶仕掛の車輪に、綱が勢ひよく滑つてゐる。これによつて推算すると、水道の深さはかれこれ地下十六米位らしかつた。

井泉の穴口からは、ズックの袋だの獸皮だのが、混砂粘土の泥にふくれて入れ替り立替り上つてゐる。それをあけるのが上に居る少年の役目だつた。

すると誰かほかにもまだ地底にもぐつて、泥をさらつてゐるものがある筈だ。

『だつてそりや誰かゐなくちやアね、子供が三人ももぐつてゐるんですよ！』

農夫からさう聴くと、私はすぐ云つた。

『その子供を一人呼んでくれないか、何か御褒美をあげたいから』

農夫は、子供の名を穴口から呼んだ。だが子供は、上るとぶたれるから嫌だといふ返辭である。穴の下からの聲だから、無論はつきりと聞えたわけぢやないが、さういふ意味らしかつた。たつぷり五分間ばかり、地上と地下とで、農夫の父子の押問答があつた後、到頭子供は同意したらしい。釣瓶の車輪がまた勢ひよく廻り始めると、綱の一端にぶら下つたやつと五歳位の少年が、眩しさうな顔をして地底からあがつてきた。頭に手拭ひを捲いたきりで、裸體の全身は泥まみれである。子供は、寒さうにちびこまつてゐたが、用がすむと急いでまた穴の中へもぐつてしまつた。

こんな幼ない子供たちにとつて、たしかにこれは難事業だ。大抵の場合、地下を走る水道の中は大人では身動きが出来ないほど低いのである。これによつて推定されることは、全イランの産業とその國民の生活とを支持し建設する基礎は、實にこんなにも窮屈な地下水道にほかならない、といふ結論だ。

さて、我々のアラビヤ生れの運轉手がやうやく戻つて來たので、今度は安心して此の美しい地方

首都を後にすることが出来た。時間は豫定より一時間半も遅れた。

進路は直きに灰色の砂原にかゝる。塔があり部落があるが、何れも砂をかぶつて窒息したやうに見える。一昨日から昨日と、二日に亘つて猛威をふるつた砂暴風も、やうやく静まつた。だが、此邊の自然は何んといふ悪戯者であらう。遠く、明るい湖水を見つけて勇んで自動車^{クルマ}を走らせれば、湖水は忽ち雲散霧消して漠々たる石の荒野の正體をあらはす。

ロバアト部落で一休息。此處の隊商宿も既に古いが、實用にはまだ十分のやうだ。これもやはりアバ大王の遺業の一つである。庭上に累々と、新鮮な駱駝の糞が堆積してゐる。約百頭の駱駝が、昨日あたり此處で休んだのであらう。

ロバアト部落の直後は、無慮數哩に垂んとする混砂粘土の一面の海だ。まるで水面の鏡のやうに平滑で光つてゐる。其處には生物の棲息してゐる氣配は一つもない。粘土は日光に照りつけられてコチコチに乾いてゐるが、それでも尙ほ、こんな廣大な粘土の上に行くことは不氣味で不安な感じがするものだ。なにか落ちつかない氣持でその上を進む。そちこちに、獸の蹄の踏込んだ跡が見える。此の粘土層はたしかに浮いてゐるに違ひなかつた。下は泥濘の濕地帯なのである。あの無慚な蹄の跡と同様に、我々もいつ自動車ぐるみ沈没するかわからない。時々、此の頼りない粘土層がしなしなとなる。まるで薄氷を履む思ひだ。運轉手は慌て、方向轉換をやつてゐる。雨でもあつたら、此處は當分通行不能になるだらう。

バギンの町を右手に遠望しながら、吹きさらされた峯と峯との鞍部をつつきり、約二千米の高地に登りついた。此處からの通路は素晴らしい。ただの一錢も要らぬ素晴らしい道が、幾百キロメートルも知らず、蜿蜒として走つてゐる。――

最後に再び峠を降ると、遙かに鬱蒼とした樹が見えてきた。あれがケルマンだ！ 蝗の群が空をきつて唸つてゐる。まるで蜂雀ぐらゐもでつかいやつた。そいつの大群がゴオツと通過すると、その間中、自然の眺めがまるで吹雪でもかぶつたやうにぼやけてしまふ。

ケルマン

また新天地へはひつた。此處の婦人たちはまつ白な麻布にくるまつて、まるで幽霊が彷徨してゐるやうに見える。大分暗くなつてゐたので我々は泊る所を急いで探した。まだすつかり出来あがつてない自動車の車庫の中の、貧弱な蟹の穴のやうな小部屋を提供された。で、警察に行つて相談すると、署長は、私のさし出した名刺を見てペルシャ流の慰問^{いんもん}さで應接するのだつた。署長はつい近頃歐羅巴へ行つてきたばかりで、パリにもベルリンにも滞在したさうでフランス語はなかなか達者である。さつそく、署長の計らひで一軒の空家になつてゐる農家に引移つた。美しい庭のある家である。従僕や運轉手たちの瀨所にもこと缺かなかつた。

ところがその晩おそく庭へ出て見ると、呆れたことに、彼等はいづれも毛布にくるまつて野宿をやつてゐる。モハメット・アリまでが同じ格好で眠込んでゐるのだ。

まつ白な麻布(被布)にすつぽりと全身をつゝんでゐるケルマンの婦人たちから受ける何か不氣味な、幽霊のやうな印象は、夜があけて明るくなつてからでもなかなか消えない。とりわけ、うす暗い市場街の建物の雑沓の中で彼女達を見ることは、一層その感を深くさせられるのである。市場街の圓蓋屋根の狭い光線窓(おかり)から落ちる光條の下などで見ると、忽ちそこに大理石像か何か動き出してきたやうな錯覺をおぼえるのだつた。

然し時がたつにつれてだんだん此の不気味な白い衣類にも慣れた。彼女たちの活潑な饒舌を聴き暗鬱な眼が好奇心にキラキラと輝やくのを見る機会が重なるにつれて、かやうな白い被覆物の中にかくされてゐるものがやはり人間であつたといふ確信を得たのである。

古都ケルマンの市場街は豊かでなかなか氣品があるやうだ。ほかの都會のよりも一段と建物が高い。所謂二階建だが光線窓(おかり)はエスドのよりも一層小さいのである。

建築はすこぶる上等で大へん美的であり、種々な包装のまゝの貨物や雜貨が山のやうに積まれ、活氣横溢の觀がある。ケルマンは云はゞ通商の中心地で、道はエスドへもバアムへもベルチスタンへもさてはナイベンド、ビルヂャンド、ツウン、メシエドへも、文字どほりの四通八達だ。集散する貨物の大部分は、ペルシャ灣のバンドルアバスから來る。自動車など此處では大して重要な役割を演

じてゐない。エスドへでも、バアムへでも、乃至はまた英領ベルチスタンの國境驛ヂュスタブへでも、容易に達し得る立派な道がひらけてゐるのである。

以上あげた以外の道路は悉く隊商の交通路で、其處には千年前と同じやうに、駱駝、騾馬、驢馬等の行列が、荷造りした貨物を負うて沙漠を横ぎり、山を越えて行く。

人間が此處に住むやうに成つてからざつと四萬年も経つてゐるといふ此の古都ケルマンの實際の都齡(よはひ)は、アラアの神だけが知ること(だれ)にも數へきれないのである。少し鹽けのある水を湛へた幾條かの水道が、都會を中心に星形を描いて、沙漠を貫ぬき、山々へと走つてゐる。長いものは四十キロ米にも五十キロ米にも達するのだ。云はゞ、四萬年の古都ケルマンは、文字通りの巨大な、泉地(オアシス)なのである。

ケルマンには壯麗きはまらない原始時代からの大庭園が幾つかあり、其處に生ひ茂つた樹々は神祕に満ち、設けられた泉地は極めて風趣に富んでゐる。葡萄、巴旦杏、蜜柑等の果樹も生ひ茂つてゐる。それ等に取かこまれて、ケルマンは八百米は優にあると思はれる高地に、傲然と聳えてゐるのだ。建築物の中では、マドレセエ大學の古い様式が別して美しい。政廳の建物はおほむね新しくなかな上等である。また資産家たちの別荘も相當凝つたものだが、市民の住宅の大部分はこれに反して、程度の差こそあれおしなべて貧弱な粘土小屋である。

都會のつい近くの丘の上に、往古のケルマン城の廢趾がある。かつてのベルチスタンの進出に備

へた防塞だ。今はもう城壁や望樓などの残骸を止めてゐるに過ぎないが、敷地のそちこちに、美しい古代陶瓦の破片などを散見する。私の見たところでは、未だかつて此の廢趾を眞摯な氣持で發掘した人は無いらしい。

嬉しかつたのは、此のケルマンで、古い友人のミルツァ・ゾレイマン侯に再會する機會を得たことである。彼は以前イスファハン總督をしてゐた人で、此の新しい任地へ到着したのは私よりほんの數日早かつたのだ。今後彼が殆んど獨裁に近い權力をもつて管理する區域は、實に獨逸帝國の半分に達する程の廣大な地域なのである。

テブリス、メシエド、カシャン、サルタンアバド及びイスファハンと相並んで、ケルマンは毛氈工業の中心地の一つだつた。勿論これ等の土地以外にも、遊牧民や農民たちによつて營まれる小規模な毛氈工業は隨所にある。例へばカシュカイ遊牧民部落その他によつて生産される毛氈の如き、國境を超えた名聲を勝ち得てゐるのも尠くない。

ケルマン産の毛氈は、昔から品のよさと美しさで一流の市場價值をもつてゐるが、うちあけたところ、私の今度のイラン旅行で得た見聞から云へば、比較的新しい生産に成るものでは注目を惹くやうなものが殆んど數へるほどしかなかつた。むしろ、例へば古びた鞍ぶとんだの、駱駝に負はせる貨物をくるんだぼるぼるの古毛氈だの方に、ペルシャ毛氈のかつての高い品位と美しさを感得する場合が多かつたのである。ある僻遠の寒村で農夫が用ひてゐた鞍かけ囊の如き、雑巾のや

うにさしてあり擦りきれきつてゐたに拘らず、尙ほ且つそのどこかに、往昔の高貴な味を残してゐるのを見た。これとは反對に、今日新製品のペルシャ毛氈が示すものは明かに、此の國の古い光輝ある此の産業部面の墮落にほかならない。模様も亂暴で練達の痕がなく、染色術にいたつては高價な品でさへ粗雑で下品なのが尠くない。政府自身はかういふ古い傳統のある産業の救済にあまり力を注がないのだ。たとへば、アニリン染料を驅逐するためばかりに、國內産の染料を使用してゐない毛氈類に對して著しく高率の輸出税を課してゐる如き、よき一例であると思ふ。

だが、今度私は、古いペルシャ毛氈の復活を眺め得る喜びを得たのである。ケルマンではみな古い傳統の規範に従つて毛氈の生産をやつてゐた。これ等の規範は、永らくの間忘却の外に置去られた優れた工藝家たちによつて創案された方法なのである。一般に云つて、かゝる古い傳統はケルマン市から遠く距つた農村や遊牧民部落の方が、他の多くの州や縣よりもより善く、そしてより長く維持し存續してゐた。私がケルマンに来て見た藝術的に優秀な毛氈の品々は、品質から云つても第一級のものだつた。古い美しい傳統のかやうな復活再生の恩人は、ケルマンの或る大きな商社を指導してゐるまだ若い瑞西人なのである。

ケルマン毛氈の大需要者は北アメリカである。だが此處數年來アメリカの註文したものは極端にけげばしい染色と奇抜な模様だつたので、ケルマン毛氈業はひたすら此の最大顧客の希望に叶ふやう努力してきた。ところで倅ひにも最近の二三年來は、所謂アメリカ好みの註文が著しく趣味的

に向上してきたことから、ケルマン毛氈の業界も漸く従來の浮薄な傾向を脱して、より美術的な生産に復歸することが出来た、といふ次第だ。

毛氈の生産は、先づ全體の圖柄が決定される。續いてそれ等の個々細部の意匠が、細かい格子縞の紙面にスケッチされる。云はゞこれ等のスケッチが、全體の圖柄の編目編目の數を、嚴密に計算し得る根據となるのだ。最後が染色だが、ペルシャの圖案家諸君は、圖案そのものはお話にならぬが此の染色に關する限りは、まだ頗る着實な趣味を持つてゐるやうである。私は、四人の従業員が三年間かゝつて一枚仕上げたといふ非常に高價な毛氈を見せて貰つたが、その圖案は新しいと云へば云へるものゝ、お話にならないほど無趣味な、牧羊者と羊の群を描いたもので、古いペルシャ獨得の意匠に歐羅巴風の嗜好が混じた悪例の一つと云へるであらう。

一般にケルマン毛氈の輸出年額は一千万マルク(日本貨に換算すると、ざつと五百萬圓)と評價されるが、實際には比較的信頼し得る統計もないのである。ケルマン毛氈はケルマンでも一平方呎の價格が五クラン乃至十クラン、即ち一平方呎の價格が五マルク乃至四マルクはする。ケルマンの毛氈工業は悉く個人的な小規模の經營で、私は滞在中にその工場の一つを見學したが、通風採光ともによく、所謂、衛生學の見地からはまつたく申分のない建物であつた。其處には十個の大きな織機が据ゑられ、その各々に、幅四米乃至五米はありさうな毛氈が捲いてあつた。何れを見ても趣味の豊かな上等品で、どの織機にも四人乃至五人の従業員が働いてゐる。大抵は六歳から十二歳位までの少

年だつた。さうして、これ等の少年工の背面にはそれぞれ、五彩とりどりの毛絲を捲いた絲卷がぶら下つてゐた。

織長が彩色した圖柄を持つて織機の間を歩き廻りつゝ指導と注意を與へてゐる。オレンジが三、緑が四、黒一つ、褐色六……といつた風に何か歌のやうな調子で殆んど間斷なしに唱ふのである。まるで牧師かなにかの歌ふのを聞くやうな空氣だつた。

單調平板な織長の歌の文句が消えると直ぐに、明るい少年たちの返辭が、やはり歌ふやうな調子で起る。ちやうど合唱のお稽固のやうだ。オレンジが三、緑が四、黒一つ、褐色六……。さうして、その合唱と同時に、素早く、少年たちの指が活潑に働いて、編目編目にいろ／＼の色の絲を結んで行く。

かういふ風な具合に、少年工たちは朝早くから晩おそくまで、毛氈生産の機織工場に歌ひつゞけるのである。

織り上つた毛氈は掌ですうつと撫でて見るのだがこれがまたなんとも特殊な技巧なのである。掌の感じで、平坦でない個所が感別されると、其の部分だけにちよつと彎曲した剪刀がかけられる。さていよいよ出来ると今度は洗ひすゝぎする段取になるのだが、この洗ひすゝぎの方法は、輸出先きによつてそれぞれ異つた處置があるのである。

ペルシャ毛氈を理解するには、何よりも先づ、バンデルアバスを通つて行く駱駝隊商のあること

を知らねばなるまい。近頃では、時々自動車によつてバアムやヂュスタブ通過で輸送されることもあるが、此の方法はまだなんと云つてもごく稀なのである。つい昨日なども、現に毛氈を積んだ大規模な駱駝隊商がペルシヤ灣へ向けて出發してゐる。此の間の旅程日數は、實に三十五日を要するのだ。

最初私は、ケルマン滯留は、精々二三日以内の豫定であつたのだが、いよいよ此處に来て見るといろいろの方面の友達や知合が日を追うて殖えてきた。今此處でお茶の會に呼ばれたと思ふと晩には別の會食に招かれたり、今日は或る家に招かれると、明日はまた別の家の庭園を拜見する、といふ状態である。辭退すればいゝと云ふかも知れぬが、實際問題として、親切な温かいペルシヤ獨得の客を喜ぶ習俗を、無視することは困難だつた。

前に云つたケルマンの新總督、ミルツァ・ヴレイマン侯が、市民代表や貴顯紳士の大勢を招待して、有名なマフンの園内に朝餐の會を催ふしたときもさうである。侯は、我々獨逸人をもその宴席に招いで、心からの友誼を示してくれた。

マフンは著名な巡禮地で、ケルマンからだとざつと四十キロ米もあり、その道がまた、バアム街道なのだがなか／＼の悪路だつた。沙漠の曠野の丘陵はケルマンの都門を出るとすぐ蜿蜒と續いてをり、幾度となくその間を縫はねばならないのである。たうとう我々の自動車は水道の濠中に乗り入れてしまひ、附近の農民たちの大骨折りで救ひ出されるといふ始末だつた。こんなことで、マフ

ンに着いたのは約束の時間より一時間も遅れてしまつたのである。

飾り氣のない總督、親切に、といふよりも少し狼狽氣味な謙遜の態度で、我々を迎へてくれたマフンの園は、當時のペルシヤ國情から見て確かに一驚に値する景觀だつた。段丘の上に構へられた此の庭園は、巨大な笠松や、立木の古木などで縁どられ、その背景を成すものは雪を浴びた連山の峰々である。——見るからに、北イタリアを偲ばせる風趣だ。溪流が、丘から丘へと小さな瀧つ瀬を成して落ち、しかも形の異つた泉地のそれぞれには噴水が快よい音楽を奏でてゐた、——まことにこれは、イランには珍らしい、驚ろくべき風趣と云はなければならぬ。招待された客は、誰も彼も恍惚と酔つたやうな顔をしてゐた。

朝餐の卓は既に開かれてゐる。やはりペルシヤ風に、卓布の代りに毛氈が敷いてあつた。酸味のかつた牛乳、牛酪、ピロウ(ペルシヤ獨得の料理で、小羊の肉を混ぜた米飯である。)米飯、パン等數々の御馳走が並んでゐる。客たちは、大きな皿から兩手を使つて好みの料理を取り、楽しさうにそれを捏ねまぜた後に頬ばるのである。黒い頭巾を捲いた回教の高僧がゐるかと思へば、その隣りには同じ派の教會説教僧が、歐羅巴風とペルシヤ風の奇妙な取合せ姿で口を動かしてゐた。靴下止のついた靴下、太い縞のあるズボン、歐羅巴風の短衣に緑色の頭巾——と、ざつとこんな扮装だが、と云つて何も私は、かやうな奇妙な服飾が高貴な紳士の品位に、些かの破綻を來たしたなどは云ひたくないのである。私の席のすぐ横にはベルチスタンの指導者が居合せたが、油斷のならない眼つき

で、親しさうに、かやうな觀察をしてゐる私自身を觀察してゐた。そして、私にその氣さへあれば全ベルチスタンを案内してもいゝなどと持ちかけるのだつた。

會食がすんで、客たちは段丘の上を心ゆくばかり散歩した。たしかに此の莊麗な庭園は、幾つかの瀧と噴水のあるお蔭で、文字どほり天國に遊ぶ思ひを興へる。さうして一步塙の外へ出れば、あの荒涼とした沙漠の曠野が涯しもなく擴がつてゐるのだ。

マフンの村は深い溪谷の下に在る。有名な回教寺院の尖塔や圓蓋などが、樹々の濃緑の梢の間からつき立つてゐる。この寺は幾萬とも數しれぬ巡禮者たちの目標なのである。其處には、ネマトラア・ヴァリ王の墓がまつてゐる。聖地の管理はいふまでもなく回教の僧侶だ。

寺院と僧庵（修道院の如きもの）の混血兒のやうな非常に廣大な建物がある。前庭、車寄せ、散歩道、沈黙の泉池、——さうしてそれ等の一切を取かこむものは梢の高い『生命の木』（柏の一種で「このでかしは」と云ふ）である。またしても北イタリアを漫ろに偲ばせるものがある。寺院の陶瓦で組まれた素晴らしい通用門の前に廣大な前庭があり、回教僧たちの房の幾つかが並んでゐる。ケルマンで聞いた話によると、此のマフン僧庵に棲む回教僧の數は三百を降らないさうだが、これはちと大袈裟な話らしい。私の行つた時は僅かに八人で、見るからに禁欲の苦行をつんだ老僧ばかりだつた。一人の僧が己れの壁龕の中に端坐して祈念してゐるかと思ふと、その隣りの房ではのんびりと喫煙してゐる者もゐた。別の廣間からは、教育を受けてゐる少年達の明るい聲々が洩れて來る。

修道院の院長に面會を求めると、院長は恐縮するほど慇懃な態度で私を迎へ、おまけにいろ／＼な花をくれた。それから寺院内のあらゆる堂を案内してくれた上、ネマトラア・ヴァリ王の墓のある廟まで見せてくれた。まるで喫茶店の給仕人のやうな奉仕である。

これ以上、例へば陶瓦で組んだ壁面を飾つてゐる毛氈の美しさなどを語るのは止めよう。だが、マフンの回教寺院は、どの部面から見ても私がイランで見物した莊麗な建築物中の一つであることに間違ひはなかつた。

隊商と共にペルシヤ灣へ

前に述べたとほりケルマンからは自動車道路が一本、バアムを通つてヂュスタブへ走つてゐる。ヂュスタブは英領ベルチスタン鐵道の連絡驛である。此の道路は所謂デシユチルウトの南縁を横斷して全長約三百キロ米、自動車でも一日乃至二日はかゝる坦々とした曠野だ。まだ多少の難路はあるが、數年前まで全イランきつての最も困難な隊商路の一つと云はれたデシユチルウトによるバアム——ベルチスタン間の通路に較べれば問題でない。灼熱のデシユチルウトには殆んど飲める水は何處にもなかつたから、此の荒野を通行する旅行者は滅多になかつたのである。ところが今日では、ケルマン銀行の總裁の如きは、賜暇を得るごとにバアムからヂュスタブへ走る此の自動車

路を利用して、インドへ或ひは歐羅巴へ休養に行く。だが、勿論郵便物は従前どほり、ヂュスタブからはバームまで駱駝で運ばれるのである。駱駝と云つてもこれは騎乗駱駝で、馬なぞよりは遙かに駿足で一日平均九十キロ米位は容易に突破するといふ。

ところで、私自身にとつては此のバームからヂュスタブへ行く自動車路の必要がなかつた。私の今日の目標はペルシャ灣なのである。私はバンデルアバスへの通路を取つた。イランの南東部一帯はまだ自動車旅行に適してゐない。此の状態は、山越しの交通路が建設されなかり、まだまだ當分は續くことであらう。で私は最も近い路を選んだ、山越しに直接南方へ難路を突破するのである。自動車は今云つたとほり駄目だから、さし當り驢馬と騾馬とがたのみの綱である。

大急ぎで急持への隊商が編成された。ケルマンの友人たちはみな、ペルシャ灣の酷暑を心配して私の計畫を延期させようと勸告してくれた。

ペルシャの各都市の市場街には、一種の隊商用の取引所類似の機關がある。例へば、駱駝でも驢馬でも騾馬でも賃借が出来るので、粘り強く頑張れば必らず希望通りの契約を結び得る。隊商一編成の賃借料金は、運搬する貨物の總重量を參酌して計算される。例へば駱駝の積載量を四百乃至五百ポンドとすれば、驢馬の場合は二百乃至三百ポンド、騾馬ならその中間で計算される。従つて隊商一編成の賃借料も、それ等の動物の数の多少によつていろいろと高低を生ずるわけだ。

さて、市場内で、某獨逸人がバンデルアバス行きの隊商を探してゐる、といふ噂が立つと直きに

私のもとへ賣込み候補者が續々と現はれた。私はおちついて最上のものを選択すればよいのである。必要な條件は運搬用の驢馬十二頭にその半數の騎乗用動物である。或るインド人の周旋屋が逞ましい牡牛のやうに強靱な騾馬を推薦した。明日か遅くとも明後日中には間に合はせ得るだらうといふのである。だが此の話には乗らなかつた。ペルシャ人の周旋屋が持込んだのは二十頭の驢馬だつたが、料金が途方もなく高い。二百トオマンといふからざつと八百マルク以上である。私は百二十トオマンまで奮發しようと思つたが、相手は百五十トオマン以下には斷じて引かなかつた。従つて此の話もおぢやんになつた。もつとも翌日になつてから、もう一度やつて来て、私の希望通り百二十トオマンで妥協を申込んだものではあるが、氣の毒なこととその朝すでに、農民の二三人連帯で二十頭の驢馬を借り入れることに決つてゐた。賃借料はきつぱり百トオマンの約束で、その代り此の隊商式の旅程が満足に運んだら十トオマンの酒代を與へる條件だつた。

契約書は嚴肅に且つ細目に亘つて作成され賃借双方の署名といふ段になると、農民たちはいづれも文字が書けなかつたので、拇印を捺して署名に替へた。

それからまだ二三の押問答があつて、驢馬は契約どほりの日に、時間も正確に私の宿舎に現はれた。荷物が荷造りされ、隊商の一行だけは先づ先發することになつた。私は、ケナチイルの電信局附近で待つてゐるやうに申し渡しておいた。これはナガルの隊商宿の近所に在るので、つまり其處までは私は自動車で行く豫定だつたのである。

まだ一二、出發の前のお別れの訪問を終り、いよいよケルマンを後にしたのはもう正午近い頃だつた。イランには自動車クラブといふやうな機關は一つもないから、道路の標識なぞまるでない。そのためざつと一時間もぐる／＼廻りをした揚句に、やうやくケルマン市街の迷路をぬけて正しい出發路を探しだすことが出来たのである。

直きに砂丘が走り、燃えるやうな熱風に煽られるに及んで、この道に相違ないといふ確信が一層強められた。農場らしい建物が一つ、石灰石の白さに光る蜜蜂の巢の幾列、それが、熱い地熱に煽られてまるで泡のやうに、沙漠の中で煮えたぎつてゐる。シャリの隊商驛だ。先發した驢馬隊の一行は昨夜此處で休息したのである。彼等が道を迷はなかつたことを知つて、私は一層安心した。

沙漠を迷ひぬいた疲れきつたフォオド（自動車の型の名）が一臺、隊商宿の前でくたくたに伸びてゐる。モハメッド・アジャの顔が嬉しさに輝やきだした。いよいよ明日の早朝で彼の任務も終りなのである。車と一緒にケルマンへ歸れるのである。驢馬が二頭、車の音に怕えたか、ぐる／＼と輪を描いて暴れ廻つた。若い亂暴な方が、一方の臀部へ噛みついてなかく放さない。棍棒で毆つて辛くも彼の正氣を取戻さした。

シャリの隊商驛を出ると、道は最初のうち河原の石塊道である。砂洲の盛上つた泥土の中に柳の若木が何本か茂つてゐた。此處から丘陵を登つて約二時間ばかり進んだ後、もう一步も動けなくなつた——道を間違へたことが分つた。小さな子供を見かけて道を訊ねようとする、その子供はい

きなり逃げだした。モハメット・アジャが透かさず降りて少年を捕へた。そしてアジャの坐席のベンチン箱の上に推し据ゑられた。私が一克蘭の銀貨を興へると幾らかほつとしたやうだつた——恐らく一克蘭といふ錢は、少年が一生の中に持ち得る一番大きな額に違ひない。

此の小さな道案内は頗る心もとなかつた。ナガルへの路なんぞわけないさと無雜作に云つたまではよかつたが、さて、段々と車が遠く走り出すにつれて、少年の不安が膨らんで來たのである。たうとう、小さな水車小屋の下働きらしい男に行き當り、正しい道を訊くことが出来た。狐色の髭をはやした老人である。我々は淺瀬を渡つて此の河を越さなければいけないのだつた。しかもその渡河點は地理不案内の者にはてんで分らないものだつた。水車小屋の老僕のお蔭で無事に河を渡ることが出来た。モハメット・アジャは、此の老人の背におんぶして渡つた。

赤髭の老人はひどく興奮した容子で、喋り笑つた。こんな場所に一人ぼつちであると、人間を見る機會なぞ滅多にないのであらう。もう一度道を迷ふかも知れないと頻りに心配顔をした。もう一つ岐れ路があるといふのである——それよりもむしろ我々と別れるのを少しでも伸ばしたい氣持からだつたか、とにかく、たうとう我々の車へ乗りこんでしまつた。自動車に乗るなぞといふことは生じて始めての經驗に違ひない。村の部落まで送り届けようかといふと否と首を横にふる。さうだ、此の老人は只だ自動車に乗つて見たいのである。どこまでも乗つて見たかつたのである。際限がないので、たうとう我々はなだめすかすやうにして半ば強引に彼を下車させた。おそらく、あ

の淋しい水車屋に歸つた頃はもう夜もよほど更けてゐたに違ひないと思ふ。

さて、東はもう何時間となく荒蕪とした草原の間を走つてゐる。アフリカ種らしい目のやさしい羚羊が一匹、眼の前を飛びぬけて煙のやうな砂塵の中に可愛い姿を消して行つた。思ひがけぬうちにナガル部落についてゐたのである。此の部落は盆地になつてゐたのだ。隊商宿で訊くと、先發の驢馬隊は今日の午後此處で一休みしてから次驛のケナチイルへ出發したといふ。我々は直ちに後を追つた。ナガルの盆地を後にするとはやくも、次ぎの驛の庭が、遠い山の裾に見え初めた。が、實際に其處へ到着したのは深い暮色に閉ざされた頃であつた。夕靄の中から、影が一つ此方へ走つて来る。驢馬隊と一緒に先發した私の從僕のモハメット・アリ少年だ。私の小犬のブルブルも吠えながら後れじと走つて来る。

その夜は、ケナチイル電信局の立派な庭で明した。激しい風が吹いて来るたびに、此の緑地の樹の梢が、頭の上で不思議な音楽を一晩中奏でるのだつた。

夜が明けて、朝の光の中で見る庭内は、昨夜星明りの下で見たあの童話風の趣を大分卑俗化してゐた。いよいよモハメット・アジャともその自動車ともお別れである。今日からはもう驢馬に乗つて行くのだ。此の動物は早くも私を背中に迎へて壁に沿つて歩き廻り、粘土壁の割れ目を出入しながら、他の驢馬たちが荷積みを始めてゐる隊商宿の庭の方へ私を連れて行つたりする。積荷をいく度も調べた後驢馬曳きたちが苦情を申立てた。どうしても荷が二個だけ多過ぎるといふのである。

私は、バフトへ行つたら足りない分だけ補給することを約束した。バフトは二日の行程に在る部落である。

ケナチイルの隊商宿は荒廢してゐて、住んでゐる部落民も貧しかつた。見窄らしい住家は蜜蜂の巢と同じ粘土小舎である。中には、夏季住宅風のが二三見えたが、これとても若干の枝と灌木で葺いた園亭に類するものだ。ポロを着た婦人たちは殆んど覆面を用ひず、鼻の附根や眉のあたりに墨を塗つて、まるで不格好な髭をぼつさりと鼻の上に生やしてゐるやうに見える。かういふ車の油のやうな墨は、珈琲の残滓を加工したもので、眼炎の豫防になるさうだが、それだけイラン國にはこの疾病が蔓延してゐるのである。子供たちは汚れきつた肌をむき出しにして殆んど裸體である。それでも、とにかくこれが母性愛といふのであらうか、醜い母親たちは、幼兒たちには灌木の潤葉を興へて胸から腹を掩はしめてゐるのだつた。

それから此の部落で目立つことは、黄ろい犬が陰性の眼玉をギョロつかせて其處ら中にうろろしてゐることだつた。然し、ベルシャ犬の通性に洩れずみんな臆病で、少年たちの足音一つで自由に支配されてゐる。羞しがり屋の小牛が一匹朝の散歩をやつてゐるのを見つけて、私の小犬はいゝ遊び相手とばかり大いに氣勢を揚げて見せたが、つひに徒勞に終つたやうだつた。

積荷の仕事はなか／＼捗らない。漸く毛布や寝具を、鞍の代りに縛りつけ、楽しい氣持で出發することが出来たのは、もうその朝の八時前後である。

出發後直きに、さつきの小犬がゐないのに気がついた。彼奴は明かに、新しくお友達になつた小牛に未練が出たに違ひない。私は、モハメット・アリ少年を走らせて犬を連れ戻しにやつた。アリは、驢馬を正しく扱ふ術を心得てゐる一行中の唯一人者である。アリなら怠け者の驢馬を早駆けさせることも出来れば、喉聲、舌齒音、齒音、等の音階發聲を上手に使ひこなせた。これはペルシャ驢馬を使役するには是非必要な技能なのである。アリはまた杖を使ふ術も會得してゐたが、この方はちつとばかり亂暴だつた。——だがこんなわけで、二十數頭の驢馬はみな、ケルマン出發の後三日には早くもアリ少年の聲を聞き分け、少年の明るい子供っぽい聲がするとすぐ、兩耳をとんがらして聴きもらすまいとするやうになつたのである。

路は連山の根にかゝり、うち續く支脈には、朝の日輪が緑色のブロンズの色調を滴るばかりにふり注いでゐる。自動車なら此の位の山は一時間で行きつけるのだが、驢馬の脚では數時間かゝる。その代り、ありとある沙漠地帯の灌木を、一つ一つ克明に觀察することが出来るといふと、くもあつた。昨日までは、一時間二十キロ乃至三十キロのスピードで飛ばすのだから、そんな餘裕はまるで與へられなかつたのである。

隊商組の先頭に立つ者は料理番のハヂ・カシム。彼は杖をうち振り、まつ黒なペルシャ帽をいただき、殊勝にもバンデルアバスまでの全長五百キロに及ぶ行程を徒歩で克服する決心である。驢馬嫌ひがさうさせたのに違ひないが、事實、彼が驢馬の背に跨がつたのは此の旅程中ほんの短かい

時間に過ぎなかつた。

續いて褐色の頭髮を頭巾で捲き、長袖の上衣をつけた驢馬曳きの男たちが、驢馬の縦列につき添つて、水に浮くやうな足どりで悠々と歩いてゐる。驢馬の背にまたがるなどといふことは、夢にも考へたことのない人たちであらう。殿りはバシイといふ隊商の指揮者だ。イラン國內の隊商路なら細大洩らさず諳んじてゐる老人である。どんな石一つでも、泉地でも沼地でも、彼の記憶を免がれるものはない。今日までにいつたい幾千キロの行程を、此の隊商路の上で往還りして來たことであらうか。日光と風雨に荒れはてた老人の面貌は、まつたく忍従と獻身奉仕の記念像を見るやうである。誰かゞ此の老人に向つて、お前の運命は永久にこれ等の路を彷徨することに在ると云つても老人は僅かに肩をすくめて見せる位のところであらう。

漸く嶺が近くなつてきた。雨雲が取りまき、風が冷たい。我々の迎る路は漆のやうにまつ黒に光る巨岩によつてたち割られた尾根の鞍部を走つてゐるのだ。山の逍遙に大きな満足を感じたか、例の小犬は、嬉々として吠え、はやくも、誰より先きに尻尾を濡らして引返してきた。岩の間に清水の噴き出してゐる穴を發見したのだ。驢馬たちは一齊にガブ／＼と渴をうるほし、モハメット・アリはさつそく水筒をいつばいにした。これはアリ少年の自慢の品なのである。

路は峻しい谷に迫つてゐる。谷にはまだ昨日の熱氣が充滿してゐた。此處には幾千とも知れぬ野生のヒヤシンスが咲き亂れ、谷全體をまるで童話の世界の春の庭のやうに見せてゐる。ヒヤシンス

の逞ましい灌木がそこにもこゝにも、六十センチ米もあらうかと思はれる美事な花の蠟燭を、つき立てゝゐるのだ。花の色はやゝ褪せた薔薇色と牛乳のやうに白いのとあつた。花柱の先端部はまだ開花せず、其處だけ銅のやうな赤い色に光つてゐる。此のほとんど谷間全體を埋めたヒヤシンスの密林の間から、時折り松露のやうな形状の薔薇色の花がぬき出てゐる。ちよつと秋冬の花に似てゐた。かと思ふと人間の身長ほどもある明るい緑色の茴香の叢林がそばだつてゐたり、高い崖の斜面にはとゞ松やひばに似た松柏科の植物が一面に掩ひかぶさつてゐたりする。これはまるで日本の矮生植物にそっくりだ。河床の乾上つた溪谷に生ひ茂つてゐるのは漆科の黄櫨である。ハヂ・カシムは此の黄櫨の葉をサラダでも食べるやうに愛好するが、ちよつとすかんぼに似た味のするものだけだ。

不意に叫聲が揚る。驢馬の蹄が、ジグザグな峡谷の岩に憂々と鳴つた。積荷が滑り落ちさうになる。我々も驢馬の背から降りて、手綱を曳いた。路は峻嶮な登りである。これがグドリツアルタの隘路だ。崖の高さはイギリスの地圖によると九千三百呎とある。

一步一步と登攀路は急峻になるが、その割合にこれといふ困難もない。最後に路は途方もなく廣大な混砂粘土の段丘に出た。まるでボオキサイトのやうな、赤銅色である。此處にも、矮生植物が生ひ茂り、とゞ松やひばがあり、ヒヤシンスの叢があつた。但し此處のヒヤシンスはまだ花柱を開いてゐない。土着民らしい少年の率ゐる驢馬隊商と出會した。遊牧民の生産した毛氈をケルマンへ輸

送する途中なのである。土着民の或る者が私にケリムを一つ買はぬかと申出たが、生憎とそれを見に行く時間がなかつた。(ケリムは動物か植物か、乃至は礦物か、いろいろ調べたが此の稿を終るまでには分明しなかつた)

急に、峡谷が急角度に曲つた。とたんに氷のやうな風がさつと吹きつける。私は冬のマントを襪の中から取出した。行方遙かに、天空を掩ふばかりに斜めに横はつてゐる巨大な鋸の齒のやうなのが、雪を浴びたヒッサアル連峰である。明日はあれを越えるのだ。足下を俯瞰すると、不細工な紺色の回教寺院風の圓蓋を備へた建物が見えた。セイド・アマット王が永眠の庭である。我々は此處で小休止を取つた。その間、驢馬どもは崖の斜面に解放して青草を食べさせた。

道が、山裾の續いてゐる丘の腹を一段昇るたびに、遙か向うの平らな盆地の崖に、小さく青い斑点が一つ見える。あれが、今日の我々の目標の、カライアスカアルの部落なのだつた。

何時間か経つと、青い斑点が漸次に肥大し、やがて黄昏と共にその部落へ辿り着いた。たつた今牧場から引揚げてきたらしい馬、牛、驢馬等が幾百頭とも知れず、流れが自然に掘つた可成り深く廣い水道へ水を飲みに導びかれて行く。指揮する者の中には、騎乗の少女も尠くなかつた。カライアスカアルの遊牧民たちは、つまり、もう南方の遊牧から引揚げて來たのだ。

燻ぶり返つた隊商宿の古い建物の上には、曲りくねつた桿の尖端に緑・白・赤のベルシャ三色旗

が、梨の如く風雨に曝された形骸を止め靡かせてゐる。旗は、此處の隊商驛には哨戒の憲兵があることを示すものだ。

憲兵たちは、我々を心から温かく收容してくれた。咄嗟の間に小さな部屋を二つ、綺麗に清掃した上、ひどく寒かつたので一抱への灌木の枝を爐へ押込んだりしてくれる。狭い部屋は忽ちにしてむせ返るばかりに煙でいつぱいに成つた。即席の炊事場が風を避けて壁龕の中に設けられる。隊商組の方も別に同じ設備を終つたと見え、火がパチ／＼と快よく燃えさかつてゐる。積荷はすべて庭内の一隅に重ねあげられ、解放された驢馬たちはほつとしたやうに庭内を歩き廻つてゐる。もう暗いので姿は見えないが、鼻息や荒い呼吸づかひで、それと察しられたのである。

此處の、今はもう廢屋にひとしい古い隊商宿も、やはりアパス王の造營になるものだつた。此の天才王は總計九百九十九個所に隊商驛を建設したばかりか、それ等の一々を、親しく視察して廻り經營を調査して廻つたといふから尋常一様の努力ではない。勿論、九百九十九といふ數字は誇張だが、尠くとも數百を以つて數へられる國內の隊商驛が、彼によつて建設されたことは確實だ。

これ等の驛々の隊商宿を目撃する度數が多ければ多いほど、その設備がよく考へられたものであり、工作も十分に念を入れたものであることが、只管嘆賞されるのである。建築の設計は數百年の體験から割出されたものに相違ないが、その構成は、例へば我々の現代の停車場の設計原理と全く等しいのだつた。

一隊の隊商が休息するには先づ大きな庭が必要である。そこには庭内安全の保障する二乃至三米の墻壁がめぐらされた。既に出入口の門の墻壁には、壁龕へまがんの設けられた場合さへ珍らしくない。此の壁龕は尖頭迫持式で、長さ四米、深さは一米半から二米に及ぶものもある。従つて此處では三人乃至四人の人間がらくに住へるし、のび／＼と眠ることも出来るのだつた。ところで、壁龕はおよそ一米ばかりも、地上より高いところに在るから、塵埃と濕氣と、また地上を這ひ廻る害蟲毒蛇の襲來を豫防することも可能と云へよう。旅人は壁龕の扉をぐるりと回轉して所持の荷物を床上に置けば、立所に我家に在る安堵あんぶの思ひを抱くのである。

短時間の休憩ならば、隊商たちはよく隊商宿の前庭で休息するが、そのための施設もよく整へられてゐた。

即ち、庭に面した墻壁の内側にも、同様な壁龕がぐるりと取りつけられて、その或るものは塔の形に構築されたばかりか、時にはまた強大廣範圍の厩舎の圓蓋にも通ずるやうに構築されたものもあつた。積載した貨物のためにも圓蓋が豊富に設けられたから、貨物の内容は、荒天や夏季の暑熱にもごく安全だつたのである。

稍や大規模な隊商驛では通用門の建方が特に念入だつた。門の圓蓋の左右に大きな壁龕があり、その背後が閉鎖できる廣い部屋になつてゐる。石の階段を登ると第一階で、これがまた幾つかの部屋部の大きな集團を成してをり、その最大の部屋などは大抵の場合門の上に在るのが多い。つまり此

の廣間は隊商に隨行する商人たちの休息所なのである。

カライアスカアルの隊商驛は、從來見てきたどれよりも強固に建てられてゐた。牆壁などもたつぷり一米の厚さだつた。其處には閉されたまゝの部屋が二、三あり、その設備などにも、高地の地勢と氣候風土とを參酌した痕が明かに見られるのである。たゞ残念なことに、アバス王の遺業である他の隊商宿の大部分と同様、これもまた頽廢の現状を免がれないのだつた。圓蓋の或るものは既に崩壊し、牆壁は碎け落ち、土臺石はそちこちぐらついてゐた。今のうちにイラン政府が修繕方法を考へないと、今後十年位のうちに此の美しい大規模な、アバス王の遺業も空しく殘壁頽礎と化し終るに違ひない。現在すでに、その多數のものもはや利用し得ないまでに頽廢してゐるのである。隊商たちは、碎け裂けた牆壁を辛くも風よけとして野宿してゐる現状だつた。

ハヂ・カシムが占領した壁龕は、通用門の傍に在り、云はゞカライアスカアル隊商驛全體の中心を成す位置に當つてゐる。風よけラムプの下に胡坐してゐるハヂは、湯沸しのたぎる横に、例の如くペルシャ帽をいたゞいてゐる。この湯沸しから發散する暖氣が彼の心持を陽氣にしてゐるのだ。その傍では隊商のバシと兵隊が二人うづくまつてゐる。みんなまつ黒な顔をしてゐるので、誰だか見分けがつかない。小さな棒砂糖を、料理用の包刀で割つてふるまつてゐるのがモハメット・アリだ。アリには私が、ケルマンで新しいシャツを一枚買つて與へたばかりだが、それももう汚れきつてゐる。此の少年は、誰も見てゐないと思ふとコップでも茶碗でもシャツで拭くのである。それに

此度の道中でも彼はいつも着衣のまゝでゴロ寝してきた。尤もこれは彼だけでなく運轉手も、その他の従僕たちも、モハメット・アジャまでも同じだつた。アジャの如きは、眠くなると場所をかまはずいきなり上衣を被る癖があつた。

少年アリの眸は、ハヂや憲兵たちの話に活々と輝やいてゐる。少年の肩にはいつも細い紐がかけられ、その末端に小箱がぶら下つてゐる。時計でもはひつてゐさうだが實はさにあらず、聖地の土が握り納まつてゐるのだ。少年は祈念を捧げるたびにこれを戴いて額へこすりつけるのである。勿論私は、その現場を見たわけぢやないが、恐らく人目をさけてやつてゐるのであらう。アリは、心のやさしいそして内氣な少年なのである。

カライアスカアルはざつと二千六百米の高地にある。冬になると、大雪の降ることが珍らしくなく、時には、此の隊商宿にとち込められたまゝ、部落へ一步も出られない場合さへあるさうだ。寒氣も凜烈で、山の隘路で吹雪と寒氣に襲はれた澤山の隊商たちが、此處まで達し得ずに凍死して果てた話もいろいろ傳へられてゐる。冬季は、路といふ路が不通になるのだ。——と、憲兵たちはこんな話をしてきかせる。勿論、山中には狼、熊、豹なども棲んでゐた。此の山中の隊商驛は、冬になると數週間も數ヶ月間も、外部との凡ゆる連絡を斷たれる場合があるのだ。おまけに、そんな時に限つて部落の方でも、僅か數名の老人と女たちばかりしかゐない。健康で元氣な青壯年の悉くは或ひは馬に跨がり、或ひは驢馬や家畜を牽いて、南へ南へと放牧の旅に出てゐるのである。

こんな話をしてゐる彼等の聲は、その晩おそくまで私の枕にひびいてゐた。饒舌の好きなベルシヤ人とつて、かういふ一時こそ半生を賭けても悔いなき生き甲斐を感じるものであらう。世にも稀れた仕合せな國民である。

黎明のまだうす暗いうちは寒気が骨身にこたへる。隊商たちの焚火の傍で両手をかざすのが何よりの楽しみだ。ベルシヤでは何處でも簡単に火を焚けるといふ幸福がある。ほんの十歩も門を出れば、一把への灌木の枯枝を集められる。これが實によく燃えるのだ。

人馬の食事、荷積み、それからまたお茶で一しきり雑談がはずむ。五時頃に起きて出發は八時前後、我々は親切な宿主や憲兵諸君にさよならを云つて一夜の宿を後にする。

日中は、日光も空気も素晴らしい。たつた一枚、青い空に雲が浮いてゐる。まるで一片の強い白旗のやうに、高い嶺の上にはりついてゐる。あれが今日横断する豫定のヒッサアル連峰だ。さして遠くでもないのに、山には深い雪が積つてゐる。途方もなく壯大な雪田だ。それが蜿蜒數哩にわたつて巨人の家の屋根を斜めにした如く、日光の下にさんらんと輝やいてゐるのだ。

驢馬は、貧弱な山中の寒村の畑に沿うて我々と共に進む。此の邊の植物の發育はまだ遅れてゐる。白楊はやつと芽をふき始めたばかりだし、林檎もまだ花盛りである。道は、泡だち流れる溪流に沿つてしばらく行く。溪流の水は清冽でうまい。日光の魔術をうけた雪の化身である。

遙かに遠い山腹をこつちへ向いて降つて來る駱駝隊商の一行が見える。随分遠方なのだが、肉眼

でもはつきりと識別出来るのだ。全體で五縦列、一縦列が約十頭内外の駱駝である。脚から下の動きが見えないため、まるで隊商全體が機械仕掛けの玩具のやうに、山腹に沿うて迂廻して來るやうである。惜しいことに、この活畫の主人公は不意に道を曲つたと見えて、次第に小さくなりやがて金色さんさんたる山頂の間に消えてしまつた。

道は、溪流のどよめきの中をまっすぐに峠路へかゝる。幾度か渦まき返す淺瀬も渡つた。小さな瀧の落ちる水面の下に、駱駝の骸骨が一つまづ白に洗はれて轉がつてゐた。貧弱な灌木地帯も抜けて今度は裸岩の間に行くのである。ヒッサアル牝牛山の方から氷のやうな風がさつと吹きつける。私は復たぞろ冬のマントを取り出す必要があつた。行方を塞いでゐる鋸齒状の岩角にぶつかつた。躊躇する要はない、これを取り越える以外に途はないのだ。驢馬は勇敢によぢ登つて行く。たうとう、尖つた山頂に續いてゐるジグザグの隘路を克服した。いよいよ山の上である。

これが、標高三千米の峠路だつた。

積荷を負うた驢馬たちは、手綱と、杖と、激勵の掛聲とによつて奮ひ起つた。積荷の重みは、隘路に出張つてゐる岩角で巧みに支持され、驢馬の苦勞を緩和した。かうして、積荷の驢馬たちも見事に此の隘路を克服したのである。評判ほどの難所ではなかつた。

岩の破片、轉石、板石等々の峻険な峠路を踏み越えると、道はやゝ波形を描いて起伏する高原に連じてゐる。

此の高原の縁に、ごく小型の原始的な回教寺院が一つ立つてゐた。通行者は此處で、神助天佑を祈願するのだ。例へば、家畜や貨物やまた人間も、無事に峠を越えられますやうにとか、駱駝が足を折りませぬやうにとか、さてはまた、隊商が峠を通過した後で暴れだせと雨雲にお命じ下さい、などと、甚だ蟲のいい祈願を捧げるのである。これは峠を降る場合だが、峠を登り終へた際にも、その幸運を神に感謝していゝわけだ。ところが、私の驢馬の貸主である農民たちは、平素の敬虔な信者に似合はず、平氣な顔でその小さな寺院の前を素通りして行つた。老人のバシだけが一人、ちよつと足を止めただけである。バシの持馬は僅かに三頭でおまけに一番の老驢馬を内密に此の隊商へ参加させたのだが、それでもとにかく、この老馬三頭が云はゞバシ老人の全財産であることには間違ひなかつた。

寺院の前に二人の牧人らしい老人がぬかづいてゐる。これが、ハヂに此の峠の嶮路の恐ろしさを話してきかせた、冬になつて全山が雪をかぶる頃には、豹がまるで百二百と大群を成して現はれ、今日までにもう澤山の人が食ひ殺されたといふのである。

私には、百頭の豹群などといふ話は信じられないが、六頭でも、いや三頭でも二頭でも、あの虎のやうな歯とナイフのやうに鋭利な爪をもつた奴に襲はれたら、危険千萬なことは請合ひだ。隊商の此の襲撃に對する防禦武器と云つたら、石のつぶてか太い棍棒しかないのである。

さて、こんな悪評あまねき豹の出沒地帯のまつ只中で、何んと若い仔羊の一群が三人のこれも可

愛いゝ子供に連れられてゐる甚だ牧歌的の風景に出會はした。さつそく、ハヂが仔羊を一頭買ひ取る交渉を始めた。我々の食事を賑はさうといふ算段である。最前の老牧人は言下に六クランと應じた。ハヂの云ひ値は四クランである。妥協の餘地はなかつた。ハヂはそれにも懲りず、新しい羊群を見かけるとすぐ交渉を始めるのだつた。相變らず黒いペルシャ帽をかぶり、杖を振りながら先頭に立つてゐるのである。いまだに驢馬に乗ることを承諾しない。だから料理番専用の驢馬ばかりは桶や罐かまなどの調理道具を入れた雜囊ひとつを着けただけで至つて身輕だ。

そのハヂの顔が失望で暗くなつてきた。仔羊一頭の賣値は、新しい羊群に出會ふごとにだん／＼高くなるのである。

道幅が次第に廣くなり、どこもかしこも駱駝どもの蹠あしうちで磨かれ、踏み固められて、銅貨大の隙さへない。これは最近數週間に通過した隊商の足跡なのである。いやひよつとしたら數ヶ月間のものかも知れない。まるで、目前に數千數萬の駱駝群の行進を見るやうな氣がする。私は坐るに、音もなく重い貨物を負うた彼等の亡靈の大群が行進して行く光景を眼に描いた。行けども行けども絶えることのない之等の蹠の一つ一つが、やがて、何人なんびとからも顧みられずに終るあの動物の勤勞と勞苦との尊い實蹟なのである。

我々が小さな隊商驛で小憩してゐる間も、貨物驢馬の方の組は休みなく歩き續けた。此の小驛には地下の厩舎があり、おまけに必要とあれば野營する位の小さな部屋が二つ、同じ地下に設けられ

であつた。荒天の際など、隊商たちにとつて屈強の待避所である。事實、その中に馬糞その他がコ
チコチの蒲團のやうに堆かく固まつてゐるのは、此の山中の小驛が屢々利用されてゐる何よりの證
跡だつた。さうしてクライアスカアルバト間のこれが唯一の隊商宿なのである。その距離はさ
つと四十乃至五十キロ米もあるのだ。

風は冷たいが、壁龕の風よけの中はむしろ暑い。小驛の背面を掩ふ崖は一面のチューリップのお花
畑で、今がその花盛りである。再び鞍上の人となり同行の隊商組の一人一人を呼び起して進んだ。
彼等はいつの間にか道端の岩蔭に眠り込んでゐたのである。初めそれを見つけた時、行什れ人では
ないかとはつとした。呼び起さずに行き過ぎてゐたら、彼等は翌朝まで眠り續けたかも知れない。
そんなにも疲れきつてゐるのだつた。

道は崖の大穴に落ち込んでゐるので、またぞろ素晴らしい溪流を渡渉する必要があつた。相當長
い時間だつた。

何處ともなく鈍い鈴の音が聞えてきた。やがて六十頭の駱駝隊商の一團が、長い行列で目前に現
はれた。これはバンデルアバスからケルマンへの貨物輸送團である。然しどれもこれも意地悪さう
で口小言ばかり云ふので、我々は觸らぬ神に祟りなしと黙つて通過するのを待つた。續いて五分
もたつたと思ふ頃、今度は驢馬の隊商に出會はした。これがとんだ機會になり、我々の驢馬の行進
列は滅茶苦茶に攪亂されたのである。一番手古摺つたのは身軽な我々の騎乗してゐる驢馬だつた。

自由に駈け廻れるものだから、相手の四十頭の驢馬の一々に、初對面の挨拶か鼻面を寄せてゆくのである。まるで戀人にでも出會つたやうに夢中になつて、鞭の一撃ぐらゐではびくとも動かないのだつた。

此の隊商は獸皮製のまる／＼とした雜囊を積んでゐる。内容は、棗椰子の實だ。ギルフト縣から
エスドへ運搬するのである。料理番のハヂがさつそく半囊だけ買ひ込んだ。棗椰子とは御馳走であ
る。値段は一キロ瓦が約二十ペンニヒ（日本貨に換算すると約十錢弱）一般にこの棗椰子の實は土足で
踏みくだくもので、若い男や少年たちに命じて素足でその上を踊らせるなどの習俗もある。勿論、
時には特に清潔を必要とするなら、果實の上に浴用敷布などを置いて踏みくだく場合もある。

さて、此の棗椰子の實を積んだ驢馬隊商の一行と別れるとすぐ、またも別の駱駝隊商が視野の中
に現はれてきた。が、今度のは輸送團の隊商ではない、遊牧民の一團だつた。暖かい地方から歸つ
てきた遊牧民だつた。

駱駝は大部分まだ子供で、生後數ヶ月位のが多く、積荷もごく少量である。駱駝の背に積んだそ
れ等の包装の上高く、子供たちが乗つてゐる。赤ん坊は袋に入れて結びつけてあり、可愛い頭だ
けがびよこりと覗いてゐる。女たちは、大部分ぼろを着けて醜く、半裸體の恰好だが、額には何れ
も銀貨を飾りにつけ、牡牛や牝牛の背に乗つて悠々と絲紡ぎなどをやつてゐる。續いて積荷を負つ

た駱駝、牡牛、驢馬が陸續と来る。煮炊きの釜や雑多な家具や、紡績用の絲卷、織機を積んだのもあれば冬の間の勤勞の賜物なる實に美事な毛氈の卷束を負うてゐるものもあつた。中には天幕、柱、繩などを負うた駱駝もゐる。天幕は黒い布で、これはどぎつい夏の陽光を緩和するためだが、布目の粗いのは、通風をよくくるためである。またぞろ、我々の驢馬と、遊牧民の驢馬との間に、長々とした挨拶が始まる。女たちが頻りに叱つたり呶鳴つたりしてゐる。

やがて、此の一團の曾祖父を乗せた牝牛が現れた。曾祖父の腕の中には彦孫が抱かれてゐる。續いて少年たちに監視されながら羊や山羊がぞろ／＼と来る。此の小さな牧人たちは大ていは裸身である。それが通り過ぎると、今度は頭でつかちの仔羊、拳ほどの硝子玉のやうな眼をギョロつかせ長い蜘蛛脚をチヨコチヨコと動かす仔駱駝などの縦列だ。仔駱駝は、長い四脚を利用して時々、嬉しさに跳ね上つたりする。

此の遊牧民の一團は、だらしない縦列のまゝで別にいそぐでもなく、のろ／＼と足をひきずつて行くのだ。

その間に、髭をはやした壯漢が一人、八方へ眼をくばりながら、片手に鞭を持つて歩いてゐる。ヨハネスの悪魔のやうに、野蠻だが美しい容姿だつた。

長い縦列の最後を飾るものは、四人の若い遊牧民の美人組である。ゆつたりとした明るい色のジヤドオル(着衣の名)を肌にまき、その布のところ／＼は既に裂けたり道路の埃で汚れたりしてゐる

が、娘たちは何れも、上機嫌でまるで散歩でもしてゐるやうに陽氣だ。バンドルアバスから来たとする、ざつと五百キロ米の長い距離を、まるで散歩でもするやうに歩いてゐるのである。勿論、長い旅の疲れで少しは汚れてゐるが、とにかく清新で潑刺としてゐる。四人の中の一人の如きは、輪廓の正しい、ちよつとギリシャの婦人を思はせるやうな端麗な顔だちだつた。かういふ彼女たちもやはり、鼻のつけ根と睫の邊には例の悪病除けの珈琲の煮汁を黒々と塗つてゐるのである。装身具にはやはり、銀貨をつないだ鎖が、額や手首に捲きつけてあつた。

娘たちは年ごとに、此のケルマンバンドルアバス間の氣輕な散歩を往復ともに繰返すのであらう。やがて黃道吉日を選んで、頭に彦孫を抱いて牝牛に安坐した曾祖父は、娘たちを嫁入らせるであらうし、さうなると今度は彼女たち自身が牝牛の背に乗つて同じ道を往還するうち、次第に今日の若さと美しさを失なつて前の母たちの如く醜く老いて行くことであらう。――

緑の牧場が見え始めて溪流の奏樂がまた賑かになつた。まつ黒な天幕がそちこちに點在する。たつた今、天幕を打ち開いた所もある。羊の小數群が溪流へ連れ出されてゐる。犬が二三匹、我々の驢馬に吠えかゝつた。駱駝が何頭となく丘の斜面で草をはんでゐる。昨年の中を此の溪谷で過した遊牧民たちが、たつた今歸つて來たのである。

ペルシャの遊牧人種を例へば牧地から牧地へと涯しない放浪の歡樂を追ふチゴイネル(ジアシイ)

の一種と考へたら間違ひだ。分り易く云へば、ペルシヤ遊牧民は夏期と冬期とのそれぞれの特殊な牧地を兼有する牧人にほかならないのである。此のあたりの山地には、夏の間は甘い清水と素晴らしい雑草が潤澤に在る代り、冬期にはひると、家畜の群れを満足させるだけの枯草がない。これと反対に熱い國と呼ばれる南や東の地方では、冬期には草が芽を出して生ひ茂る代り、夏期に近づくとみな草が枯死してしまふ。だから夏には北を、冬には南また東をと恰度時計の振子のやうに、季節と共に彼等遊牧民は同じ道を往きつ戻りつするのである。彼等の住居は、永久にまつ黒な天幕の中だつた。彼等が往還を重ねる南と北の牧地は、尠くとも五百キロ米から千キロ米位までも相距つてゐるのである。

ケルマン縣の住民は小柄であり器量が上らないけれど、西部ペルシヤの山中イラク邊の遊牧民は強力精悍なのが多い。毛氈で有名なカシュカイ部落の如きよい一例である。彼等は冬期にはシラの南方に住むが夏になると遙々イスファハン南方の山地に移り住む。續いて之に劣らぬ勇敢なのがバクチアル部落民で、彼等の故郷はイスファハンの西方及び南西方の山中に在るが、冬期はアラビスタン(メソポタミヤの國境に近い)からペルシヤ灣の方まで降つて行く。此の種族の首長の故郷の邸宅は、山中だが立派なものだ。時には息子たちをパリやロンドンに留學させることも珍らしくないといふ。

バフトは何處か。我々は行けども行けども見當らぬ目標地を探ねあぐんだ。私は幾度地圖を調べて見たかわからない。だが、何處をどう探しても影も形も見當らないのである。遊牧民たちから興へられた報告には、區々で一致しない點があつた。私の元氣な白犬も、流石にもう氣力がつき果てたらしい。止むを得ず鞍へ結びつけて引張つてやる。驢馬の方は甚だ簡単に、疲れたとなると背の荷物ともくペタリと大地へ坐り込んでしまふ。一頭の如きは全く足が動かなくなつたので、積荷を全部取外し、これを比較的疲勞の程度の輕さうな驢馬の背へ配分した。とにかく、我々騎乗組にしてももう十時間はたつぷり鞍上にゐるのである。

四圍の風景は素晴しかつた。杜松の茂つた山腹を一陣の風が吹きまくつてまつ青な大浪を立てゝゐる。その間にこれは見事な天然の石の庭が、今、満開の花盛りだ。ヒヤシンス、チューリップ、その他雑草や灌木の花、花、花。再び我々は河を渡り淺瀬を越えた。

やゝ暫らくせゝらぎの音も賑やかな流れに沿つて進むうちに、ふと私は氣づいたことがある。さうだ、バフトの町は此の流れに沿うてゐるに相違ない。崖の斜面に駱駝が澤山、草をはんでゐた。仔をつれた母駱駝も交つてゐる。それ等の容子が、みな一樣に營養もよく、まるで樽のやうにふくれた腹をしてゐたのである。

綠色の片岩層のまるで夢の世界のやうな風光にうつとりしながら、急湍の中を思ひきつて涉らねばならなかつた。疲勞しきつた驢馬たちは嫌がつたが、とにかく彼岸へ渡ることが是非必要であつ

たのである。小石のつぶてが、逡巡する驢馬たちの耳をヒョウ／＼と掠めてとぶ。私の愛犬も悲鳴をあげて絶望の聲を洩らしたが、たうとうそれでも思ひきつて水中にとび込むのだつた。そして、彼の仔犬としての生活にこれが最初の水泳を勇敢にやりとげたのである。

だが、私の希望は裏ざられた。河はバフトへ通じてはゐなかつた。細い坂道が一本、河岸を後に石鹼のやうに青くまたさんごの如く赤い山々の方へ、うねうねと走つてゐる。暗鬱な雲のちぎれが我々の頭上近く舞ひ下つてきて、雲が落ち始めた。我々の隊商組みはバラバラに四散し、驢馬たちはみな、順々に地上へ匍伏する。

我々騎乗組は、勇を奮つて新たな峻嶮な岩角によぢ登つた——やうやくのことで、バフトの所在が分つた。目前に展けた細長い緑色の長方形のまん中に、待望の町はあつたのである。

ハヂ・カシムが再び先頭に立つた。そして町へ着くとすぐ、隊商宿の一つに宿舎を求め、我々がおくれて到着した時分には、まるでその隊商宿の一廓から火事でも起つたやうな光景だつた。實際はこれが、部屋を掃除した塵埃だつたのである。

私たちが驢馬から降りたときの氣持と云つたら、まつたくのところ生きた空はなかつた。

緑地 點描

終日休息。驢馬たちは砂の中で嬉々として戯れ合つてゐる。荷物は包装替へされ、隊商員たちは荷づけの鞍がねを磨き、血塗れにすりむけた驢馬の背中を洗滌してゐる。積荷組みの方のバシも指に腫物が出来て醫師の手當てを受けに行つた。

バフトの町は、やゝ大きな公園位のもので、縦が二、三キロ米、横が半キロ米ばかりの小さな都會だ。そしておまけに、これだけの面積の大部分は胡桃の大木が茂つてゐるので、こんな大きな胡桃の木を見るのは生れて始めてだつた。公園とも見紛ふ此の町は、細長いだけでなく、十五米乃至二十米位の高臺になつてゐる。その全面を、ざつと六十年乃至八十年の樹齡とおぼしい今云つた青々と生ひ茂つた胡桃の林の巨大な冠が、家はおろか、第一その下に千人の市民が住んでゐることを疑はしめるまでに、鬱蒼と掩ひかぶせてゐるのだ。さうして、細い丸木橋を架した幅の廣い溪流が一本、此の緑地を貫いて走つてゐる。バフトには、夏も冬も、水は満々として溢れるほどある。標高二千米を超えるといふ高地の町のくせに、折々降雪を見ることはあつても冬季にも甚だ、溫暖な町だつた。

見るほどに聞くほどに、驚くべき美を備へた公園町である。巨木の胡桃と並んで林檎の樹があり巴旦杏あり杏あり櫻ありマルメロあり、葡萄ありといふ豪華さだ。之等の果實は主にバンデルアバスへ輸送される。乾燥された櫻果のうまさ、ほんたうに頬べたが落ちさうである。

バフトはまた電信驛として知られてゐるが、土地の電信技手の話によると、利用されるのは一ヶ

月の間で精々三回か四回だといふ。郵便物は十日目に一度づつ、バンデルアバス及びケルマンから馬で輸送されてゐる。

午後、物々しい行列が、我々の宿つてゐる隊商宿の荒れはてた前庭へ現はれた。此の前庭ばかりはバフト名物の胡桃の大木の樹蔭から除け者にされた云はゞ、バフト町のたつた一つの汚點である。行列は、町長が町の名士の顔を揃へて挨拶に來たのだつた。名士たちは約一時間ほども、まるで隠栖所のやうな私の部屋の前の壁龕の中に集つて、あれこれと私への盡力を申し出てくれた。不意の來客にお茶を運ぶのでハヂ・カシムは轉手古舞ひの形である。

此の町に不満を感じてゐる者は、云つて見れば料理人の此のハヂ一人位のものだつた。かねがねバフトといふ都會は今度のバンデルアバス行きの旅程中最大の町だから、規模は大きくなくとも相當な市場街があるに違ひない、と夢想してゐたのである。だが、いよいよ來て見るとそんな場所は影もなかつた。僅かに、石油と綿織物を賣る貧弱な店が二三並んでゐたに過ぎない。ハヂは、十一個の鶏卵を買ふのに足を棒にしたのである。おまけに、今日此の町の需要に應ずるために屠殺された獸は、山羊がたつた一頭だといふ事も聞きこんだ。いつたいなんといふ情けない町で御座んせう——と、ハヂはプリプリする。

『そんなら小羊を一匹買ひなさい!』

だが、小羊にはもう彼は懲々してゐた。此町へ來る途中、山の中で一番美しい小羊を見つけて買

取らうとしたとき、六クランと云はれて引退つた彼である。それが今、此のバフトでは一躍十五クランにとび上つてゐたのだ。『いやはや呆れた町でがす!』

朝の太陽が胡桃の巨木林の冠の中に、眩しい光條を投げ始める頃から、早くも賑かな太鼓隊の活動が聞える。太鼓隊とは隊商の綽名だ。なぜそんな綽名をつけたかと云ふと、隊商が近づいてくると、駱駝たちの背につけた積荷のドスン、パカッと揺れ合ひ撃ち合ふ音が、まるで鈍重な音響を發する大太鼓を間斷なしに叩いてゐるやうに響き渡るのである。

綠地バフトはその頃でもまだ樂園の平和の中にまどろんでゐる。何處かの婦人がパンを焼き始めてゐる。彼女は、よくほぐした捏粉を石板の上に置き、これを巧みに焼籠の内壁へ叩きつける。大型の骨壺に似た籠だ。底では火が燃え、火熱によつて籠の粘土壁が熱くなる。婦人は仕事の手を休めてびつくりしたやうに私の方を見上げた。歐羅巴からの旅行者を見ることは大變な珍事なのだ。此の町に迷ひこむ白人なんて、年に一人あるかなしかなのである。

さて、樂園バフトの町の町端れから二百歩ばかりも進んだ頃、驢馬が一頭、溪流渡渉の際に水中へ轉倒した。積荷は外され驢馬は扶け起されたが、弱つたことに私の肌着類を入れた行李が水浸しになつた。それから五六分も行くと今度は濕地帯である。そろ／＼と足探りだ、道路や隊商の通路なぞ痕跡さへない。驢馬は蹄がズブリとはひると、とたんに不安になり恟々する。例のベシ老人が

悠々閑々と長い杖をふり／＼先頭に立つて、深い水溜りや流水を二三次も渡りながらも、さしたる事故も起さずに固い大地の上まで一行を指導してくれた。

道は見渡しきれぬ丘陵の中へ紛れこんでゐる。昨日までの激しい風は収まり、熱気が石原の如き草原の上に蒸々してゐる。驢馬はみんな面白くない顔つきだ。昨日一日の休養が彼等を怠け者にしたのである。モハメット・アリ少年の朗らかな掛聲さへ、今日は彼等を促進するに役立たない。木を見つげると鼻づらを寄せて盗み食ひする。私も、驢馬が盗み食ひをやることに、何か薬草でも磨り潰すやうな強烈な匂ひを感じるのだつた。

此邊の曠野の灌木は今が花盛りだ。花は小さいがその色に特殊な美しさがある。濃堇色、ルビイ紅、硫黄色、中には既に花が散つて、枝いつばいに、葡萄玉のやうな赤い實の粒が鈴なりになつてゐるのもあつた。さういふ間から花莖の長い百合が首を出したり、肉色の薊の頭が覗いたりする。そちこちに、まだ見たこともない花が輝いてゐる。まつ白な、時には淡い紫がかつた星形の花で、花の中央に濃紫の圓を描いたものだ。内気な小さい蜥蜴が幾匹も、地面の上をチロチロしてゐる。時々石の上に這ひ上り、小さな華奢な手でつかまつて、注意ぶかい眼を不安らしくサロキヨロさせる。之等の蜥蜴は、砂に在るときは黄に、草に在るときは暗灰色に、石の上に在るときは石と同じ黒白混色に、皮膚の色を變ずるのである。従つて、ほんの一秒でも此の動物から眼を放さうものなら、つい目の前にゐる場合でも再び見つけるのはなかなか困難だ。――

驢馬を進める。ちやうど十一時だ、もう五時間は驢馬の背に辛抱せねばならない。相變らずベフトの町が、遙かに黒々と一本の細長い森影のやうに見えてゐる。前面はるかに遠く見える緑色の一斑點が、今日の目標のダッシュエタブだ。妙な話だが、驢馬を先頭に驅つて進むと、非常にテムポの緩いのを感じるが、後へ退つて隊商組のまん中へ挟まつて見ると、迅速な、活潑な、動きの中に包まれてゐるのを感じるのである。棒を叩く音、荷積んだ箱の鳴る音、綱の軋しみ、驢馬の鼻息、夥たしい蹄の音、等々があらゆるせはしない音響を發して前進を急いでゐるのだ。

正午近く、ハリルルト沿岸に到着。此の河は、數百キロ米の距離を山々と闘ひつゝ、或ひは、ジャス・モリヤンの湿地帯を拵へたり、ベルチスタンの地下水となつたりしてゐるのである。恰度その時は湯水状態で水が監つばくなつてゐたのであるが、動物たちはガツガツと呑んでゐる。私の小犬なども腹いつばい飲んでまるで球のやうにまるまるとした腹を抱へてゐる。きれいに洗はれた岸の斜面には柳がいつばいに茂り、新芽の出揃つたところと見えて中には美事な花盛りのものもあつた。

叫び罵しり、積荷はガタつき、大變な騒ぎの後にやつと此の河を渡り終つた。隊商組の者はみな靴を脱ぎ、引いたり叩いたりして驢馬を渡らせる。一頭などは、穴に脚を突込んで危ふく顛落しうになつたが、咄嗟の早業で積荷を掴んで食ひ止めることが出来たのである。別の一頭はまた河のまん中で怯氣立つた。これには小石の一齊射撃を加へて漸やく勇氣を奮ひ起させた。頭の下では三

羽の大鷲が圓を描きつゝ我々の行動を監視してゐた。だが、とにかく一同無事に向う岸へ上つたのである。

ダッシュエタプのとつときの播種畑へ來ると、私の驢馬がいきなり頭をさげたから耐らない。不意を食つて私は眞逆さまに轉落してしまつた。銚わづみを外すのに一苦勞だつた。御本尊の驢馬は人の苦勞も知らぬ顔に、悠々と御馳走をばくついでゐる。

ダッシュエタプは貧弱な村二つ三つの寄合世帯だ。それももう没落しかけてゐるやうである。まつ黒な遊牧民の天幕が一つ、悄然しん然と粘土の壁の間に覗いてゐた。何か曰いはくのありさうに引き裂けた木立が五六本、水道堀が一つ二つ、後にはもう見るべき何物もない。だが水だけはよかつた。隊商たちが此の村を驛に選んだ理由は此の水のよさだつたに違ひない。此の一日の間に、我々と顔を會はせた人間は驢馬を曳いた農民一人きりだつた。

ハチが寄合世帯の部落の一つに宿舎を準備した。一見待避所のやうな形で屋根の代りに叢林の枝や粗朶そだがかぶせてある。驢馬の背からおろした荷物は壁のつもり庭の方へ向けて積み並べた。庭では解放された驢馬たちがのびのびと散歩してゐる。料理番のある所は四阿亭風あつみやの建物で、建物といふよりは丸太や灌木を組んだ一見黒人の小舎のやうなものだ。ぼろを着た女が一人、牛乳を鉢に一杯持つてきた、此の村で手に入るものと云つたらこれが全部なのである。誰かゞ私に床の低い廐舎へ近づかないようにと警告した。其處は或る種の蠅の巢で、こいつに刺されると悪い腫物になる

といふのだ。

雲が低くたれこめ、今にも雨が降りさうである。暮れるのが早かつた。

翌朝まだ暗いうちに私は従僕たちを揺り起した。彼等は前夜おそくまで饒舌おしゃべりをやつたので、夜が明けたのも知らずに白河夜舟の状態だ。みんな頭から蒲團をかぶり、私が揺り起すとびつくりしてまるで木乃伊みいのやうな恰好で跳び上つた。隊商組の方は之に反してもう起きてゐる。小さな焚火をかこんで踊まり、すつかり朝になつたやうな元氣さで、大聲に話し合つてゐた。

糠雨である。驢馬に荷をつける時分から降り始めたのだ。暗い山々と雲のきれ目との間から、太陽が赤く濕つぽく顔を出してゐる。

やがて出發、涯しない草原の中だ。うす雲を見る見るうちに拂ひのけた朝日は、容赦もなく我々の上へ照りつける。せめてもう五六分も雲の中にあつて貰ひたかつた。誰も喋べらない。驢馬どもも居眠りを始める。そのたびに嘔鳴りつけてやらねばならなかつた。

いつでも私が先頭に立つた。別に理由があつたわけではなく、私の騎乗してゐる驢馬がそれを好んだのである。彼は、自分よりも前にほかの仲間を見るのが嫌ひなのだつた。時々道草を食つたりして隊商組の中へでもまぎれ込んでしまふと、彼は急いでまた先頭の位置を回復するのである。生れながらの指導馬かも知れない。彼が一番に警戒してゐる競争相手は、小柄ながらがつちりした黒毛の牡で、臀部に二三個血膿ちんみの出來てゐる驢馬だつた。こいつは一番重量のある箱を負ひながら、全

行程を通じていつも隊商組の先頭トッパをきつてゐるやつだ。機會さへあれば、私の驢馬を追抜いてどしどしと先に行く。一旦こいつに抜かれたが最後、再びこれを制壓することは私の栗毛驢馬の早い脚を以つてしても容易でなかつた。

とにかく、これ等の驢馬のもつてゐるいろいろな個性を観察するとなかなか面白い。二十頭餘の中で指導者の本能をもつてゐるものは二頭乃至三頭、後には無かつた。偶たまま、指導本能のない所謂隷屬本能の多いやつが先頭に出ることがあるが、そんな場合彼は自然に前進を止めてしまふ。これは進路とそのテムポとの責任をとり得ないためである。また、一番重い荷を負ふことを誇りとし光榮としてゐるやつも一頭か二頭此の中にゐた。彼等は最も困難な行進の場合でも、あくまで先頭組の名譽を守りぬかうと努力する。之に反して、さうした性格のないやつは出来るだけらくをしようとして計り、少し重過ぎる荷をつけられると再三轉げたりして、結局、より軽い荷に替へるまではそれを繰返すのだ。更に、騎乗組の中にたつた一頭だけ變つた驢馬がゐた。こいつはあのモハメット・アリ少年の馬術とやゝ亂暴な思はれる扱ひ方を以つてしても、容易に統馭の出来ない頑強さをもつてゐる。例へば、何か氣にいらぬことがあると場所も何も構はずいきなり足を折つて大地に倒れ伏してしまふので、かうなるともう挺て子でも動かないのだ。一番我儘で身勝手なのが料理番の道具をつけてゐる驢馬だつた。釜、手桶、風よけラムプ、徳利を脊負つたまゝ、いつも地獄のやうな亂痴氣騒ぎをやる。例へば誰かゞ彼の傍を通り抜けて行かうとすると、とたんにこいつの名譽心と自己中

心主義が目ざめるのだ。そして實に執拗にその後に食ひさがつて放さない。私なども、時には半時間もかゝつてこいつの食下るのを振り拂ふ場合があつた。天幕の支柱を負うてゐる驢馬は、徹底的に向う見ずな、狡猾な性質である。太いのや細いのを背につけたまゝで出鱈目に駆け廻り、隊商組の行進列を大混亂に陥入れた揚句、背につけた支柱をみんな落してしまふといふ、手のつけられない狼藉者だつた。以上のほかにまだ一打ダクばかり残つてゐるが、これ等には取上げるほどの個性がない。黙々として荷を負ひ、不平も鳴らさずいつも一團となつて行進する。

私が騎乗してゐる栗毛は、従順でしつづきのよいやつだつた。時々行儀の悪い眞似をするが、それを大目に見てやればちよつと珍らしいほどよく馴らされた驢馬である。私の聲をよく聽分け、私に不機嫌な時なぞすぐに感づくらしい。いつでも地上にうつる私の影を注意してゐる容子で、急がせようと思つたらちよつと鞭へ手をやれば、さつそく駈足になる。では私が鞭を見失つた場合はどうかといふと、その弱味につけ込むやうな振舞ひはなかつた。私としてはただ、此の驢馬の變つた特徴とも見るべき二つの點に氣をつけさへすればよかつた。度々流水を渡渉する場合があるが、その際は、水のせんかんたるせゝらぎの音が面白らしく、足を止めて聽き入つてゐる場合が珍らしくない。私はこんな時には黙つて、彼が再び行進を始めるまで辛抱するのである。また、時々何處からか特殊な匂ひがして來ると、やはり立ち止つてしまふ。そして鼻の穴を深いじようごのやうに聞いて浮々とその匂ひを吸ひ込み、齒を嬉しさうにカチカチ云はせる。かういふ場合にもやはり私

は、彼の楽しみを邪げないやう、おとなしく待つてやるのだつた。

草原は灼けつくやうに熱い。時折り、隊商組の方の驢馬が倒れる。遙か向うに、そちこちと鹽田のやうな細長い地帯がキラキラと光り、その上に日光が躍つてゐる。望遠鏡で覗くと、除々に進行してゐる羊の一群だつた。山の斜面に二つばかりぼつんとまつ黒な點が見えるのは、遊牧民の天幕である。それがはつきりと肉眼でも識別されるまでには、たつぷり二時間も経過してゐた。天幕は全部で十四あり、四つの群に分れてゐる。と、天幕から一つの點が離れ、隊商路をこつちへ動きだした。遊牧民の男である。明かに我々と言葉を交はしたいらしい。何か賣るつもりか、それとも目がきかなくなつた父親のために薬でも欲しいといふのか。その男は、我々と落ち合ふ個所の見當をつけて、五キロ米ばかり離れた地點へ駆け出した。が、半時間ほど走つた後で、目算の誤りを氣づいたらしい。我々のテムボは、彼が豫想したより早かつたのである。たうてい追つけさうもなかつた。見てゐると、彼は全速力で走つてゐたが、やがてびたりと立ち止つてしまつた。

草原はやうやく横斷した。今度は丘陵地帯である。觸目の地形も風光もがらりと變つた。叢のやうに小つぼけな木々が山腹を一面に掩うてゐる。瘦せた山林地帯だ。我々の進路がレシエトから北ヘルドバルを目指すやうになつてからといふもの、こんな小さな木がこんなにも澤山あるところはもう二度と見られなかつた。本當に樹木といへるやうな木の、こんもりとした蔭で、小憩を取る。

道は、今度はずんぐりした瘤だらけのイナゴ豆の木の林を通つてゐる。風のために高く伸びないのだ。これと向ひ合つて金雀花に似た灌木の大きな叢林が続いてゐる。まつたくだしぬけだつたが今までのイナゴ豆の林が廣大な、何年ともなく放置された果樹園と一變した。手入れをされない果樹は一部分暴風で吹倒されたまゝのものもある。素晴らしい梨の大木が芳ばしい緑にもえ、柘榴の林、巴旦杏の森が鬱蒼と生ひ茂つてゐる。乾あがつた流れの石の床には殆んど一面に胡桃が根を張つてゐた。移住者の遺跡はと云へば、瀟洒とした石組みの水道と小さな墓地、それに半ば崩れた太い塔が一本残つてゐるきりだ。

山の方は荒れてゐるらしく、時々雷鳴が聞えて来る。ちやうど我々が再び隊商組の後に追ひついた頃、猛烈な夕立が來た。各自に毛布を引かぶつて雨の止むのを待つ。風が強くなり、雲はうす暗く我々の頭上を掩ひ始める。今夜の宿泊地デエイセルドまではまだたつぷり一時間の行程である。今日の全行程にも、人間には一度も出會はさなかつた。

デエイセルトとは寒い村の意味である。標高約千八百米の高地だ。ところが、その次の驛に當るダオラタバットの方は、これよりも七百米も低い。其處は謂はゞ、熱い地帯と寒い地帯との境なのである。此の季節に南方から登つて來る隊商たちは、デエイセルトを殺人的暑熱から解脱する聖地として心から歓迎してゐる。その方向へ進まうとする我々の前には、明かに、より困難な多艱な道が展開するに違ひなかつた。

村の附近で我々は道を迂廻して遊牧民の天幕を探した。バタが欲しくなつたのである。黄色い狂犬の一群が殺倒して来る。辛くも石のつぶてをくれて追拂つた。私の小犬は驚ろき逆上せて、四肢をぶる／＼と震はせてゐる。子供たちもびつくりして遁げて行つた。すつかり野人化してはゐるが人の善ささうな遊牧民の男が二三人、黒天幕から出て来た。勿論バタは在る。がその前に代金を握りたいといふ。結局彼等は私の興へた金額では満足せず、もつと餘分に欲しがつた。やがて取引が終る頃、乳房の肥大な、黒い十字を鼻のつけ根に描いた女達が、天幕から首を出して我々の方を物珍らしげに覗いてゐた。我々が再び驢馬に跨つて引返すと、さつきの黄色い毛の狂犬群が物凄く吠えながら追ひかけてきた。

デエイセルトはかつての城趾である。現在の部落の近くに大きな古風な庭があり、兵隊が三人、その堡壘の残骸の中に宿營してゐた。兵隊たちは、我々を見ると非常な愛想で挨拶して、どうですよかつたら此の中の何處でもお使ひ下さい——と云つてくれる。だが見渡したところ、我々の天幕を張るに恰好な場所がないほど、城趾は荒れ果てゐた。ところが實にその瞬間だつた。恐るべき荒天が爆發したのである。黒褐色の雲はまるで巨大な駝鳥の羽のやうに、廢趾の丘までひしひしと掩ひかぶせ、天井の底を抜いたやうな豪雨がいつぺんに降つてきた。我々は急いで物置小舎のやうな建物の中へ飛びこんだ。豪雨は忽ち急湍となつて我々の後を追ひザツザツと屋根を打つた。隊商組の方は寺院の廢趾の中に遁れ、料理番のハヂは古ぼけた筒のやうな監視塔の中へ隠れた。可哀

想に驢馬たちは瀧のやうに降りかぶさる雨の下で立往生である。どれを見ても兩眼をつむり、降りつける方向へ尻を向けてゐる。そして、風雨が一層激烈になると、そのまゝの姿勢でそろ／＼と歩きだすのであつた。

そこへ早くも、少年従僕のモハメット・アリが、溜り水をバシヤバシヤ飛ばしながら、泥沼と化した前庭を渡つてきた。にこにこして茶碗を捧げてゐる。

『お茶が出来ました』——アリは此頃獨逸語の片言を覺えたのである。後はベルシヤ語にかへつて此の小屋には虱やその他の毒蟲がゐますよ、と警告してくれた。

翌朝は早く、此の不愉快な宿舎を出る。夜中に、腐つた屋根の一部が崩れ落ちるなどの事件があつたのである。別にこれといふ被害はなかつた。羽蟻の大群が我々の着衣にも手荷物にもウヨウヨたかつてゐる。出發までには相當の時間があつた。隊商組の方で驢馬の飼糧に窮してゐたからだ。料理番のハヂは此の部落をすつかり輕蔑してゐる。部落中をさがして歩いてやつと、鶏卵が六個見つかつたに過ぎないと云ふ。

最初に越えた丘陵から見渡すと、昨夜の、廢趾に埋れた庭の城趾のデエイセルトが、ちやうどフランスの村落のやうに感じられた。あの豪雨のお蔭で今朝は空氣が清淨である。日光もレンズの焦點を我々に向けてゐるやうだ。通路は大部分、乾上つた河床の石塊道である。兩岸とも屏風のやうな岩壁だ。猛烈に暑い。空氣はそよりも動かぬ。時々動いたと思ふとまるで火焰のやうなやつだ。

南方の荒野の空氣はカラ／＼に乾いてゐる。ゲルムジイルと呼ばれる『熱い國』に近づきつゝある何よりの證據だ。

何時間か、黙々として驢馬を進める。驢馬も難行苦業だ。みんな渴に悩みぬいてゐる。然し、眼を皿のやうに八方を見廻しても、掌一ぱいの水もない。水溜も井戸もてんでからからである。小犬ブルブルはもうさつきから私の鞍に同居させてゐる。跛になつて歩けないのだ。石塊道の焼石で蹠を火傷したらしい。

此の焦熱地獄の如き河床の石塊道は、元來蜿蜒たる氷河の痕だつた。土砂と砂礫で出来た高原の中の氷河だつたのである。だしぬけに大地が動きだしたやうに感じた。火焰のやうな熱氣のせみではない。疲れきつた眼の錯覺でもない。蟋蟀によく似た暗色の蝗の大群である。それが何千萬何億萬とも知れず、此の高原の上を移動して行くのだ。江河の流れのやうに緩々と蠢めき、隊商路の上に堤をきつた洪水の如く溢れてゐる。何か自然の中の神祕な衝動に驅られて、説明し難い本能の指令するまゝにこのやうな大群を編成するのであらう。おゝ、見渡すかぎり、茫々たる曠野の大地が蠢めく。此の蠢動する億萬の流れの中に一度足を踏み入れて見たまへ。蝗どもはまるで巨大な箒で掃いたやうに、忍まじ算を亂して四散する。そして、一旦四散した彼等は暫らくするといつの間にか再び新しい結集をもつて蠢動を始めるのだ。

やゝ暫らく進むうち、いま四散したばかりの黄色い蝗軍が、忽ち群像の形で集結してゐるのを見

た。灌木や叢木の根から葉の末にいたるまで、残る隙もなく彼等によつて占領されてゐるのだ。さういふ場所へ近づくとまるで積上げた柴か粗朶でも燃え爆ぜるやうな音がする。こんな蝗軍の目標となつた緑地こそ災難である。

隊商組の指導者から、水のありかゞ報告される。かつきり一時間ばかりの距離だ。だが、期待したその用水もカラカラに乾上つてゐた。大氣はいよ／＼燃えるやうである。驢馬は疲弊の極に陥いつて、積荷を支へる力もなくバタバタと倒れ始めた。止むを得ず隊商組は縦列行進をやめ、弱り果てた驢馬は積荷を外して後から跟いて來させることにする。

最後に、遙かなまるい丘が見え、其上の圓筒のやうな監視塔が見え始めた頃、隊商組が先立で通路を迂廻した。これはどうだ、水が溢れるほどある。水道が地下で涿々と音を立てゝゐるではないか。しかも、そこまで水を汲みに降りられるやうに、水汲場への石段も深々と續いてゐる。井戸は僅に一米半も深く、はり樞の古木が樹蔭を作つてゐる。おまけに、澄んで明るい水中には魚が泳いでゐるではないか。こんな別天地の沙漠の井戸に魚が生きてゐる。此の事實を解明す鍵は、恐らく鳥類が持つてゐるであらう、鳥が、何かの偶然で魚の卵を此處に落したに違ひない。さつそく、驢馬の積荷が外され、先づ飼糧を興へてから井戸まで降らせてやる。みんな、明るく澄みきつた水に脚を突立てゝガツガツと呑んでゐる。

ダオラタバットまでまだ四時間はたつぷりかゝると見なきやなるまい。もう四時である。私は此

の童話の世界に在るやうな噴水の傍で野營する肚を決めた。天幕を張らせる。料理番ハヂの職場は今夜は小さな砂利穴である。

荒涼素莫の小驛グレンデルのまるい監視塔は、一風變つた構造である。扉といふものがない。出入は、二米ほどの綱梯子によるもので、昇つたらその梯子は手繰り上げてしまふ。人間も動物も、これでは侵入することが出来ないわけである。塔の内部には混砂粘土の床に本當の階段が通じてゐる。監視の兵隊が三人、小さな火鉢をかこんで腰かけてゐる。一人は笛を吹いてゐる。兵隊は、日が暮れるといろいろな害獣が、とりわけ豹が、あそこへ水を呑みに來るから警戒しろ、と教へてくれた。あそこは我々が天幕を張つた地下水道の井戸口である。

だが倅ひ、夜は何事も起らず森閑と過ぎた。水道の流水の音が、水車用水のやうに、平和に聽える。

翌朝出發してから氣づいたことだが、昨夜あのやうにやさしく平和に流れてゐた地下水道の流がれの音が、いくらも行かぬうちにぱつたり杜絶えてゐるのである。恐らく、あれだけ豊富な水量が地中のどこかで吸ひ込まれてしまふのでもあらうか。

緑地^{オアシス}ダオラバットは廣大な沙漠盆地のまつ只中に在つた。此處で初めて椰子園を見る。いよいよ『熱い國』第一課だ。

かつては美しかつたに違ひない隊商路が、古い殘骸となつて今は顧みる者もない。それと並んでペルシャの電信局が建つてゐる。おそろしく單純な設備のバラックだ。此の邊の住宅の建築様式からしてひどく今までのとは變つてゐる。母屋^{おもや}は扁平な屋根をのせた粘土小屋で、その前に廣々とした四阿亭風^{あつちまや}のものがある。母屋のまる四倍ほどで、全部が椰子の葉の纖維と揚柳^{タヤスガ}の枝である。竈^{かまど}の煙が屋根の隙間から立ちのぼつてゐる。四阿亭風の方に、女子供が山羊、牝牛、鶏などと一緒に雜居してゐる。男たちは、入口に腰を据ゑて水煙管^{スイヤン}をくゆらしてゐる。内儀や娘たちも、さして羞^{はにか}みもせず半裸の肌を見せてゐた。美人が多い。肌の色は、橄欖^{オリーブ}青から珈琲褐色までいろいろの段階がある。中には、曲線一本と星形を三つ、鼻根の上に刺青^{いれずみ}してゐるのも見受けた。粘土小屋の屋上にも山羊や羊が散歩してゐる。單なる氣紛れからではあるまい。恐らく少しでも空氣の動くところがいくつであらう。實際に時々、草原^{ステップ}の方から微風が渡るのである。とにかくひどく暑い、夕方の六時順に測つたらまだ攝氏三十五度もあつた。

料理番のハヂが占領した野營地は、低い牆^{かき}に圍まれた小さな内庭で、うまい具合に巨大な桑の古木が蔭を作つてゐる下である。桑の實^みが、日光の營養を豊富にうけて蜂蜜のやうに甘く、蜂蜜のやうに飴色に熱^{あつ}れきつてゐる下へ、我々の天幕が張られた。携行の荷物は牆に沿つて整然と積重ねてある。ハヂ自身の野戰調理場は、棗椰子^{なつめやし}の葉蔭に作られた。その枝葉に水筒や水壺や、風よけラムプ、茶碗等々が吊され、湯沸しの噴上げる蒸氣が椰子の梢の冠のやうな葉のあたりへ立昇つてゐる。

る。もう二本、これは非常に高い椰子の木がハヂの調理場の背後に、中空を衝いてゐる。

近頃見なれないほど今日の野營地はお伽噺の世界のやうだ。但し敷地がひどく狭くて、始終誰か知ら、天幕の綱に躓づいてゐる。廣々としたダオラタバットの緑地へ来て、何もこんな窮屈な場所を選まなくても……と、私はハヂに、なんでこんなところを選んだのだ、と訊いて見たのである。

『此處には商店が御座んすので……』と、英語で答へる彼の方が、むしろ私の愚問を反駁してゐるやうだつた。

なる程、その通りである。此の庭の中にはダオラタバットの市場があつたのだ。私は用もないので今まで氣づかずにあつたのである。商店と云つても小つぽけな粘土小舎で、半身はんみに構へないと中へはひれない程狹隘な入口があつてゐる。店主は私を見ると頷ぎ、にこにこ會釋しながら、型どほり私の希望を探らうとする。まるで私をいゝ金蔓とでも思ひ込んでゐるやうな口吻だ。だが、此のうす暗い小さな百貨店に在る物は、私には用のない品ばかりだつた。三米ばかりの綿布のたぢぎれと一山の菓製品。——それだけである。砂糖は、石油は、石鹼は、蠟燭は？ いゝえ、御座いません、何もかも賣切れました。——マッチは？ はい御座いますとも、——といそいそ取出すまではよかつたが、たつた一箱しかない。私が代金を支拂ふと、今後のごひゐきを願ふつもりか、大きな柘榴ざぐらの實を一つくれた。云はゞマッチ一個に對するこれが景物なのである。

それからもう一つ、此の庭の中のちやう度この商店の直前に發見した珍らしい建物がある。楊柳の

枝條えだを編んだ小つぽけな扁平の屋根、それが四本のかれこれ一米位しかない棒杭で支へてある。最初私は、顧客たちが此の下に腰を下して品物を見たり値ぎつたりするのかと思つたが、間違ひだつた。此の低い屋根のやうなのは實に寢臺だつたのである。翌朝、天幕から覗いて見たとき、ちやうど昨日の店主が店員たちと一緒に、その柳の枝條の屋根の上で、腫れぼつたい眼で起直つたところだつた。——

ハヂ・カシムは奇蹟の傳へられる此のダオラタバットにも満足してゐない。彼は、たつた今、買物箱をぶらさげて汗だくで戻つてきたところである。方々駈けずり廻つて至る處で甘い言葉に迎へられた、と此處のところをハヂは唇を尖らせ、更に指の先でそれを一層長く引張りながら云ふのである。此の町は買ひたいものは何でもある。山羊でも小羊でも鶏卵でも。だがいつたい何たる奴等やつらで御座んせう。途方もなく高いんだ、暴利搾取ですよ。こいつは。——ハヂはがっかりしてゐる。といふのは、その法外な高値の上に更に、ほかのあらゆる料理番がやつてるやうな若干の口錢を加算するとすれば、即座にお拂箱になる危険があると感じたからである。だからハヂは、斷じてもう此處では鶏卵一個も買ふとつちやない、と云ふ。みんなが飢ゑたつて買つてやるものか、といきまいた。

人の話によると、ダオラタバットの此の庭は現在或る回教ハムムットの汗カハ(主權者の意)の持物である。庭内

に茂つてゐる棗椰子だけでも三百乃至四百本はあらう。しかもそれ等の大部分が、枝もたわわに鈴なりの果を房々としてつてゐる。現に私を案内した園丁なども、今年は素晴らしい豊作でとほくほくしてゐた。一本の棗椰子からは少くとも五十ポンド以上のなつめ果實が採れるに違ひない。また、此庭には男の椰子が四本あるが、これから取れる花實を女の椰子の繖形花に注入すると、結實を促進するといふ話だつた。

椰子にまじつて、巴旦杏、蜜柑、レモン、柘榴、等々の果樹がいつばいに茂り合ひ、火のやうに赤く花盛りだ。更に、それ等の樹々の梢まで這ひ傳つてゐる薔薇の花がまた、こつてりと蕩かすやうな香氣を、浚んで重い空氣の中に撒きちらしてゐる。モハメット汗の庭園は、やゝ荒つぽく呼吸もつまりさうだが、何か其處に妖氣に似た印象をうける。私は、眼に見えざる何物かに、後を跟けられてゐるやうでならなかつた。

『これで椰子はみんなで何本位あるね？』
と、私は案内に立つた園丁に訊ねる。

『澤山ある』といふ答へだ。

かりに私が、ダオラタバットの人々ほどの位かと訊ねても、やはり澤山と答へるに相違なく。最後に、樹々の間に挾撃されたやうな恰好の古い小さな建物の前に出た。

『これかね君たちの住居は？』

『いゝえ、これがモハメット汗様のお邸です』

『お目にかゝつて見ようかな。』

『王様はお他行です。』

『何處へ？ 御旅行かね？』

『いゝえ、お他界なされたのです。』――

日輪は茫々たる草原の西の涯に餘燼を残して夜が急速にやつてきた。星光が天幕の上の桑の大木を洩れてチカ／＼光つてる。大分涼氣が加はつたが、此のダオラタバットには休息も平和もない。蚊や虻に見舞はれる驢馬たちが鼻を鳴らし蹄を叩きつける。隊商組の連中が、墻のすぐ傍で焚火をし、夜の更けるまで饒舌の花を咲かす。園内には之と呼應して鶏が鳴き叫び、山羊が鼻を鳴らし、料理番のハヂはハヂで例の長廣舌を振り廻してゐる。籠燈を吊したあの椰子の木の下に胡座をかいて、農民相手に取引きをやつてゐるのだ。いよいよハヂの不買戦術が成功したと見え、ダオラタバットの農民の方から、いろいろなるものを賣込みに來たらしい。山羊、小羊、鶏、果物、鶏卵等々、なんでもある。今度はハヂの方が斷然優勢だ。反抗する城を一舉に占領した常勝軍の如く假借なくやつつけてゐる。拒絶、難癖つけ、値切り、此の三つの武器によつてたうとう、若い山羊一頭、鶏六羽、鶏卵一籠の賣買契約が成立したときはもう夜半だつた。勝ち誇つたハヂは、代金を農民たち

の足下へ無雜作に抛り出して呷鳴る。

ブウロオ！——さア持つてけ。

やつと少し静かになつた。と思ふと今度はダオラタバット全部落の犬が、私の白犬ブルブルに一齊に急襲開始である。アリ少年が棍棒を振つて防戦に努める。襲撃の野犬群は庭の外へ退却した。さつきは塙の穴から個々に侵入して來たのである。こんな風にして死物狂ひの犬群の來襲が曉方まで尙ほ三度繰返された。一度などは、ブルブルを追ひ込んで私の天幕内まで闖入した。

たうとうそれも静まつたと思つたらまだある。野鳥だ、これはまた間斷なしに巴且杏のてつぺんに集つて叫び立て、その都度、枯枝のはしきれや巴且杏の果をバラ／＼と私の頭の上の天幕へふり落すのである。

無慈悲な日輪が一分の猶豫もなく昇天してきた。——出發、出發。料理番用の驢馬がまつさきに倒れた。瀬戸物や硝子物がガチャガチャと碎ける。續いて隊商組の方にも落伍の驢馬が續出する。昨夜の激戦で前肢をふみ抜いた小犬は、今朝は隊商組の驢馬の背に小さくなつてゐる。ハチの戦利品の小山羊は、少年アリの膝に抱かつてゐる。元氣な隊商組の足も今日は蟻の遣ふやうだ。直きに私は、今後は夜中に行進した方がよからうと肚をきめたのである。

いつまでたつてもダオラタバットの平地が盡きない。昨日、北方の山地から此の緑地へ來たときは四時間しかかゝらなかつたのに、今日はどうだ。もう四時間はとづくに経過してゐるのにまだ南

方の山に近づいてゐないのだ。

此のペルシャの高原といふやつは、なんと涯しがないものだらう。ぐるりと岩山で縁どつた扁平なお盆のやうである。お盆も空虚、山も空虚、灌木もなければ立木一本ない。見渡す限り觸目たゞこれ空、石と砂礫と廢趾の塵芥があるばかりだ。行手に黒い物がぼつんと見えたので道を急ぐと、約一時間ばかりでそれが隊商驛の宿屋と分つた。それから更に一時間、今度はもう紛れもなく、隊商宿の牆壁まではつきりと見える。大きな雲の影も掌位にしかあたらなしいし、牧羊の大群も一つまみの毛糸のやうに見える。この壯大無比な曠地の上を、隊商路が一條、いちけた灌木林の間を縫ふやうに視界の外へ消えて行く。高原は次第に、肌を露出して同じやうな肌の連降へと登りになる。葦のやうな青い短衣の兵隊が一人、我々の行進に参加した。黒人のやうに黒い皮膚で、美しい手綱をつけた驢馬に乗つてゐる。一度列を離れて荒野の灌木の間を、四圍に氣を配りながら地面を這ひ廻つたと思ふと、直きにまた我々の間へ引返してきた。羚羊を三頭見つけたのであるが、發砲するにいたらなかつたといふ。だがこれは後で知つたのだが、此の兵は我々一行を自分の掩護に利用したのだつた。山道の一人歩きは危険が多いのである。

白日の炎熱の中で、どうやら此の皿を置いたやうな高原の縁に辿りついた。ダオラタバットの緑地は遠く低く、美事な紺青の湖水の中に在るやうに見える。石塊道を踏んで更に前進、右も左も、まるで青銅で鑄をげたやうな裸山だ。驢馬隊商の一團が向うから來る。幾日ぶりがで出會ふ隊商で

ある。先方は頻りに我々を廻避しようとあせつてゐるらしい、男たちの態度にも尋常ならぬ氣配が感ぜられる。或ひは、我々を山賊か強盜の集團と見たのかも知れない。

硫黄のやうに緑色の大岩にあいた洞穴があり、その間に岩の破片や熔岩の破片があつた。清水がさらさらと流れてゐる。犬は元氣が出たかさつそく傍の水溜に鼻まで突込んだ。夾竹桃の叢林が花盛りである。その向うには姿こそ小さいが本當の木ががつちりと立つてゐる。冬の暴風雪に虐まれ夏の炎熱に焼かれながら毅然としてゐる勇敢な木だ。その枝々は色彩々の羅紗屑で飾られてゐる。云はゞこれは、此の小さな木が天然の回教寺院として、崇められ祀られてゐる證據だ。

此の神聖な木のすぐ横に、花盛りの夾竹桃の叢林をめぐらした泉があり、それに臨んで野營してゐる一團の隊商があつた。貨物は積上げられ、十二名の男が焚火をかこんでゐる。附近に草をはんでゐる騾馬は四五十頭もあらうか。此の隊商は、茶をケルマンへ輸送するのである。やゝ暫らく、彼等の間に割込んで話が弾んでゐた料理番のハヂは、得意満面で私の方へ馳せ戻つてきた。——珍事件ぢや大事件ぢや！ と報告する、昨日、五百人組の強盜團が此の山中で騾馬隊商を襲撃して、根こそぎ奪ひ去つた、といふのである。五百人とはちと怪しい。多分五十人だらう、と私は疑はざるを得なかつた。

『ところがさうなんで、五百人の強盜團ぢや！』とハヂは満悅の態で自分の膝を叩いてゐる。——それからさつと二時間、別の驢馬を曳いてきた小人數の一團に出會つて、此の事件の詳報を知る

ことが出来た。盜賊の數は四十人、三十五頭の驢馬を曳いた砂糖輸送の隊商を襲つて、積荷から驢馬まで根こそぎ奪ひ去つた、といふのである。これを聽いてゐる我々の隊商の連中が、顔色を變へて各自の驢馬を見廻した。私は彼等を慰さめるつもりで、こんな老筆の使ひ古し馬を盗みに來るやうな泥棒は世界中にゐやしない、と云つたが、これは反つて逆効果を生んだらしい。

再び我々の一團だけに成る。どつちを向いても、あまり客を好まぬらしい不愛想な山、山、山。深い溪谷、峻嶮な峠、石塊道——それ等の上になゞ殺人的暑熱の狂亂があるばかりだ。やがて、険しい山の鞍部を越えようと、思ひがけなく、今日の目標のビヅ村が目の前に現はれた。

ビヅ村は五六軒の貧弱な粘土小舎と、同じく見窄らしい遊牧民の天幕の幾つかが並んでゐるだけである。村には二三百本の棗椰子があり、いづれも鉢できり込んだやうに蟲々と、草一本ない灼けつくやうな岩壁からつき立つてゐる。こんな岩山の中に、こんな美事な椰子の樹や青々とした庭があらうとは、まつたくの話夢にも想像しなかつた。些やかな溪があり、水は冷たくそして甘い。これが此の石山の中の緑地の唯一の魅力でもあらうか。

溪流から十歩ほど行くと小さな庭がある。我々は其處で野營の準備をした。そこへ、遊牧民の天幕から、まるでヤソ教の傳導師のやうな顔をした男が一人、何か賣りつけいさうにこちらへやつて來た。料理番のハヂが接渉して小羊を八クランで買取る。隊商組の方でも今日は珍らしく今度の旅でこれが初めての御馳走をやると見え、やはり小羊を一頭買つた。此方は七クラン、但し毛皮は先

方へ返す約束である。我々の騎乗組は今夜すぐ屠殺するのでなく、食料の豫備として當分生かして置くつもりだつた。

日射しはまだ暑く、かたが、隊商組の元氣は上乘である。驢馬たちの傷口を洗滌したり、溪流の冷たい清水で冷やしたりしてゐる。二三、背の皮膚がひどくたゞれてゐるのがあつた。私は、此の山を脱したら直ぐ一日休まうと決心した。

日が暮れるとみんなお喋りになる。話題の中心はいろいろな盗賊の話、數年まへに、ベルシャ内の交通を不安にした山賊の事、リザ汗が乗りだしてそれ等の匪賊どもを一遍に十二人宛處刑した話等々、話題はいくらでもある。

ビヅからブルスマメデへの通路は、ビヅの直後の峻しい山越しに通じてゐる。私が一日休養しようと考えた村は此のブルスマメデだが、ビヅに較べてずつと大きい部落だ。細い急な徑が一つ、岩の崩れ落ちた間を縫うてうねうねと、壯大な頂上の荒野へ走つてゐる。降り是一段と峻しかつた。時々岩道がひどく狭くなり、驢馬の背の荷物がつかへて宙ぶらりんになる。一頭などは激しい勢いで倒れてしまひ、積荷を外してやらねば起上れなかつた。岩穴の中へ横倒しに落ち込んだので、尻尾と頭を抑へて引張りだすといふ騒ぎである。適當な時刻に出發したので、此の山道を越すのはさう大した苦勞でもなかつたが、これが驢馬でなくて駱駝だつたらさぞ大變な事だつたらうと思ふ。

乾上つた溪流の川床の石塊を踏んで一步一步降つて行く。日輪は山頂から顔を出して、焰のやう

な熱い息を容赦なく我々の上へ吐きかける。小犬のブルブルはもう、蔭から蔭を拾つて足を曳きずつてゐる。私は、彼を私の鞍に同乗させてやらうと思つて飛降りる拍子に、片手を石塊で火傷してしまつた。石でも岩でも、熔鑪のやうに焼けてゐるのである。

そんな、焼石原のやうな川床を歩くことは實に容易でない。流石の驢馬嫌ひなハヂさへ、今日は鞍の上にある。十時頃に測つて見たのだが、物蔭で攝氏四十度だつた。晝間の行進はいよいよ今日限りにしようと思ふ。

約六時間に及ぶ強行軍を通じて、一滴の水も得られなかつた。山水の水口はどこもかしこも、灼けきつた岩の上でカラ／＼に乾上つてゐる。勇敢なアリ少年が革袋を抱へて探し歩いたが駄目だつた。やうやく正午を過ぎた頃、遙か行手に椰子の木がキラ／＼と揺曳して見えた。それから更に長い何時間か過ぎてから、我々はかなりの樹齡らしい大木の樹蔭に足腰をのぼした。目の前に小さな水流がある。驢馬はほとんど例外なしに轉がつたり脚をなげ出したりしてゐる。隊商組はみんな、五體を投げだしたやうに眠つてしまつた。お互ひにぶつちがひになつたり斜かひになつたりしてまつたく前後不覺である。中には小刀を握つたまゝ眠込んでゐるものもある。何かを切らうとしてそのまゝ眠つてしまつたのであらう。射撃をうけて仆れた前線の兵のやうである。頭上では、大きな秃鷹が五羽、翼を揃へて旋廻を續けてゐる。

前云つた古木の樹蔭に一人の老人が胡座して、葦の葉で草履を編んでゐる。妙な恰好だと思つた

ら足の指も使つてゐるのだ。老人は自分の年齢が幾つなのか知らない。が、既に幼少の時分から此の地に住んでゐるといふ。時たまプルスアメヂ町へ出かける位で、それ以上遠い所は今日まで一遍も行つたことがないのである。老人には大變美しい子供が三人ある。二人はもう青年期にはひつた男の子、一人は娘である。羊も若干持つてゐて、我々に羊乳の凝固したやつを買はせた。老人は幸福らしい。生涯を託した此の土地は云はゞ、石と砂の荒野に恵れた小さな奇蹟の様なものだつた。溪流はせんかんと流れ、古木の樹蔭は樂園のやうに涼しい。向ひ側には夾竹桃の太木の小さな森があり、花は今が盛りだ。然し此の花の匂ひは臭い。指物師の使ふ膠にかわの匂ひがある。

夕方に近い頃私は眠つてゐる連中を起した。プルスアメヂまでは、勿論あといくらもないであらう。だが私は、これまでの経験でさういふ云ひわけを信じないことにしてゐるのである。果して今日も、私の方が勝つた。プルスアメヂへ行き着くのに二時半かゝつたのである。

例の小柄な黒人兵隊が今日もまだ仲間に加はつて、先頭に驢馬を進めてゐる。僅かの酒代つみしろをはずんでやれば、百キロ米もお供に立ち、その百キロ米をもう一度一人で引返す位のこと、彼に云はせれば朝飯前なのである。あの山中の緑地ダオラタバットではどうして顔を見せなかつたのか、また我々に随伴してからもう四日にもなるが、此の期間が彼自身にどんな祕密の意味を持つてゐるのか、なぞといふことはてんで氣振りけふりにも覺さとらせない。

道は相變らず深く抉つたやうな谷川の床である。兩方の崖は完全に直立で、時折り八米から十二

米位もきり立つてゐる所があつた。溪谷にはさしあたり一滴の水もないが、時に雪解の水や激しい夕立がある場合は、此の何キロ米ともなく長い谷川の床は、通行に不安がないとは云へないのだ。黒人兵の話によると、すでにさういふ突然の水に脅かされて溺死した隊商の例が幾度かあつたといふ。稀には死を免がれ得る可能性もあるだらうが、駱駝や驢馬や、さうしてその積荷などは當然潰亡を免がれないであらう。

溪谷のはゞが大きくなり、それだけ屏風をたてたやうな岩壁が後退した頃、プルスプルスの椰子の森が目前にあつた。兵隊に護られた隊商の一團がやつて来る。先頃はプルス駐屯兵の隊長だ。バンデルアバスからバプトの間の凡ゆる哨兵、番卒の指揮統率権は此の隊長が握つてゐる。隊長は我々の中の黒人兵を發見すると、直ぐに歸還を命じた。私は後から、彼に約束の酒代つみしろを傳達して貰ふのに一苦勞した。それ程、此の黒人兵は大慌てに慌てゝ我々の中から飛出して行つたのである。

隊長は活潑な若い男で禮儀も正しい。制服も立派である。暫らく言葉を交はした。低い驢馬の上と、立派な逞ましい軍馬の上とで話し合ふのだから、私の方がどうしても見上げる形である。蝗の群れが、夕日を浴びてまるで太い銅線のやうに輝やきながら、我々の身邊を掠めて飛ぶ。

隊長は公務でケルマンへ行く途中だつた。プルスでお迎へできなくて残念ですと云ひながら、自分の代理者への紹介を書いてくれた。

私が隊長とこんな話を取交はしてゐる間に料理番のハヂが兵隊の口からこんな事をきいてきた。ハヂの英語をかりて云ふと、昨日、兵隊たちは盗人^{スティーレン}と火^{ファイヤ}を交換した、つまり守備兵と匪賊團との間に戦闘が行はれた、といふのである。その際、匪賊團の一名は射殺され、多数の負傷者があつたといふことだつた。

ブルス市民の驚異を集めながら、我々は町に入るとすぐ、大きな椰子林の中に天幕を張つた。まだ支度が出来あがない前に、例の白犬ブルブルが見えないことに気がついた。正午過ぎ、あの小さな緑地^{オアシス}で休憩した時にはたしかにゐた、驢馬の間にまじつて晝寝してゐたのを私も見てゐる。すると、一行の出發するのにも氣づかずにあのまゝ死んだやうに眠りつゞけてゐるのかも知れない。みんな口々に罵り合ひながらも、肚の中では可哀相でならなかつた。私は、どうせ明日は一日休養する心算^{つもり}だつたから、賞金を賭けて、希望者に明朝すぐ昨日の休み場所に戻り、犬を探してくることを依頼した。

ところがその夕方、もう宵の口も過ぎたころブルブルの姿がたしぬけに目の前に現はれた。あの古木の樹蔭に草履^{サンダル}を編んでゐた老人が、深切にも、三時間もかゝる遠い山路を、此處まで引張つてきてくれたのである。私は老人の善良な心掛けにすつかり打たれて、思ひきつた謝禮を彼の手に握らせた。その額はおそらく、幾打^{グリス}かの草履を編むに匹敵したことであらう。老人は料理番ハヂの接待^{もてなし}を受けて復び夜の山へ消え去つた。

だが此の小犬もさぞ驚ろいたことだらう。眼がさめて見たら、もう誰もゐなかつたのだから——犬は主人のもとへ無事に歸されても直ちに喜び跳ねることが出来ないほど、神経を搔亂されてゐると見え、全身をくるくると捲くやうにして、ベソを搔いたまゝまた眠つてしまつた。

ハヂが、料理場の近くで一指尺位の肉色をした蠍^{サソ}を見つけたと騒いでゐる。天幕の中にも烏賊^{イカ}位の大蜘蛛^{おほぐも}がゐた。胴廻りは榛^{かみ}の實位あり、口には精銳な牙^{きば}を備へた凄いやつである。然しこの蜘蛛は少しも危険はない。その他やはり天幕内で一指尺よりちつと長さうな小蛇が見つかつた。小さな耳をもつてゐるところから推して、全然無害のさんしよの魚の類に違ひなかつた。とにかく、ブルスの椰子林には驢馬や羊が放牧されるから、いろいろと珍奇な生物が潜んでゐるのである。

ブルスには椰子の木が何千本とある。云はゞその果^みによつて此の町は生活してゐるのだ。家は貧弱な粘土小屋で、私の目算で三百人位の此の町の人々は、大部分さういふ小屋に住んでゐる。粘土と椰子の葉の葉^{えんぐ}助を材料にした小屋である。此の葉助で作つた棍棒を、土地の人は穀類^{かちんち}の禾^こ打に利用してゐる。その他、椰子の木にはいろいろ用途があるのだ。水道でも橋でも、椰子の罫^かを使つてゐる。住民の肌は淺黒いといふよりもつと黒く、女達はみな綺麗な硝子の腕環をはめてゐる。

町長と二三の代表者が、私のところへ挨拶に見えた。その機會に私は、實際に此の町の近くで、二十二名の匪賊に襲はれた隊商があつたこと、それが何れもベルチスタン人で、損害は三十五頭の驢馬、積荷の砂糖は投捨てゝ行つたこと、などを聞き知つた。ハヂが聞込んだ戦争はこの後に續く

もので、追跡兵は此のベルチスタン匪賊の一名を射殺し、數名に負傷せしめたのである。とにかくこれは容易ならぬ事件だつた。かゝる犯罪はイランではごく稀なのである。かつてイスファハンの警察署長が私に話したことがある。署長の記憶によると、三ヶ月間平均一件乃至二件のコソ、泥事件がある位のものだといふ。金額にして總額五十トオマン位だといふから文字どほりのコソ、泥に違ひない。とにかく、今日のイラン程治安の完全な國は、歐羅巴のどこにもない、と私は思ふ。かうして毎日シャア(ペルシャ王の稱)の國を旅行してゐても、未だ一度も最小限の不愉快な思ひさへした覚えがないのだ。行李の鍵もかけたことがないし、眠るにも扉は開放しで荷物はそこらに出しなすだ。それでもいまだかつて鉛筆一本盗まれたためしがない。私は此の町へ來て始めてブルスの警備隊長がケルマンへ呼ばれた眞實の事情を察知し得たのである。

夜間騎行

日没を待つてブルス町を出發。よく茂つた廣大な椰子林の傍を過ぎ、二度三度荒地の中を横ぎつて進む。所々、鹽が發汗してかびのやうになつてゐるのが見える。こちらから頼んだわけでもないが、また兵士が一人我々に加はつて、先頭に立つてゐる。直きにまつ暗になつたので、その姿はもう朦朧としか見えない。多分十二回位も川を渡つたであらうか、その都度、驢馬たちは清冽な水の

感觸を楽しむ風にパシャリパシャリと蹄を跳ねてゐる。自分の手を眼前に持つてきても分らないやうな暗闇の中で、先頭の兵士だけには一秒の隙もなく淺瀬が見分られると見える。どこかで一人ぼつちの豺が悲しさに咆えてゐる。昆蟲が顔にとびつく。ふいと灯が一つ見えたと思つたら、直きに消えて隊商が近づいてきた。やがて先頭の兵士が馬首を廻して佇止つたのをきつかけに、我々も砂利の上で休憩と決める。隊商組が小さな焚火をかこんで跼まると直きに、五、六人の農民が傍へよつてきた。此の闇の中をどこから來るのか、焚木や羊乳、乳酪などを賣つて行く。

出發。まだ曉方まではなか／＼ある。再び私の直前の影の踵を拾ふやうに眼を光らせて進む。まるで幽露のやうにふらふらと搖曳するその影は、何かの機會で闇の中に消え入りさうになるのである。そのうちにやつと空が明るくなつた。鋸でひいたやうな山々が天をついてゐる。私の睨んでゐた影もすつかり輪廓がはつきりしてきた。今はもう此の川底道のどの石塊でも識別できる。朝日が顔を出した時、ちやうど我々は妙に荒れはてた山の上にあつた。周圍はいたるところ古い城塞の廢趾である。完全に没落し去つた都會の殘骸だつた。夜が明けたばかりといふにひどく暑い。十時近い頃、先頭の兵士が馬を止めて、『セルイシルです』と、貧弱な葦の掘立小屋を指さした時は、ほんたうにやれやれと思つた。

セルイシル——正直な話、今度のイランの旅でこれほど情けない休憩地は始めてだつた。幅五十米、深さ三十米内外の峽谷である。井戸が一つ、附近の砂利を濡らして滲み出してゐる。一跨ぎに

も足らぬ水口でおまけに浅いから、驢馬の給水には別に穴を掘る必要があつた。おまけに水は鹽つばい。峡谷全體がまるで地獄の釜の中のやうで、高い岸壁に反射する日光は目もあけられぬほど強烈だ。みんな瀧のやうな汗で岩の蔭に跼まる。日射しが廻るにつれて、そのまゝ滑らぬやうに注意しながら一歩づつ移動するのである。だが到頭、ほかの岩蔭を探さなければならなくなつた。ハチが岩の割目を見つけて食事の支度を始めてゐる。ちよつと仙人の面影がある。火焰のやうな空気の

中を、蝗の大群がとび、うるさい蟲どもが、手と云はず顔と云はず、とびついて来る。これが、我々を炎天下に引き止めたセルイシル部落の全貌だ。次ぎの泉は更に四時間行程の彼方に在る。

云ひ遅れたが、此の地獄の釜の中で足を休めた者は我々の一行だけでなかつた。ペルシヤ人の旅行者らしいのが一團、同じ釜の中で喘いでゐたのである。黒い衣服をつけた女が二人、子供たちと老人が一人だつた。たうとう、その老人が勇氣を奮ひ起して、我々との間を隔てゝゐた火焰のやうな見えない壁をつきぬけて近づいた。病身らしく痩せ細つてゐる。

ところが、此の病身らしい痩せた老人が、實は大した旅行家だつた。「わしが冬に此處を通つたときは、どこもかしこも氷と雪ばかりでしてな……」などと話すのである。バグダッドに近いケルベラへの巡禮から歸る途中だと云つてゐた。此の旅行で九十トオマン使つたとも、殘金五トオマンでケルマンまで行くのだとも、また、ケルベラへ巡禮したのはこれで三度目だとも、間はす語りに

話すのであつた。

ではメシエドへはまだ一度も行かなかつたのか、と私が不審の眼を向ける。

『七遍も行きましたさ』——ケルマンからだ二十五日の旅程である。最初ロオヴァに出てそれからデシユチルウトを行く。して見ると此の老人は既に往復で十四回も此の恐ろしい荒地のデシユチルウトを通つてゐるわけだ。研究家がこれだけ歩いたら、さぞ澤山の書物が書けることであらう。老人たちの一行は直きに出發した。熱くなつた衣服にくるまつて婦人たちは馬で、子供が一人鞍の前に抱き上げられる。別の驢馬に湯沸しや錫器の諸道具がぶら下つた。老人だけは徒歩である。

さて私の方の出發は四時と確定してゐた。然し前途に山道の難路があることを思ふと、もう少し早く出發せねばなるまい。せめて日没前には、そこを突破しておく必要がある。それに、南へ行く我々に取つてこれが最後の山路だつたし例の匪賊が砂糖を積んだ隊商を襲撃したのも其處だつた。だが、四時近くなつても誰一人支度にかゝりさうもない。そこへ、隊商組の者が慌てふためいてかけつけ、バシ老人がすらかつたといふ。

『驢馬を五頭に俺どもの現金をみんな持つて行きましたんで、旦那。』

不安らしく、彼等は指さきを天に向けてつきたててゐる。仲間割れをやつたので、彼等が眠つてゐる間にバシ老人は姿をくましましたのであるといふ。私は極力彼等をおちつかせることに努めた。

あの律義者の老人が搔拂ひをやるなんて有り得ぬ話だ。

果して一時間もたつとバシ老人は戻つてきた。驢馬に草を食べさせに行つたのである。私は直ちに出發準備を命じた。

岩山の隘路が高く険しい。こんな難所を夜間に騎行することは不可能だ。必らず骨折こつせつかなにかをやるがおちである。先頭の兵隊は、銃に装填していつでも射撃できるやうに鞍の上で構へてゐる。上の隘路では、狭い峠路が、これも狭い洞穴の迷路をくゞつてゐる。積荷に重い脚を一步一步と、驢馬たちがその中に吸ひこまれて行く。實際、襲撃するにはもつてこいの場所だ。我々はまつたく袋の中の鼠も同然なのである。此の迷宮の如き隘路をくぐりぬけたとき、私は本當にほつとした。續いて不氣味な徑こみちが、千仞の懸崖に沿つて下へ下へと通じてゐる。だがいよいよその場に行つて見ると、豫期した程に不安ではない。此の峠路の隘路は、ケルマンからバンデルアバス間の最大の難所とされてゐるのだが、これも大して苦勞もせず克服することが出来た。

きり立つたやうな岩壁、一軒の家具ほどの花崗岩、急轉直下する溪流の険しい川床。——大分暗くなつて来るにつれて、驢馬の蹄の、廣い谷底の石塊いしくれに躓づく音が殖えて来る。

ちやうど眞夜中頃だつた、我々はやはりさういふ石塊ばかりの谷底で一旦休憩した。二時間位も休んだのだが、お茶もなかつた。木炭も薪まきも石油もないのである。料理番のハヂは全部費消しつゝしてゐたのだ。

コシユクウといふ比較的大きな部落があるが、そこへ行くには、今の隘路を馬で行つて二日半か

かる。尤も都合によつては、絶壁の間をうね／＼と漕しもなく走つてゐる溪流の石塊道いしくれを迎れば、二晩位で行かれないこともない。但し、道は進むに従つて悪くなる。死んだ動物の骸骨が轉つてゐるから間違へる心配のない通路だ。——

夜間騎行第一夜は明けて、難路を乗り越え乗り越え、木蔭ひとつない炎熱下に行くこと數時間、漸くアゼルクウの隊商驛につく。これはタニアイタンクといふ別名もある部落だ。

貧弱な椰子の葉で葺いた小屋が一軒二軒あり、その上にペルシヤの旗が翻つてゐる。兵隊が三人住んでゐる。彼等の任務は、警衛地區の安全を保障することだ。三人とも、神に見放されたやうな此の山中に駐屯してからまる一年に近いと云ふ。が、三人が三人とも現在の境遇に満足してゐる。甘い水があるからだつた。つひ近くの岩壁から小さな瀧が落ちてゐるのである。

我々はさつそく、開放された地下室へ這ひこんだ。殺人的の日光を避けるためである。輕卒な人があつて、たとひ三分間でも頭をまる出して此の炎天下に曝したら、多分九死一生の目に會ふこと請合うりあひひだ。我々はとにかく日蔭にはひることが出来たわけだが、正午近くなると熱い風が吹き込んで来た。まるで火焰のやうな風である。此の風は南方から吹きつけて来るやつで、アラビヤの沙漠とペルシヤの沿岸はこいつのために灼熱状態になるのだ。風は完全に乾ききつてゐるから、濡れた手拭ひなどを頭や頸に捲いてゐないと、とても耐へられるものでない。眼下の溪流の川床なぞまるで熔けた鉛のやうである。たゞギラギラとどぎつく反射して何一つ見分けもつかない状態だ。灼け

きつた砂粒が空中に充滿して飛び立ち、やがて赤錆色の砂煙とかたまつて向うの山々へ吸ひ込まれて行く。そのまん中に日輪が、小さな銀盤のやうに光つてゐる。こんな時には、平気で日輪を眺めることが出来る。地獄の釜から吹上げるやうな此の風が夕方まで續いた。人間も動物もなんにも見えない。みなどこかへ這ひ込んでしまつたのである。

やつと夜になつた。月光ときらめく星光を浴びて、此の山中の寒驛は生命を吹きかへす。ハヂが鐘の底を叩いて茶を淹れ、小羊を一頭焼き、兵隊や隊商組にも御馳走した。賑かな談笑が夜半頃までも續く。

アブセルクウからコシクウへ行く通路もやはり安全ではないやうだ。最近しきりに、怪しげな匪賊との小衝突が頻發するといふ。山中から出て来る匪賊で、つい一昨日も、此處の兵隊が追剽を一人見つけて射殺したさうである。だから兵隊も安心してはゐられない。いつ何處から彼等の報復をうけるか分らないのだ。何んと云つても此のお粗末な驛の建物を襲撃するのが、匪賊にとつては一番容易な報復手段であらう。今夜にも、三人の兵は勿論、私の荷物を引受けてゐる隊商組も従僕たちも私も、あつといふ間に寝首を搔かれるか知れたものぢやない。

その夜、驢馬が一頭、我々が遣ひこんだ箆の上の床板を踏みぬいて大騒ぎになつたが、倅ひ我々は星空の下で眠つてゐたので、怪我人はなかつた。騒ぎが済むと直きに、今度は私の乗用の驢馬が天幕へ忍び込んできた。私のポケットに在るパンを食はうとしたのである。ちやうど三時頃、私が従

僕たちを起しにかゝつた時である。私は此上もない亂暴な手段をとらざるを得なかつた。先づ料理番のハヂだ。彼は三時間もぶつづけに喋つた癖に、まるで打倒を食つた拳闘選手のやうにだらしなく、いく度突とばしてもまただらりと倒れてしまふ。モハメット・アリには革袋の水をありつたけぶつかけてやつた。一番手数のかゝらなかつたのはシャリルだ。これはアラビヤ人の運轉手で私と一緒にインドまで行く氣である男である。水位では反應があるまいと思つて、耳元に口をつけて、警官がお前を調べに來たぞと呶鳴つてやつた。この計略はてき面、一瞬の間に此の男は現實の世界へ飛返つたのである。

月はとうに沈んでゐた。星も蒼ざめた。我々は暗い夜氣の中をそろそろと溪流の川床へ降つた。兵隊が二人、私の意思にはとん著なくついてきてくれた。もう一人の兵隊は既に大分前から、斥候として馬を飛ばして行つてゐた。かういふ通路の驛といふ驛の兵隊には、ブルスマデの本部から指令が飛んで、私の旅程をコシクウまでは、いかなる條件の下にも安全ならしめるやうに、と厳命されたのである。イランの山中で歐羅巴人が追剽に襲はれたとなつたら、世界は何んと云ふであらうか。新聞といふ新聞が筆を揃へてペルシヤの國道の不安を大聲に罵るに相違なからう。然も、その歐羅巴自身が、イランに於ける一年分の盜難や殺人事件よりも遙かに多い犯罪の記録を一日の中に持つてゐるのだ、と思ふと、私は苦笑せざるを得なかつたのである。

次第に明るくなつてきた。兵隊たちは、頻りに岩蔭や物の蔭を警戒してゐる。見てゐると、ちよつとした砂丘でも、先づその蔭から人間の飛出せる餘地なり、氣配なりの有無を確かめた後でないと、決してそれを乗り越えない。この緊張した空氣は、隊商組の方にも明かに傳染してゐた。みんなひどく性急になつて足を早めるから、我々の方から急がせる必要はまるでなくなつてしまつた。私自身も、實は今日に限つて拳銃へ装填をしてゐる。

黙つて、あたりを絶えず窺ひながら、幾時間か行進を續けた。もうすつかり明るくなり、例の如く日光が容赦なく石塊道を灼きつける。と、だしぬけに一發鳴つた。驢馬の耳が一齊にきつと立ち隊商組は狼狽してウロウロと走り廻る。少年アリは鞍の上で居眠りをやつてゐたが、跳り上つた驢馬の背からふり落された。さてはいよいよ匪賊かな、と私も肚をきめた。が、先發した斥候兵の信號の發射だつた。向うの山の突端に立つてゐる彼の姿が、小さく高く見える。其の突端は絶好の監視場で、噂にのぼつた曲折地點が一瞬に見渡されるのだつた。二つの尾根が双方から峽谷の上へせり出してゐる地點である。追剥ぎの姿は、視界のどこにも影も見えないといふ合圖の一發だつたのである。

ニアム村の亭々と茂つた椰子林の中から、三人の騎乗兵が駆足で我々の方へ進んで來た。コシユクウの駐屯兵だ。我々を出迎へるやうにといふ指令を受けたのだといふ。

ニアムには三組の驢馬隊商や騾馬隊商が休んでゐる。一つに結束して共同協力の力で物騒な山越

しをやらうといふのだつた。彼等は、我々が此の通り元氣で何一つ傷害を蒙らずに、噂の高い匪賊の出沒する地帯を通行して來たと聞いてひどく驚嘆してゐる。實際に、此の部落の中でさへ武装した農民義勇兵の物々しい姿が見受けられたのである。とにかく、此の附近の山々の空氣には何かあはたゞしい氣配が漲つてゐることは争へない。

セエリシルの地獄谷から、遙々百キロ米の難路を此處まで護衛してくれた前の兵士たちは、我々に挨拶してから再び馬首を廻した。今度は前に云つた三組一團となつた大隊商と一緒に、同じ難路を逆戻りするのである。

亭々と中空に聳える椰子林と水道の水のうまさ^に心を誘はれながら、此のニアムに一泊しなかつたのは私の失敗だつたかも知れない。だが目標のコシユクウがひどく近いやうに見えたり、出来るなら、今日の夕方までにタハトまで進んで置きたい、といふ希望の方が強かつたのである。

新しい手拭ひを頭から頬かぶりにして我々も先きを急いだ。私は、今度は氈帽子を水に浸して頭に載せることにした。

路は二時間行程ばかりも長く、ニアムの椰子林に並行してゐる。此邊まで來るとまつたく底の乾上つた川が、石塊の川床をやけにギラつかせる。その上を這ふやうに進む驢馬の足も重い。もうかうなると、行進はおそくとも朝の七時頃までに切上げる必要があらう。これが最後のコオスだと思つても、その幾キロ米を突破するのが死身の苦行だつた。コシユクウの最初の樹蔭を踏んだ時は、

驢馬も人も文字どほりクタクタになつてゐた。

例によつて部落の庭園内にキャンプの支度をする。庭内に唯一の緑蔭を投げてゐる大きな叢林の下である。此の叢林を中心にして、云はゞ日光と鬼ごつこをしてゐたわけだ。日射しの移動につれて、それだけ我々も移動してつねに叢林の投げる影の範圍から離れまいとしたのである。椰子園の中では栗色にやけた少年たちが働いてゐた。短かい腰布と頭巾きりの素裸である。

ハヂが灌木の下に大蜥蜴を一匹見つけて騒いでゐる。丸々と肥つた七十センチ米位の長さの、文字どほり鱒の見本みたいなやつで、肥り過ぎて動くのも退儀らしい。

コシユクウからバンデルアバスまではまだざつと百キロ米もあらうか。此の間の地形は一般に平地が多いから匪賊の出没には不向きである。我々は護衛なしで出發することにした。今朝までの騎行の疲れがまだ残つてゐるのを押して、夕方、再び鞍にまたがつた。

間もなくすつかり夜になる。隊商路はまるで識別もつかないが、驢馬の嗅覺が進路をかぎ出して進む。恐らくは、駱駝隊商の場合にも先頭にはいつも驢馬があるのはかうした理由からかと思ふ。驢馬嫌ひのバシ老人は相變らずのつそりと歩いてゐる。まるで散歩にでも出かけたやうだ。今日までに彼は五百キロ米位徒歩で踏破した勘定である。

廣い川床の石碑道にかゝつて道に迷つたときも、此の老人がちよいと闇の中を嗅ぎ分けるやうな恰好をした後、無造作に正しい通路へ引戻してくれた事があつた。

夜間騎行はとにかく神祕的なことが多い。暑熱も耐へられぬ程ではなし、白日の炎天下には空に舞ひ上つて窒息させる黄塵も、今は穩やかに大地に沈んでゐる。空氣は清くかつ明澄である。靜寂を破るものはただ、後に續く隊商組の積荷のきしむ音と驢馬の蹄の響きとだけだつた。空の眺めがまた素晴らしい。其處には幾多の星群と星雲とが燦然と光彩を競つてゐる。毎夜のやうに我々を迎へて、正しい進路を指示してくれる一際大きい星の描く十字の象形。これが南十字星である。

私の地圖がまたちよつと怪しくなつた。精々三時間位の騎行でタハト驛に到着する計算だつたのが、もう夜半近いといふのにまだ相變らず荒野の中である。當然、道を誤まりはしまいかといふ疑念が起る。だがバシ老人だけははつきりと私の疑念を否定した。あと半時間行けばタハトです、と
さう。

それから、實際は一時間かゝつたが、たうとう椰子林の庭に着いた。月はとくに沈み、すつかり暗くなつてゐる。我々騎乗組は、クタクタになつて手近の樹の下に轉がつた。勿論、幾時間かの中間休憩はあつたが、今日は十三時間も驢馬に乗りつゞけたのだ。

熱帯地の朝は早い。假睡む暇もなく、顔が熱くなつて眼が覺めた。もう太陽が顔を出してゐるのだ。起き上つて見てびつくりした。まるで天上の樂園のやうな椰子園の中にごろ寝してゐたのである。手入れの届いた棗椰子が幾百本となく聳えてゐる。その實はもう榛の實位になつてゐた。若木の椰子が投げてゐる新鮮な蔭、その蔭の投げられる地面は、おゝ何といふ奇蹟だ、ふつくらと軟か

な芝生ではないか。あの石をも灼く炎熱によくぞ耐へたものだと思ふ。小川が一條、快活に流れてゐる。此の庭も、あらゆる椰子園と同様四つに區劃されて交互に灌水されるやうになつてゐる。綠地タハトの最大の長所は水だ。粘土の水口に首まで浸つて一時間もゐると、身の熱が去つて甦へつたやうである。靜かなことも天國的だ。人も驢馬もひっそりと眠りつゞけ、鳩が一羽二羽のどを鳴らし、鸚鵡に似た綠青色の鳥が一羽、椰子の梢にちつと翼を収めてゐる。誰も見る人もない。我々だけが、しかく單純に此の樂園を占領してゐるのだ。

我々の樂園はたゞ暑いことが缺點だつた。ハヂの顔の上に細い汗の川が間斷なしに流れてゐる。まるで、かぶつたペルシャ帽の下に氷の塊でもあつて溶けだしてゐるやうだ。

隊商組の誰彼が私の方へ出て来て南方の平地の熱いことを滾しはじめた。『旦那、俺ら寒國の者なんでして、バンドルアバスへ行つたら三日と経たぬうちに生命がありますめい。それに驢馬どもも、もう一日二日歩かせたら參つちまふと思ふんで……』

私は慰留にとめた。バンドルアバスは海岸であるからいつも涼しい微風が吹いてゐることを説明してきかせた。それから、彼等の中の青年の一人が熱つぼい眼をし、燃えるやうに熱い手をしてゐるのを發見したので、さつそく解熱とキニイネを與へ、バンドルアバスまでの今後の行路は驢馬に騎乗させることを約束する。

タハトの此の椰子園の暑氣は、樹蔭で十一時に四十度、十二時には四十三度もあつた。午後の一

時頃になると南の熱風が吹いてきて水銀柱は一舉に四十六度までかけ昇り、熱風が収まつた三時頃には再び四十三度まで沈降した。

だが、椰子園の外は、チカチカと光る白焰のやうな、塵埃と熱氣とを伴なつた水蒸氣の壁が、まるで盲鏡のやうにひろがつてゐる。かういふ蒸籠のやうな空氣の中へ、戯れにでも頭を突込んだら大變である。

夕方六時、氣温は三十六度まで降つた。まだ十分暑い、思ひきつて舞ひとぶ塵煙の中に驢馬を進める。のろのろと椰子園の樂園を縫うて出發すると間もなく、例の蝗軍がしきりに身邊を掠めて群集する。こいつが至る處の畑や野原を丸坊主にしてしまふために、此邊では驢馬や駱駝の飼糧がひどく高價なのだ。再び身邊に迫る夜色、曠野——そして今宵もあの莊嚴な空の行進曲を奏でてくれる南十字星。

今夜は二度も灯を見た。ペルシャの荒野ではめつたにない現象である。

夜半頃、カラカチ村につく。月光の下で見る此の綠地は、よく手入の届いた公園のやうである。豺の二重唱三重唱が我々の到着を迎へてゐる。彼等の聲は心の傷みを訴へる歌である。呪はれた獸よ、いつまで小止みのない荒野の漂泊をつゞけるぞ。野犬が一匹、私の驢馬を驚ろかせた、お蔭でひどい落馬をやり一日中痛みが去らない。隊商組の連中と土地の農民との間に紛紜が起る。原因は彼等が飼糧節約の意思から驢馬たちを勝手に指甲花や煙草の栽培畑に放牧したことにある。栽培場

は村管だつた。私は若干の酒代のみしろを提供して激昂する農民たちを慰留した。此の村全體が或る回教徒モスリムの旦那のものだといふ。その家は、月光の下に私が發見し得た唯一軒の家だつたが、今頃彼は、旦那の敬稱にふさはしい安らかな眠りを眠つてゐることであらう。起きて文句をつけに來たのはその作男なのである。

カラカチ村の通路は廣かつた。月の光で見ると素晴らしい敷石道のやうである。だが本當は道路でなく、やはり水の乾上つた川床の石塊道いしころだつた。此の石塊道の上で、一時間ばかり小休止。――

黎明の曙光と共に到着したボグウの椰子林のみぢめさ、前の私を恍惚とさせたタハトの椰子園とは雲泥の相違だ。埃りつぽく、日射しが強く、その樹蔭を求めぬのに苦しんだのである。糞食ひ甲蟲がウヨウヨゐる。見る間にピッピッと馬糞を轉がして廻る。かういふ牛馬の糞は時に鷲鳥位の大ささになるが、それを、何十分の一にも足りぬ小つぽけな甲蟲が輸送する様子はなかなか面白い。云はゞ我々の驢馬なども此の小さな働き者にとつては天の恩寵かも知れない。

貧弱な緑地ボグウで、我々のすぐ横に天幕をはつた四人の青年があつた。荷物は驢馬二頭に積んでゐる。ケルマンの裁縫職人ださうだ。寒い季節にはバンデルアバスで仕事をやり、今のやうな暑い季節になるとまた故郷へ引揚げるのだといふ。此の仕立屋たちが、バンデルアバスは此處のボグウほど暑くはないと言明してくれたお蔭で、前日苦情を持たした隊商組もまた元氣が出たらしい。

いよいよ今夜が、夜間騎行の最後である。明朝はやくバンデルアバスに入城の豫定だ。渺々と

白い月光の下に展開する風景は、まるで冬景色のやうである。まつ黒ないぢけた灌木林が頭を擡げてゐる。こんなに深々と積つたそして軟かい雪といふものがあるだらうか。おまけに顔中汗が瀧のやうに流れてゐる。暑氣はもう乾燥性でなくなり、大分濕氣を帯びてきて顔も兩腕もまるでもちのやうにベタついてゐる。

次第に、眼がほんのりと黄ばんだ月の光になれてきた。雪景色と見たのが今度は黄色くなる。ちやうど塵を浴びた雪だ。さうして最後に、雪でもなんでもないたゞの砂だといふ正體が暴露した。柳の立木、骸骨のやうな灌木、幽靈に似た茨、それ等の奇怪な影が、一切の生命を呪ふやうに砂丘の上に並んでゐる。どつちを見ても典型的な沙漠情緒だ。隊商路は吹き浚はれてゐるから、私の利口な驢馬が全能力を發揮して通路の發見に忙しい。

隊商組の進行が一段と緩ゆるくなつた。太鼓うちも疲れたであらう。(太鼓打ちとは、隊商の積荷やそれを曳く馬や駱駝の蹄の音をさす綽名であることは最初に書き添へたが、念のため此處に再録する)今や、身心ともに疲労の極だつた。少年のアリは性懲りもなく驢馬の背で眠つてゐる。みんな、驢馬の背にうつ伏しになり、手足をだらんと落して眠りこけたまゝ、驢馬の曳すり足に身も心も委せきつてゐる。ぢきに、驢馬嫌ひのハヂまでがやはり鞍の上で眠りこけてゐるのを發見した。アラビヤ人のシヤリルがゐない。彼には重い銀貨を入れた袋を二つ託しておいたのである。肝腎の金庫が紛失しては困るのでさつそく捜して見ると、通路からは大分離れた沙漠の中で見つかつた。彼がまるで死ん

だやうに正體を失つてゐるうちに、驢馬が自分勝手の道を歩いてこんな砂丘の邊まで迷ひこんだのである。居眠りの罰で、靴が片方紛失してゐた。かうなるともう、隊商組の方にも落伍者が續出する。誰か知らん見えないと思ふと、ずつと後方の砂の上に無造作に轉つて、一眠りやつてゐるのだ。まあいゝ、もう目標は近いのだから。

正直なところ、私自身さへ眼をあけてゐるのが辛かつたのである。時々、ほんの何秒か鞍の上でウトウトとする。そしてその度にはつと氣がついて眼を睜^{みは}る。このはつと我に返るときは、決して驢馬が後戻りしてゐるやうな氣がするから妙だつた。疲勞過剰は、あらゆる五官の印象を夢現の境に上昇させるもので、現に私なぞ、突然に強烈なオルガンの音を聞いたと思つて眼を覺ますと、それが例の糞食ひ甲蟲の夜氣をきる羽音だつた、といふやうな體驗をもつてゐる。そのほか、巡禮者たちの唱へる餘韻^{リツナツ}々々の嘆願^{ツツ}祈禱^モを聞いたと直感して氣がついた場合も幾度かある。かういふ沙漠や荒野の中では、灌木や石塊までが不意に私の方へ動き出したり、更に驚ろくべき錯覺としては、それが私の傍を通り過ぎたりするのを感じるのだ。幽靈の如く現はれて幽靈の如く消えて行く驢馬隊商の一行を夢幻の裡に見たおぼえも、今だにはつきりと残つてゐる。

いよいよ夜の帳が目前に引きさけて、森影が一つ浮んで來た。夢でなくこれは現實に、大きな駱駝隊商の一團が、闇の中からすうつと現れて、顔も長い頸も、積荷もはつきりと識別出來ぬうちに消え去つた。まつ白なシャツのやうな形のものが、尙ほも夜の明けるのを防がうとする闇雲の背後

ではためく。

と、だしぬけに今度は、巨大な焰がパンと荒野にあがり、私の方へ吹きつけた。はつとして驢馬を止めると、とたんにその火は消え、再び元のやうにキラ／＼始める。分つた、あれがペルシヤ灣の燈臺だつた。私は、カスピ海で見た最後の日の印象をまさ／＼と思ひ起したのである。

鈴の音がしきりに響く。駱駝のうすぐらい巨體が、私の後方の驢馬隊商組の縦列に割込んできたので、大變な混雜になつた。私は、驢馬の背中で眠りこけてゐる従僕たちの危険をはかつて、一時此邊で休憩することに決めた。

バンデルアバス

既に東の空が白んでゐた。夜營の天幕はまだぐつすり眠つてゐる。人も驢馬も此まゝ曳ずり去られても氣がつくまい。軽い微風がほのかに漂よふ。何か新鮮な胸のときめく感じた。さうだ、これは海の匂ひだ、潮の香だつた。朝日が昇つたとき、海は貝殻を展^{ひら}げたやうに、澄明な碧一色に目に前に静まつてゐた。そして彼處に燃える石の層積のやうなのが、バンデルアバスの都だつた。

私は、大きな南瓜^{かぼちゃ}のごとき頭をした人間がぞろ／＼と、私のゐる椰子林の方へ歩いて來るのを見たとき、まだ夢を見てゐるのかな、と自ら疑つた。がそれは婦人たちだつた。ひらひらと翻へる長

袖の寛衣が、何か頻りにゴチック風の服飾を偲ばせる。せかせかと女達は裸の足を急がせてゐる。ふくら脛には編んだ脚絆を捲いてゐる。南瓜頭と見たのは、大きな丸形の素焼の水甕にほかならなかつた。私は驢馬の背に半身を押しつけるやうにした。女達の顔を覗きたかつたのである。まるで妖怪だ。これは黒ペンキを塗つた假面以外の何物でもない。假面の鼻筋は額から上唇まで通つてをり生氣のない弱々しい齒列が醜い假面の上に飛出してゐる。此の顔には、生きてゐるものと云つたら割目の穴から覗いてゐる二つの眼玉以外に何物もない。ケルマンの婦人が白い麻布を捲きつけてゐる光景を幽霊のやうだとすれば、このバンデルアバスの婦人たちの容子は見るからに不氣味な死靈であらう。これ以上に醜怪な變貌は、人間の空想では考へ出せないに違ひない。

此の都會の警察署長が紹介してくれた宿舎は、海岸の商店風の空家だつた。所有主の商人は拜火教で、快よく私に提供してくれた。建物はやゝ荒れてゐるが、通風のよいのが何よりである。はるばる此處まで私の荷物を輸送してくれた隊商組の人々に約束の給料を支拂つてゐるとき、家が急に動揺し始めた。まるでゴムの家のやうに伸びたりちぢんだりするのである。隊商組の連中は狼狽して床につくばつた。私も真相が分らないのでハヂの方へ眼配せする。ハヂは笑ひながら私を制するやうにして、ほんの一分間位の辛抱ですよと云つた。が、二三秒たつと復びぐらぐらと來た。たしかに地震だ。だが、どんな精巧な測震計でも我々の此の時の心の動揺を記録し得る筈はあるまい。バンデルアバスとは、燃ゆる爐の意味だが、此の都の創設者はアバス王だつた。王はインド在住

のポルトガル人を呼び寄せて此處に要塞を築造させたのである。要塞は今日すでに見るを得ないしポルトガル人も消え去つたが、都會だけは創設者の名を永久に維持してゐる。バンデルアバスは現在約十五萬の住民を數へるが、みな強度の混血種だ。アラビア系の混在は明白に察知されるが、その上に黒人種の血の混つてゐることも掩ひ難い。今日でもまだ、海賊や奴隸周旋業人の乗用船だつた重いジャンクを海岸に見かけるが、これはつい近代まで此邊一帶の海岸を根據地としてゐたものである。例の人肉の賣買取引も、此のペルシャ灣が一番盛んな市場だつたことは疑ひの餘地がないのだ。

ブシル、モハンマラと共にバンデルアバスは今日、ペルシャ南方の最も重要な港の一つである。船舶の出入も比較的頻繁だ。ケルマン縣の輸出入は大部分此の港を経由してゐる。市内の商品市場街は廣大な建物で、いつも暑熱と塵埃と凡ゆる物の臭氣に満ちてゐるが、建築そのものはいたつて單純である。屋根は椰子の葉の葉筋で葺かれ、日光は、ピカピカした匕首や刀劍の陳列棚の掩ひの上まで直射する。傍では一寸した空地の上で、モオタアが朝早くから夕方までガタピシと動いてゐる。これは製氷工場だ。こんな小さな製氷工場でも、これがまだ無かつた時代には此の都の市民はどうして此の暑熱を凌いだらうか、ちよつと想像に苦しまざるを得ない。といふのは、イスファハーン、エスド、ケルマン等々の都會のやうに、氷を山から取出して來るといふわけにも行かなかつたし、あの完全な日よけの圓蓋の下に貯蔵することも考へられなかつたのである。

ベンデルアバスは、云はゞ永遠に渴ける都だつた。エスドやケルマン等に見られた如き立派な庭園は一つもないし、たゞ僅かな椰子樹その他の植物の貧弱な林が、狭い禿土に立つてゐるばかりである。都會の郊外に古い井戸の一行が並び、その上の圓蓋ばかりが、恰かも崩落した寺院の圓頂のやうに突出してゐる。云はゞ此の井戸は豫備の水で、雨水をその中へ貯へて置くのである。だがなか／＼雨は降らない。殆んど降雨を見ないから、井戸はたいてい空虚だ。水は、かつきり一里餘も離れた地點の穴から汲んで来る。日がな一日、朝から晩まで、男も女も群がり合つてその穴の水を素焼きの甕や獸皮の袋などで運搬するのである。市場街の直ぐ傍に小さな店があつて、此處では水だけを賣つてゐる。ちやうど野菜やメロンなどを賣るやうに水を賣るのである。此處に前云つた黒い假面の死靈のやうな女達が澤山踊まつてゐるのだ。初めて見た者は顔色を變へて逃げだしさうな光景である。獸皮袋一杯の水の値段が、獨逸貨にすると十五ペンニヒから二十ペンニヒ。生ぬるい鹽つばいスウプのやうな水である。

ベンデルアバスの存在は海のお蔭だ。海がなかつたらとてもやつて行けない都である。とうの昔に太陽が天の刑罰の如き熱風を煽りつけて此の都を灰燼にしてしまつたに相違ない。それを救つてゐるのが海だつた。浪はやさしく、市民の家々の間近まで打ち寄せ、渚は蜿蜒數哩にわたつて展げ歐羅巴のいかなる國々にも見ないほどの、素晴らしい海岸風景を誇らしめてゐる。だが都會の人は誰も泳がぬ。子供たちと犬位なものだ。犬は、日光に焦げた毛皮を冷やすために時々海へ躍り入る

のである。さうして此の長い長い海岸全體が、市内への主要道路を兼ねてゐるのだ。郊外の村落へ行くにも水汲みに行くにも、みなこの波に洗はれた渚づたいに行く。いふまでもなく、乾ききつた砂の上ではとても、どんな厚い蹠の者だつて素足では歩けないからである。と云つて、靴を穿いたら尙さら熱くてたまらないのだ。

渚の上には、間斷なしに、水汲み、野菜賣、メロン屋、驢馬に駱駝の隊商、等々が晝も夜も行つたり來たりしてゐる。時にはまた、まつ黒にやけた肌をした人々が、頭を布にくるんで日射しをさけつゝ、競争駱駝の高い背に跨つて疾風の如く飛んで行くのを見ることがある。

眞 珠 漁

ベンデルアバスからさつと二百キロ米も離れたやはりペルシャ灣に沿つた都會で、リンジェといふのがあり、これがペルシャ名物の眞珠漁りの中心地だとかねがね教へられてゐた。ところが今度リンジェへ來て見ると、附近一帶の漁場はもう永いこと利益がないといふ理由で閉鎖し、名物の眞珠漁りの舟も悉く對岸のアラビヤ側へ行つてしまつたことを知つたのである。

折よくペアレン島へ行くイギリス船に間に合つたので、急いで乗船の手續きをした。此の島はペルシャ灣きつての漁場として有名なのである。前甲板や後甲板はをろか、貨物を積んで置く場所まで

も、船客でいつばいだつた。身動きもならぬ満員である。どちらを向いても、椰子の繊維で編んだ
筵、暖簾、派手な色の麻布などがいるとりどりに日よけの代りに張り渡してある。客の着衣も、
美しい流行色の派手なのからひどいぼろを纏つてゐるのまで、これまた實に區々だ。皮膚の色から
云つても、琥珀の黄色から黒鉛の黒さにいたるまでの各段階が集まつてゐる。美貌で華奢で、少女
のやうにやさしく空想的な青年だの、反對に黒豹かなんかを人間にしたやうな、がつちりした青年
だの、鬘のやうに肩まで頭髮をたらしめてゐる回教坊主、さては黒焼の骸骨の如く瘦せ細つた托鉢僧
等々、これの乗客が例外なしに、實は潜水夫となりその助手として荒稼ぎをやり、アラビヤ沿岸
の眞珠漁へ出かけるのである。つまり、待望の眞珠漁季節が始まつたところだつたのだ。

一等船客を收容する船室の方も全部賣りきれだつた。印度人、拜火教信徒、アラビヤ人、ペルシ
ヤ人等が思ひ思ひの服装で上甲板を歩き廻つてゐる。赤と白のだんだら染めの頸巻きをしてゐるア
ラビヤ人は、ボムベイ、バアレン、バスラ等から來た眞珠商である。やはり行先地はアラビヤの沿
岸だ。かくして待望の季節が來たのである。

汽笛がボウボウと鳴りわたる。アラビヤ沿岸のダベイ港だ。港町は暑さの中に沸き返つてゐる。
小さつぱりした二階家、別荘、規模の小さい御殿のやうな邸宅、美しい庭。時代に置去られただ
つ、廣い建物が一つ、ロオマの半圓形劇場にちよいと似てゐる。海岸の硫黄色の砂濱に椰子林がある。
サルタンの秘書官が甲板に出て來た。特別のおめかしをした雄鶏のやうに傲然と上甲板を歩いてゐ

る。絹布の栗色の頭巾を巻き、素絹に銀の刺繡をしたマントを頸の邊でひっかけ、美しい彫刻のあ
る弓形の短剣をさげてゐた。いかなる歐羅巴人もダベイに足を踏入れることは許されない、此の禁
を犯す者の生命は、サルタンは保證しないと云ふ。サルタンはヤソ教の宣教師さへ入國を許すまい
とした歐羅巴嫌ひだつた。

だが、サルタンの意思には頓着なく、ダベイの入江には大小幾多の帆船が群がつてゐる。眞珠漁
だ。待望の季節が、いまダベイの港に訪れたのである。大きな舟艇に乗りこむ潜水夫は四人、時に
はもう少し多いこともある。バアレン島の方ではもつと大型の船を使ひ、潜水夫も三十名位乗るさ
うだが、このやうに小さなボートだと一人か二人位の方が活動し易いのである。さういふボート
が何百艘ともなく、輝やく海の上に亂舞しながら、同じ業務にいそしんでゐる。あちらでもこちら
でも、綱がたぐられ、錨が投げられる。ボートの舷側に近く、潜水夫の頭がぼつかり浮出す。と思
ふと再び水面の上へかくれてしまふ。ごく稀には、舷に躍り上つて休息する潜水夫も見えた。

變つた職業だと思つた。潜水夫の武裝の第一は強い肺臓、次に鼻鉗、錘石、小さな綱、それに綱が
二本とこれだけである。海底へ沈むに當つては先づ鼻鉗で鼻孔を密閉する。石または鉛の錘を一方
の足の拇指にかけ、他方の拇指には小さな綱をさげる。これでいきなり海へはひるのだ。がやゝ暫
らくすると綱が一本グいと張つて來るがこれは潜水夫が浮上つて來るのではなく、沈降の重量のせ
みである。本人はまだまだ海底にゐるのだ。最後に此の綱の合圖があり、ボート上の助手は、急い

で綱をたぐりこむ。綱の端は潜水夫の身體に結へつけてあるのである。やがて大きな魚類のやうに潜水夫の肉體が浮び上つて来る。助手は、潜水夫の綱を受取り、中の眞珠貝をザラッと艇内へあける。大抵、六個から十個位の間だ。一方、その間に潜水夫はガッガッと唾を吐き、鼻鉗を外して鼻孔を一旦復舊する。が、直ぐにまた錘石と沈んで行くのである。木製の鼻鉗をつけた顔は、誰が見ても噴飯したくなる位滑稽な珍妙なものである。

完全に三分間は潜水してゐる男があるといふ。眞珠貝の棲む暗礁は、八米から十米内外の深みにある。

『で、鮫なんかは？』と、私は、バアレン島きつての眞珠漁の名人と云はれる青年に訊いてみた。素晴らしい痘痕と黄色の虎眼を持つた逞ましい男である。つい最近、濠洲の勤務先から歸つてきたばかりださうだ。

『鮫は來ますよ、だから來たなと見たらすぐ引上げの合圖をするんです。何しろ海の中は明るいからね。それに大抵の潜水夫はよくきれるナイフを指にぶらさげてますからね、いよいよとなりやナイフで突くし、あつちへ遁げこつちへ遁げしながら足で蹴飛ばしてゐるうちに、ぢきに水面へ浮んぢまひまさらあ！』

『君たちの仲間で、不幸な目に遭つた人が多いだらうね？』

『いんや、たまアに一人位なもんでさ。』

『これは他で聞いたんだが、潜水夫はたいして赤い布を身につけて行つて、鮫が見えたらそいつを投げるさうぢやないか？』

青年名人は愉快さうに哄笑して首を振つた。が、私は質問を次に進めた。

『何年位、此の商賣はやれるね？』

『中には十歳の時から始めて五十歳までやり續けてるつてのもありますよ。』

夕方になると、船もボオトも一齊に港へ引上げて来る。貝殻むきが始まるのである。ナイフでこぢあけ、中央からきり離す。といふと簡単だが、これもなか／＼貝の抵抗があるのだ。眞珠貝だつて手強い。蓋を固くしめてまるで相手にならないのもあるといふ。眞珠漁の季節の景氣は大したものである。眞珠商人や企業家たちの代理人が、酒代は別にいくらでも奮發するからなぞと、豫言の賣卜者などを拜み仕すのもこの季節だ。――

さて採取した貝が全部割かれる。中には一つの貝で六個も七個も眞珠のはひつてゐるのがある。ひどく光りが強く、眩しいやうなものもある。之等の眞珠は箱に納めて、毎日不寝番がつけられる。或るボオトが特に大漁だつたとすると、そのボオトに大漁を表徴する特殊の旗が掲揚されるので、仲買人どもがまるで鮫の群るやうにそのボオトへ蟻集するのである。

潜水夫は早朝から日の暮れるまでもぐり續けるものだが、少し怠けが重なると、仲買人どもは彼が精を出さずならぬやうに仕向ける。潜水稼ぎ中は、潜水夫は一日に二度一碗のコオヒイと

三個乃至四個の棗椰子の實をとる。これが不文律の原則で、これ以上は食べない。胃腑をなるべく空虚にして置く方が仕事の能率は上るのである。夕方、陸に上つてからでも一握りほどの米飯を食べるだけだ。――

彼等の生計はいつさい企業家の手で賄ふ。必要に應じては、次ぎの漁季が来るまでの生活費を前貸しすることもある。船やボートやその他一切の経費は企業家の資本で賄はれる代り、一漁季ごとにあがつた利益の二割は企業家の懐中に流れこむ。勿論その他にも、前貸の金とか、利子とか、食物の立替金とかいふものがさし引かれる勘定だがかういふ裏面の數字は神様だけが御存じだらう。さういふ一切を差引いた残りを、潜水夫と助手とで分配するが、その割合は三對二である。一人の潜水夫が稼ぐ季節は五月から七月、そのたつた三ヶ月間にさつと百ルビイ（ルビイはインド銀貨で、一ルビイが約六十七錢強にあたる）から三百ルビイ位までの稼ぎ高だ。従つて、前借でもあるとなかなか返還が出来なくなり、同じ主人のために二十年も三十年も潜水稼業をやつてゐるやうな羽目にもなるのである。さうして、一旦契約した以上は、前借を皆済した場合か乃至は別の企業者が現れてそれを引受けてくれる場合以外には、自由の身となれないのである。また従つて、資金をためて船を作つて獨立してやつて行くといふやうな例は、よほどの幸運に恵れない限り出来ない話だつた。反對に、企業家、云ひかへれば資本主の方が零落するなぞといふ例は、更に一層稀なのである。

眞珠取引の祕密をかぎあててゐることは容易でない。私が根掘葉掘すると、そのつどお世辭のいふバ

アレンの眞珠商人の眼つきは曖昧になる。此の商人の服は雪白で美しく輝やき、頭にのせた金の刺繡のある小頭巾の如きにいたつては立派な藝術品だつた。英語がはなはだ流暢である、眞珠漁用の船は二十艘持つてゐる。さうして、ペルシヤ灣の眞珠漁業によつて擧げる總所得額は、勿論、アラビヤばかりでなくイギリス及びアメリカ系の資本の手も含んでの話だが、年々約十萬ルビイを下らないといふ。主な市場はボムベイにあり、今年の漁季はよささうですと恵比壽顔で語るのだつた。現に前週も、彼の持船の中の一つの一艘のボートだけで、一週間の間に約三千ルビイの価格のある眞珠をあげたさうだ。こんな話のあと、此のいかにも小資本家らしい眞珠商人は、さあ、神様にお祈りを捧げる時間ですから……と起ちかゝつた。――

見ると、中には數百萬の資本を持つ眞珠商も雜つてゐるといふが、いづれも贅澤な身なりの商人たちばかり大勢、毛氈の上に二列に跪ひざまづいて、西方へ向き額づいてゐる。その限らない敬虔な空気が、おちつき拂つて祈りの文句を誦する容姿は、回教寺院で見た場合と少しも異なるところがない。だが、同じ甲板の別室では、資本家たちの使用人が、一枚の敷物の上に何十人分かの御馳走を並べてゐた。米飯を盛つた皿、七面鳥や牝鶏の肉、小羊のカツレツ、その他さまざま名も知らぬ旨さうな御馳走が並んでゐる。

同じ時、海の底では何百といふ潜水夫が、これ等の商人のために懸命の努力をしてゐたのだ。再び汽笛が鳴る。ペアレンだ。扁平な島の一群が目前に在る。前大戦まで此の島はペルシヤの保

護領だつたが、戦後、まつたく意外にも英領となつた。此の真相については世界中にも知つてゐる人は尠いだらう。

潜水夫もその助手も、大きな掛聲もろとも船の船口からボートへ轉るやうにとび込む。中にはいきなり甲板から海中へとびこむ者もある。一方その間に左舷では、一隻のジャンクに收容された百名ほどの若い女達が乗船し始めてゐる。これは眞珠漁季の間中ベスラへ送られる娼婦たちである。これだけ細心の注意を拂はないと、眞珠商人や企業家たちは、前貸した金額を回収する望みが空しくなるのだ。

バアレン灣には帆船が一船團を成して群つてゐる。これだけの船によつて、一年にどれ位たくさん眞珠がとれるのか。私には一漁季シイブの總採取高は分らないが、然しバアレンの港町に住む或るイギリスの醫師はよく知つてゐたのである。私の間に答へて、彼は卓上に肱を立て、指を一本一本と折つて見せた。まるでピラミッドのやうな収益が、此の一漁季ごとに轉げこむのである。

第二部 赤色ラマの國

ヒマラヤを行く

カシユミヤのガンデルバル村の鈴懸の巨木の下に、土侯パンチュ殿下の天幕が張つてある。(カシユミヤは正しくはジャンムカシユミヤと呼ぶヒマラヤ山地のイギリス屬領國で、二十一萬八千二百九十九平方キロ米の面積と三百三十六萬餘の人口をもち、回教徒とヒンヅウ教徒である。高山と物凄い溪谷とで有名だが、國內産業は、果實、米、山羊の牧畜位のもので極めて原始的である。首府はほゞ中央のスリナガル、人口十七萬三千五百餘。但し、以上の數字は一九三〇年代の記録による)天幕は總計六つ、パンチュ土侯殿下の一行を始めとして、從臣用、召使たちのもの、料理人用まであり此のほかには尙ほ豪華な自動車が三臺ある。警衛の番兵が一人立つてゐる野營地の内部は青々と露を含んだ芝地で、其上に黒熊が一頭轉がつてゐる。土侯殿下が此のガンデルバルから二哩ばかりの山中で得た狩獵の獲物である。普通の成人位の身長のある巨大な熊だが、今は無残に芝生の上に腹這ひ、致命傷らしい頭部の傷口に蠅がたかつてゐる。ちやうど今、獵師の一人が毛皮を剥ぎにかゝつてゐるところだ。

此のガンデルバル村までは首府のスリナガルから貧弱な自動車道路が通じてゐるが、それから先きは、村の直ぐ後の急流ジンド河を渡した吊橋のところで行止りだ。つまり此の急湍をなすジンド大溪流の吊橋から、レエへ、西藏へ、また東トルキスタンへの、千年の古い歴史を持つ通商路が始まるのである。

私が此のガンデルバル村で侏馬を十二頭賃借し、ちやうど荷物の荷拵へにかゝつたとき、山の方からまつ黒な雲がせりだして來た。一雨來るなと思つたとたん、ぴかつとまつ青な光線が我々を抱へこんだ。尋常一様の電光ではない、機銃の掃射のやうな電光の束が、百となく二百となく、數秒の間そこら中にパツパツと燃えたつのだ。これは單なる雷鳴どころの騒ぎでない、息づく際もなく釣瓶うちに爆鳴する無数の電雷が山々を溜伏させて荒れ狂ふのである。その電火が四時間にわたつて我々の周圍を幻惑させ、四時間に及んで天空に咆え狂つた。雨は無論瀧のやうである。

云はゞこれは、射殺された山の息子に送る山神の追悼曲でもあらうか、かゝる壯大な送葬曲の奏せられる中に、熊は相變らず土侯の宿營地の芝生に轉つてゐる。

思へば私は、此の若い土侯殿下にもう一度お目にかゝつてゐた。場所は四千米以上も高いフォツラの峠路、土侯がラダツクの高山で狩獵をされてゐた時である。それからたつた二週間後には、此の二十二歳の青年土侯は居城パンチュに心臟麻痺で急死されたのだ。高山の空氣が彼を殺したとも云へよう。

さて、我々の出發は翌朝となつた。レイまでの旅程は前云つた侏馬で、一般に十四日乃至十六日

かゝると見られる。最初の四日間は、ジンドの溪流に沿つて行く。峡谷は乳色に濁つた雪解の水で氾濫状態だ。晝夜の別なく泡立ち湧き立つて急湍の如く流れる。永いことベルシャの荒野の、忘れ去られたやうな沈黙の中に居た我々にとつて、これはまた餘りにも強烈な對蹠的變化だつた。山路は時折り、雪崩の跡の無残な雪山に登る。摧けた樹立、折れ飛んで四散した枝、何か會體の知れぬ汚穢物。此の雪崩は、積雪が溶け始める前までは何年かの間、一米も深い割目を見せたまゝになつてゐたのだ。或る溪谷に降つた時には、魔の杜のやうな原始林を通つた。熱帯地の如き温氣のむつとすゝる中で、何千何百といふ鳥が一齊に啼き、叫んで、何か我々には分らない言葉で話しかけ、警告してゐるやうに聽えるのだつた。夜は冷たい風が天幕を吹きぬけ山の峰々には新雪が積つてゐる。昨夜などは大きな黒熊が一頭、インド人が一人でキャンプしてゐるお隣りの天幕の附近をうろついてゐた。狼狽しきつた犬の悲鳴に眼をさました従僕の一人が月の光で窺つてゐたら、熊は天幕の前に立ち入口を覗いてから、またヒョコヒョコと立去つたさうである。

こんな風に、熊は山間の部落のついで傍迄山を降りて来て、熟した玉蜀黍の御馳走をあさるのだ。銃などは農民には禁斷の武器だから、熊は些かの危険もなくやりたい放題のことをやつて行く。バルタルといふ一村三戸ぎりの部落がある。凍結した山の超人たちがかこむ云はゞ釜の底のやうなところだが、之等の山々の高さは何れもモン・ブランよりも高い。此の部落へ着いたのがまるで瀧のやうな豪雨の際中だつた。バルタルから、徑は一萬一千五百呎もある峻嶮きはまらないツオジラ

の隘路を登攀する。従僕や馬曳きの回教信者たちは、聲を揚げて神の加護を祈り始めた。その祈りの齊唱が、まだうす暗い朝の空氣に翳々として流れる。

垂れこめた濃霧の中を峠の隘路を登攀して行く。山路は峡谷をのぞむ絶壁の懸崖に、はりついたごとくうねつてゐる。忽ち、汚れた積雪の盆地を遙かの足下に見るかと思へば、すでにまた龜裂の多い青い水河のある高地に出る。大きな瀑布がそのまま凍結したやうな感じだ。その上を吹く風の憎々しい冷たさ。とけた水は奔流し、兀鷹が連りに、眼も眩む深い谷へ矢のやうに舞ひ降る。苦しむ息を弾ませてゐる侏馬たちが吹き仆されさうだ。不意の叫聲に眼を上げると、隘路の曲角に、思ひがけず騾馬が一頭、重さうな荷をつけて現はれた。兩耳を尖らせ、積荷のかさで狭い崖路はいっぱいである。第二頭目が曲角に現はれ、續いて第三頭……總計四十頭の騾馬が、絶壁の懸崖の上を完全に封鎖してゐる。これはラダックの羊毛を輸送する隊商だつた。積荷のかさは老大で、右側の荷だけはすでに眼も眩む峡谷の上へ宙ぶらりんになつてゐる。隊商達と、我々の侏馬の馬曳きとの間に、舌打ちや怒號が始まる。ほんの一指尺位しかあるまいと見えた崖道を讓つて、無理矢理此の騾馬の隊商を通すのである。縦列の隊形をといいた騾馬と侏馬の組が、危険を冒して、一頭、また一頭と岩壁の凹みを利用してすれ違つて行く。もし一步あやまつたら、馬も積荷も丸損になる千番に一番の曲藝だから、馬も人も緊張しきつてゐる。

通り過ぎて岩道を降つて行く隊商の騾馬は、ちよつとおかしいほど平氣な顔で、百ポンド半から

二百ポンドもある重い荷を背中に、絶壁に沿つて降るのである。蹄のあたつた崖のへりが碎けて、ゴロ／＼と谷底へ轉つて行くのが見える。

騾馬の手綱をとる青年たちはラダック生れで皮膚が栗色にやけてゐる。皺だらけの埃にまみれたその顔は、雨にでも出會はない限り洗ひすゝがれるためしがないのであらう。ポロポロになつた不潔なフェルトのマントを羽織り、穴のあいたフェルトの靴と羊皮の丸帽をつけてゐる。帽子の縁はくるりと裏返してある。その下から黒いもつれた辮髪がだらりと下つてゐる。これは編みこんだ細紐で技工的に長さを増してゐるのだ。辮髪の末端は腰帶の下にはさんである。

登りの隘路はまだ／＼續く。日向へ出ると忽ちにして耐へられない暑さだが、日蔭へはひると峽谷の寒さが骨にしみる。やがて、峽谷の幅が廣くなり、同時に今までの野性を失つた。扁平な山の鞍部に、汚れた雪の丘が一つ立つてゐる。雪の丘は既に段階的にくぼみ始め、その穴のあいたあたりに雪解の水が渦をまいてゐる。馬は注意ぶかく此の雪を分けて進むのである。

周囲にはヒマラヤの氷河が暗鬱な尊大で凝然と冷たい。遠い山の尖端がキラ／＼と光つてゐる。

此邊の山々は何れも七千米以上の高山だが、名前はなくてたゞ一様に番號で數へられてゐる。今日までに人間の足跡を印したものはほんの僅かだ。

兀鷹はげたかの大きなやつが一羽、生肉を一切くはへて我々の頭上を掠めた、と見ると、折角の御馳走を落してしまつた。侏馬ちびうまの脚である、蹄も毛もまだ艶々つやくしてゐる。まだ死んだばかりの馬に違ひない。

平板な、溪流の水にじめじめした盆地に、見榮へもせぬ石の尖塔が二つ三つ立つてゐる。これがツォジラ峠の標高だ。

數百キロ米の長きに亘る此の鞍部は、ヒマラヤ山脈中でも唯一の著しい沈降地帯である。原始的な古さをもつこの隘路は、今日では着々改善され、いろいろと岩石の爆破工事も完成されたので天氣さへよければ決して難路といふほどではない。——此の旅行の歸途も私は此のツォジラを通つたが、その時は吹雪の中であまり快適ではなかつた。冬季にはひると此の隘路は閉ざされ、それを押して通行する旅行者には莫大な通行税が課せられる。侏馬一頭について十ルピー取られるし、荷擔かひぎの苦力くろいなども、夏季はきつかりルピーで備へたのに、此邊の相場としては驚ろくべき高額の五ルピーを要求する。それでも雪が深くなると荷物は勿論郵便物の行囊まで、此の苦力によつて凍結した溪流を埋める雪の橋の上を運ばれる。然も大抵の年では、月餘にわたつてあらゆる交通の杜絶が珍らしくない。

古來の難路と云はれた此のヒマラヤの峠路は、いろ／＼と見るべき改善がされてゐるに拘らず、相變らず犠牲者が多いやうだ。其處此處に、動物の骸骨や半ば腐敗した何とも知れぬ屍體が轉つてゐる。私が、石を疊んで作られた小さな墓地を見つけたのも、やはり此の隘路の近くだつた。此の下には、ツォジラの南の絶壁を永久に渡り得なかつた旅人たちが、荒涼とした寂莫の中に眠つてゐるのだ。墓石の上につき重ねられた小石の數々は、今日も尙ほ此の峠路を上下する友人たちの、故

人を忘れなかつた何よりの證據であらう。

墓地に隣接して一基の大きな墓石が孤立してゐる。何人か高貴な方の墓でもあらうか。それとも或ひは一時に遭難した隊商の一團の共同墓標でもあらうか。

強大な氷河が溶解した水を溪谷に落してゐる。青い氷の前景まで殆んど三百歩と距つてもゐないのに、此の落水の流れの凄じさはどうだ。その兩岸は不思議な高山植物で縁どられ、明るい龍膽や深山薄雪草などが花盛りである。ヒマラヤは今が夏だつた。然も山そのものは文字どほりの禿山である。南面にまだ壮大な森林を擁してゐるツォジラは、云はゞカシユミヤとラダックとの、印度と西藏高地との、植物生成の一境界を形成してゐるのだ。

マホイの寂莫とした農場の附近で、大規模な隊商に出會つた。明かに誰か歐羅巴人を主體とするもので南方へ行く途中と見えた。先頭は天幕、支柱、箱、行李等をそれぞれに負うた一團の馬。侏馬の頭の背に錫製の浴用だらひのあるのが眼立つ。續いて負ひ籠を背にした二名の苦力がヨクヨクと歩いて来る。籠の中から二頭の黄色いラダック犬の仔犬が物珍らしげに岩石と氷河ばかりの物凄世界を眺めてゐる。調理道具をつけた侏馬の背には蠅帳もあつた。最後に騎乗の一群が續く。カアキイ軍服の兵隊で頭にまいたタババンも共色だ。そしてその一群の一番最後の騎乗者が、高貴な身分の主人公である。彼は、ラダックに於けるイギリス政府の最高代表者でレエの聯合委員會員を兼ねる人物だ。彼が西藏國境の高地に駐在するのは夏の間の二ヶ月か三ヶ月だけ、今その期間

を終つてスリナガルの冬の官邸へ歸る旅なのである。此の豪華な大行列にも彼自身の懐中は一ルピイもいたまない。各管區からそれぞれに、無償で輸送馬も苦力も提供するのだ。現に二名の苦力の背に負はれてゐる二頭の愛犬の輸送費だつて同じことである。最初、私の今度の赤色ラマ旅行を禁じたのも此の若い軍人畑の高等委員である。獨逸の總領事が調停の一役を買つてくれたお蔭でやつと私の希望は容認されたのだつた。氣の向くまゝに、誰でも任意に此の國境を旅行できると考へるのは、確かに一つの錯覺であらう。だが、イギリスは自ら管理してゐる遠隔の地に、第三者が鼻を突込むことを喜ばないのである。首府レエへの交通に關しては、所謂『條約道路』の名に基づいていろいろ細かに規定や條文が山程も並べてある。それを全部承認した上に署名を求められ、旅行はレエまでで、それ以上西藏や東トルキスタンに及ぶことは決してしない、といふ一札を入れたのである。西藏や東トルキスタンへの旅行には、更に尙ほ一層特殊な認可が必要なのだ。西藏への交通路のもつ重要性は、イギリスに取つては國策上殆んど無限大と云つてよからう。これに較べれば東トルキスタンへの交通路は幾分軽いやうだ。いつの日にか、オツシャヤカシユガアル方面からの赤色ボルシエギイキが、カラコオル連峯の隘路にでも現はれたとしたら、そしてインド民衆に呼びかける日があるとしたら、それがイギリス帝國に取つて甚だ面白くない事であるのは云ふまでもなからう。

道は二三日來、狂躁なドラス溪流に沿うたきりである。耳も聳するばかりに奔騰する激湍の根原